

---

## Satan's contactor ~ 悪魔の契約者 ~

鬼柳堂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Satan's contactor 悪魔の契約者

### 【Nコード】

N0791M

### 【作者名】

鬼柳堂

### 【あらすじ】

幼い頃に起きた事件のせいで、『生きる』ということに何よりも執着する高校生、熾条統利は、突如通り魔によって命を奪われる。それでも、死ぬその瞬間まで生に執着した統利は、虚無の世界で悪魔と名乗る存在と出会う。「死してなお、生に執着し続けるとは……。面白い」悪魔に気に入られた統利は、生きるために悪魔と契約を結ぶ。次に統利が目覚めたのは、もといいた世界とは遥かに異なる異世界だった。



S a t a n ' s   c o n t a c t o r 〱 悪魔の契約者 〱 用語集 (前書き)

今度は真面目なやつです。多分。

## Satan's contractor 悪魔の契約者 用語集

### 虚界

統利をメフィストと契約させるために、作者が一秒で思い付いた何でもありの空間。世界はご都合主義で出来ている。

恐らく、第一節以外は出てこないか、出てきても言葉だけなので、そう言えばこんなあったな、程度に覚えていただければ結構です。覚えていたって何の特にもならない。

### 契約

統利が名も無き悪魔と交わした契約。統利の願い（生きること）のために、悪魔は全力で協力しなければいけないが、統利は契約終了時に悪魔に魂を捧げなければならない。但し、特定の条件下においてのみ、それが免除される。以下契約終了条件。

1・契約者或いは契約悪魔からの契約破棄要求による契約終了。契約者からの契約破棄の場合、契約悪魔は契約者の魂を奪う権利が発生する。契約悪魔からの契約破棄の場合、契約者に対する如何なるペナルティーも発生しない。

2・双方同意による契約終了。契約悪魔は契約者の魂を奪う権利を失うが、契約者もまた契約によって得た総てを失う。

3・片方或いは双方の死亡による契約強制終了。契約者が死亡した場合のみ、契約悪魔は契約者の魂を奪う権利が発生する。契約悪魔が死亡した場合、契約者に対するペナルティーは発生しない。

4・片方或いは双方の契約不履行による契約終了。契約を違えた側

にペナルティーが発生する。

5. 契約時に取り決めた、契約終了条件の実行による契約終了。契約者は、契約悪魔に魂を捧げる義務が発生する。

なお、統利とメフィストとの間で取り決められた契約終了条件は、  
「Verweile doch! Du bist so schön!」《瞬間よ止まれ、汝はいかにも美しい!》である。ちなみに訳はWikipediaから。

#### 魔術（契約）

統利が使用する魔術。元はメフィストのもので、これを使用するには虚界に接続しなければならない。結構魔力を消費する。虚界の魔術のため、基本なんでもありだが、魔力消費量が著しい上、その世界の魔術では出来ないことを虚界以外ですると、かなり疲れる。

#### 魔術（異世界）

統利が移動した先の世界の魔術。第一章では統利が前項の魔術を使っているため、正直地味。魔物とラスボスクラスの敵を除けば、第一章に出てくるキャラで、統利に匹敵するほどの魔力を持ち、この魔術を使用する奴は出てこないの。強力な魔術程、長い詠唱で意味を重ねなければならない。

#### 魔物

例外も居るが、殆どの魔獣は生まれついて魔術が使える。人間の魔術師にも遠く及ばないものから、天衝く力を持つものまで様々。

#### 種族

物語の舞台となる世界に住む種族。以下各種族説明。

## 人間

最も数が多く、亜人種と比べて短命のため、欲が強いものが多い。基本的にオールラウンダーだが、その為全体で見ると器用貧乏になりがち。極稀に、特定の分野で他の種族を凌駕する才能を持ったものが現れる。

## 巨人

曾ては神の隊列にその名を連ねていた魔物。現神族との戦争、ギガ巨神戦争に敗れ、魔物に墮とされた。神の座を追われ、魔物となった今でも、その圧倒的な力は健在。ギガント族、ヘカトンケイル族、キュクロプス族、ネフィリア族、トロール族がいる。後になるほど低級。神であった頃はティタン族と呼ばれていた。

## 魔人

厳密には種族ではないが、人間の中で特に強力な魔力を持ったものがこう呼ばれる。一応統利も魔人。

## エルフ

ダークエルフとライトエルフが居る。一般的にエルフと言う場合には、ライトエルフを指すことが多い。だが、一部では両エルフの祖先であるハイエルフの事をこう呼ぶ。

## ダークエルフ

ハイエルフより分かれた暗黒のエルフ。その名の通り、闇の性質を持ち、一切の光の射さぬ地底深くに住む。ライトエルフとは、「遭えば大地が深紅に染まる」と言われる程仲が悪い。

その性質のわりには、他種族と交易を持つことも多く、同性質の種族や、それ以外では一部の人間と取引を行う。

能力面でライトエルフとの差違はほとんど無い。ライトエルフと同じく魔力が強く、洗練された文明を持つ。また、種族の特徴として、完全な暗闇でも視力が奪われることはない。

### ライトエルフ

ハイエルフより分かれたたエルフ。その名の通り、光の性質を持つ。ダークエルフとは違い、地上の森林など、自然豊かなところに住む。その種族としての優秀さから、他種族に対して傲慢なところがあるが、一度認めた者には、種族関係なく最上の敬意と友情を持って接する。

他種族との交流もあるが、その殆どが個人でのもので種族単位での交流は少ない。

### ドラゴン

ギガントマキア

曾て、巨神戦争で流れた神々の血より生まれた生物。元が神の一部なため、この世界においては比類無き力を持つ。

その鱗の色に応じて、性格や能力が違う。

### 武器

以下この物語に登場する武器一覧。

### 鞭剣

統利が魔術（契約）で創った武器。作者の変わった武器を登場させたという考えから生まれた特殊剣。魔力を込めることでギミックが作動するため、魔力を持たないものが使用しても、阿呆みたいに頑丈な長剣にしかない。鞭状に成っている時は、使用者の魔力が続く限り無限に伸ばす事ができる。また、刀身は魔力で操っている。蛇腹剣とも。



石斧

統利に惨殺された巨人が使っていたもの。素材が石で切れ味も悪いが、無駄にでかく威力もかなりのもの。

異世界

本作の舞台。この世界には神が存在し、世界を創生した。

二つの大陸と無数の群島から成っている。名前未定。

## 序章（前書き）

取敢ず序章。

少し内容が暗いのでお氣をつけください。

## 序章

ドスッ

「…………え？」

突如、脇腹に衝撃を感じた熾条統利しじょうとうりは、自分の身に何が起こったか分からず、間拔けな声を上げた。

脇腹が焼けるように熱い。

統利は未だ混乱がおさまらぬままに、違和感を感じる脇腹に目を遣った。

其処には、本来あるべきではないものがはえている。否、正しくは刺さっていると言っべきだろう。

まず最初に見えたのは黒い柄。そして、ほぼ根本まで身体に刺さっている刃。

（出刃包丁！？ 何でそんなものが……）

理解できない。包丁というものは、台所にこそあれ、人体に刺さっていて良いものではない筈だ。

頭が混乱する。まともに思考することが出来ない。

思考に靄がかかった頭で、ようやく自分の状態を把握する。

（刺されたのか、俺は）

普段では考えられないほど思考が遅い。

（ぐっ！）

自分が刺されたことを理解したためか、痛みが急激に統利を襲う。だが、その痛みを感じると同時に、全身の感覚が抜けていく。

誰かが叫んでいるのが聞こえる。

誰かが救急車を呼ぶ声が聞こえる。

世界が傾き、地面に叩きつけられる。

すべての感覚が消えていくなか、統利は自分の命が尽きようとしていることを自覚する。

（……嫌だ、死にたくない）

生への執着。それは、統利の性格の根幹を成しているもの。

幼い頃、目の前で親兄弟を殺されて以来、同世代の子供たちはおるか、この国に住まう誰よりも強く、生への執着を抱き続けてきた。

幼くして、間近で死を見せつけられたが故に。

親兄弟がその犠牲となったが故に。

そして何より、自分が生き残ったのは、その殺人鬼の只の気まぐれでしかないと理解したが故に。

死への恐怖は、常人では到底理解し得ぬ程の生への執着となり、少年の心に刻まれた。

だが、そんな異常なまでの執着すら、統利の死を覆すことは叶わない。

（嫌だ……、嫌だ、嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。死にたくない）

何を思おうと、どれだけ生に執着しようと、もはや意味を成さない。血溜まりが広がっていく。暗転する視界の中、統利は最後の言葉を紡いだ。

「俺は……まだ……生きて」

16時13分、熾条統利死亡確認

## 序章（後書き）

……ナニコレ。

いやいやいや、自分で書いておいて何ですが、今現在心の底からそう思っています。

うゝむ……、これ本当は、パロディの入ったちよつとコメディな異世界召喚ものになるはずだったんですけど、何をどう間違ったのやら……。

取敢ず序章がこんなものになってしまったため、一話以降を構成し直しているの、序章のみの投稿です。

一話以降はもう少し明るい話になる予定です。

## 第一章：第一節 契約

暗い。

何も見えず、何も聞こえず、何も感じない。

それどころか、思考しているということすら実感できない。

そんな虚無の世界を、統利の意識は漂っていた。

「ほう、この空間で消滅せずに居られるとは……」

声が聞こえる。心に直接語り掛けてくるような、妖しい旋律をたたえた、どこか中性的ながらも低い『声』。

「生への執着か。死してなお、生に執着し続けるとは……。面白い」

まるで、統利を誘うかのように、からかつかのように、その『声』は続けた。

「熾条統利、聞こえているのであろう？ 目を覚ましたらどうだ。人が話しているときに眠っているとは、無礼ではないか」

目を覚ます？ 身体感覚もないのに、どうやって

「そう思い込んでいるだけだ。大体、思考していることが実感できずとも、思考自体はできているであろうが」

なら、どうすれば

「知れたこと。思考すればよい。なにせここは、実体の存在しない虚体の世界。真実の存在しない虚実の世界。何も存在しない虚無の世界。そして」

その『声』は、寝付かぬ幼子に、子守唄を聞かせるかのような口調で、

「ありとあらゆる全ての存在する矛盾の世界」

宣言した。

矛盾の……世界

「然り。死してなお、生への執着を抱き続けるなどという矛盾を内包したおぬしなればこそ、この空間にて存在していられる。ならば、己の姿形を思い描くだけで、その実体を得る事ができよう。思考しろというのはそういうことだ」

自分の姿を思い浮かべる

そう意識した瞬間、消えていた身体感覚が戻ってくるのが分かった。靄が掛かったようになっていた思考も、徐々に鮮明さを増していく。

「あ……あ、ああ……」

最初に声が戻った。

「そつだ、それでよい。さあ、思考せよ。汝が知る己の姿を思い浮かべよ」



聴覚が戻る。声の聞こえ方が変わった。確かに耳で聞き取っている。

触覚が、味覚が、嗅覚が、戻ってくるのが感じられた。

「あ……ああ……。俺……は……」

「ふん、この短時間で己を取り戻すとは……。そこまで生きたいか」  
「生……き……る」

「  
そうだ、ずっとその為だけに全てをかけていた。生きるために生きてきた。」

「さあ、目覚めよ……。汝は誰ぞ？」

声が問いかけてくる。

お前は誰だ、と。

お前は何だ、と。

「俺は……」

俺は……、

「俺は……！」

全てが戻ってくる。

鮮明な思考ではない。

確かな身体感覚ではない。

かつて統利が、死ぬその瞬間まで抱き続けてきたもの。

統利の根幹を成していた『生きること』への執着。

それが、再び統利の心へと沸き上がってくる。

「俺は……熾条統利だ……！」      その瞬間、世界が、生まれた。

｝side    ???｝

「俺は……熾条統利だ……！」

統利が叫ぶ。

「ほう……」

虚無でありながら、あらゆる全ての存在する矛盾の世界。そして、それ故に他のどの世界よりも不確かで脆く、臍な世界。

それが、たった独りの人間に認識されただけで、何よりも確かな存在として顕現した。

ありえない、とは思わない。

この世界、と言うよりこの空間の性質上、ここで行われた人間の思考は、直接この世界の有り様にすら干渉する。

本来、この空間で実体を持つことは困難なため、思考による世界への干渉でそれを補完しているのだ。

しかし、

（よもや、其れを実行できる人間が居ようとは……）

今までに、統利以外にここに来た人間が居なかったわけでは無い。全員とは言わないが、実体化することができたものも居た。

実体を持つと言う事は、世界を認識し、また、世界からその実体を認識されるということ。

だが、この世界は脆く儚い。いきなり過度な干渉を受ければ、ただでさえ不安定な世界の構成が破綻し、空間ごと崩壊してしまう。無論、その中に居る人間も、だ。だというのに、

（この世界がいつになく安定している……。こやつ意思、否、執着が世界を創り変えたか）

面白い。

とても、面白い。

やはり、こやつこそ我と契約するに相応しい。湧き出る歓喜を隠しながら、『声』は統利に話しかけた。

「気分はどうだ？」

「

）side 統利）

叫ぶと同時に、視覚が戻ってくる。

さっきまでの意識だけの状態の時とは違い、世界がより確かなものとして実感できる。

（……しかし、虚無でありながら全てが存在する矛盾の世界、か）  
成る程、実体を得ることで、それがいやと言っほど実感できる。  
この世界には、淋しいほどに何も無い。だが、同時にあらゆる存在を気配として感じとることができる。

現実世界ではあり得ない現象だが、この世界ではそれが成り立つ

ている。だからこそ、矛盾の世界。

「気分はどうだ？ 再び実体を得た気分は」

体の感覚を確かめていると、『声』が話しかけてきた。

「……とても良い気分だ。死ぬ前よりも、な」

「それは何よりだ」

統利の答えに、まるでからかうような『声』が返ってきた。相変わらず『声』の主の姿は見えない。

「そんなことはどうでもいい。ここは何処だ？ 否……、それより、俺は死んだんじゃないのか」

統利は、姿見えぬ『声』に詰め寄った。

「……やれやれ、実体を得たとたん其れか。もう少し実体の感覚を楽しんだらどうだ？」

統利の質問には答えず、呆れたようにため息を吐く『声』。

「答える！ 俺はどうなった！」

「せっかちな奴よ。……おぬしがどうなったかは、おぬが一番分かっている？」

確かに分かっていたが、実際にそうだと断言されると、思いの外衝撃があった。

「やはり俺は死んだのか？ ならば、ならばここに居る俺はなんな

んだ！　ここは死後の世界とでもいうのか！？」

「ここがどういった世界かについては、先程教えた以上の説明は難しいな……。死後の世界というのも、あながち間違いではない。生物は死して後、等しくここに来る事になる。……そういう意味では、今のおぬしは仮の肉体を得た魂とも言える」

仮の肉体を得た魂。だが、何にせよ死んだことには変わり無いではないか。

あれほど生に執着し続けてきたのに、偶然現れた通り魔にあっさりと刺されて、足掻くことすら出来ず、ただ生に執着するだけで、死んだ。

こんなつ、こんなことが有って良いのか！　こんなつ、なにも出来ずにっ

「案ずるな。未だおぬしに生きる術がないわけではない」

それを聞いた統利は、今までで最も強い反応を示した。

「それは本当か！　どうすればいいんだ！」

「そう難しいことではない。我と契約すればよい。ただ其れだけで、おぬしは新たな命と生きるための力を得るだろう」

契約。それを行うだけで、再び生きる事ができるという。統利にとっては、願ってもない話だ。

だが、流石の統利でいえど、二つ返事で是と答えるわけにはいかない。

「そもそも、お前は何者だ。何故俺に再び生を与えようとする」

「……其れはまず最初に聞くべき事だと思うが……。まあいい、我

は……そうだな、おぬしら人間が悪魔や死神と呼ぶ存在だ。……そう身構えるな、なにも今すぐおぬしの魂をもらおうというわけではない」

今すぐはもらはない、ということとは、

「いつかはもらうという事だろう?。」

ならば、身構えるなという方が無理だ。

「人の話は最後まで聞かぬか。我がおぬしの魂をもらうのは、おぬしが特定の言葉を口にしたときよ。其れまでは、全力でおぬしを守り、生き延びさせると誓おうぞ」

命を奪うものでないのであれば、問題はない。それが例え悪魔であろうとも、生きるためならば喜んで魂を売ろう。

「……いいだろう、契約だ!」

統利が契約の承認を口にすると、身体の中になにかが入ってくるのが感じられた。

「これは……」

『契約は成った。これよりは、おぬしを我の主とし、その願い全てを叶えることを誓おう』

今までのように耳で聞き取るのではなく、頭に直接『声』が聞こえてくる。

「お前の事は何と呼べばいい」

『好きにしる。我に名など無い。それに、今の我はおぬしそのもの』

『よ』

統利と同化しているということだろう。頭に直接響いてくるこの声も、それが要因か。

『さて、おぬしの元居た世界では、おぬしはすでに死んでおる。故に、おぬしが元居た世界とは違う世界で暮らすことになるが……』  
『構わない。生きていられるのであれば』  
『ふん、おぬしらしい。では、往くか』

その言葉と共に、統利の目前に扉が現れる。それは、存在するが存在しない矛盾の扉。世界を繋ぐ異界の扉。

「ああ、往こう」

そして、統利は扉を潜った。

T O b e c o n t i n u e d

## 第一章：第一節 契約（後書き）

というわけで第一章です。

ていうか長っ、契約するまで長いよ！

当初の予定通りいけば良かったんですけど、序章があんなのになつてしまったので……。

取敢ず、次からはファンタジーっぽい展開になっていく予定です。

と言っか、なります。はい。

まあ、こんな主人公達と駄文しか書けない作者ですが、何卒これからもよろしく願います。



## 第一章：第二節 遭遇

その扉を潜った先には、木々の鬱蒼と繁る森があった。

「ここは……」

『おぬし 主の新しく住まうことになる世界だ。この場所は……  
どうやら、幻魔の森と呼ばれている所らしい』

幻魔の森？ と統利は尋ねた。

『然り。この森は、大気中に含まれる魔力量が、異常なほど多い。  
故に、この森には様々な魔物たちが生息している。一説では、この  
大陸に存在する魔物の種類、ゆづに三桁を超えるその、凡そ八割  
がこの森には住まうという』

それを聞いて、不安が統利を襲う。

そもそも、魔物が存在するなど聞いていない。しかも、大陸に生  
息する三桁以上の魔物の種類の内、八割までもがこの森にいるとは  
……。この悪魔は、本当に統利の命を助けるつもりがあるのだろ  
うか？

「大丈夫なのか？ 正直、魔物なんぞと遭遇して逃げ切れる自信は  
ないぞ」

『問題ない。仮にもこの我と契約しておるのだぞ？ そこいらの魔  
物ごとき、塵に等しい』

普通に戦っても勝てるということだろうが、それならまず最初に  
教えておいてほしかった。

むしろ、この世界に移動する前に、そういうことは教えておくの

が筋というものだろう。

「聞かなかった僕も悪いが、そういうことはなるべく早く教えてくれ……。で？ 戦うにしても、魔物との戦い方なんてわからないぞ。武術は一通りやっていたが、あくまで対人戦だから」

魔物と聞いて想像するのは、RPGやファンタジー小説に出てくるようなのだが、実際に戦えと言われても困る。元居た世界でも、猛獣の類いと戦ったことは無いし、ましてやそれらを遥かに凌ぐであろう魔物と戦うなど、出来ればごめんこうむりたい。

大体、幾ら力で魔物を凌駕していようと、それを使いこなせなければ意味がない。百の力を持っていたても、その内十の力しか使えない者と、二十の力しか持っていないが、二十全てを使える者とは、どちらが勝つかなど言うまでもないだろう。

『案ずるな。我と契約して得た力の使い方は、主の頭に入っている。一度も使ったことの無い力であろうと、それを十二分に使いこなせよう』

「そういうものか。だが、実際に魔物と向き合ってまともに戦えるのか？ いくら勝てるとわかっていても、怖いものは怖いだろう。それが今まで見たことの無いものであれば尚更だ」

何が問題かと言えば、それが問題だ。力の使い方が頭に入っているというのなら、それはいい。が、まさかこの悪魔も統利の精神までは弄ってはいないだろう。たぶん。

『主が魔物ごときに恐れをなすとは思えぬが……何れにせよ、死にたくなくば戦うしかあるまい。魔物と遭遇せずに、この森から出るなど出来ぬしな』

「お前は本当になんて所に連れてきてくれたんだ……！」

やはりこいつは信用できないと思いながら、統利はこれからの事を考える。

（取り敢えず、今は魔術の使い方を確認するか。……魔物と遭遇しない内に）

「というわけで、どうすれば良い？ 使い方が頭に入っているとは言っても、何処から手をつければ良いのかわからん」

『ふむ、ならば今の内に簡単に説明しておこう。まず、主が得た我の魔術は、この世界で使われている魔術とは異なる。この世界の魔術は呪文の詠唱を必要とするが、我の魔術は、我の居た 仮に虚界としておくが 虚界の力を引き出して使っているのだ。故に、態々呪文を詠唱する必要など無い』

虚界 あの矛盾の世界の事では、思考が直接世界の有り様に干渉していた。その力を引き出して使うということは、思考した結果がそのまま魔術となるということだろう。

『虚界とは我を通じて常に繋がった状態にある。故に、文字通り思考するだけでよい』

思考するだけ、というのも聞けば簡単だが、実際には使いたい魔術の効果や形状など、かなり細かく想像する必要があるようだ。

（試しになにかやってみるか。取り敢えず、何ができるんだ？）

統利は、与えられた魔術の知識を参照するが、限度はあるにせよ、基本的に出来ない事はないらしい。

『武器でも作ってみてはどうだ。我の魔術が使えるとはいえ、素手

では心許なかるう』

確かに、人を遙かに凌駕する魔物と戦うのに素手では、いささか不安だ。

『虚界で製造した武器を、現実世界に取り出すのだ』  
「虚界で製造……」

統利は、あの恐ろしくも不思議な世界を思い描く。

すると、体は現実世界にありながらも、精神の一部だけが虚界に転移したかのような、奇妙な感覚に襲われた。

（これが、魔術……！）

その感覚を保ったまま、統利は武器を想像する。

（形状は……剣型……）

想像し、思考する。思考は形となり、想像より創造され、虚界に一振りの剣が創られる。

（これを……現実世界に取り出す……）

右手が熱い。

黒い光と共に、右手に何処か禍々しさを感じさせる、赤黒い刀身の長剣が現れる。

『其れが、主の創りし武器か……。なんとも禍々しい剣よ』  
（その時）

それについては、統利も驚いている。そもそも、そこまで細かく想像してはいない。精々が、剣という形状ともう一つ、ある特殊な機構だけだ。

『まあ……それが主の心の具現ということだろう』

「……」

『其れよりも……一度作り出した武器は、虚界に収納しておくというわけにはいかぬ。鞘も創っておくがよい』

「虚界に保存が出来ない？　どういうことだ」

『虚界では、意思のあるものしか存在できぬ。生物ですらない武器では、言うまでもなかるう』

武器を創るには、ある程度の時間が必要だ。戦闘の度に一々創り出す訳にもいかない。これで虚界に保存が出来ないとすると、この悪魔の言うように常に身に付けておくしかない。

「仕方ないな」

統利は、再び虚界に接続し、鞘で剣を吊るすベルトを創りあげる。

一度剣を創った事で慣れたのか、今度はそれほど労力をかけずに創ることが出来た。

「取り敢えず、これで剣を　！」

統利は、突如響いた剣櫛の音に、帯剣しようとしていた手を止める。

「おい」

『気付いたか、主よ、何者かが人型の魔物と戦っているようだ……』

どうやら、魔物の相手をしているのは、若い人間の雌姓体のようだな」

「何処だ？」

統利は素早く帯剣し、戦闘の起こっている場所を尋ねた。

『行く気か？ 魔物がいるのだぞ』

「人型なら、それほど気圧されずにすむ。何より、お前の魔術がこの世界でどれ程通用するのも見ておきたい」

この悪魔は、自分と契約した統利には敵うものはいないと言っているが、どれ程信用して良いものか分からない。いざというときに、実は手も足も出ませんでした、なんて事にはなって欲しくはない。その為にも、ここで調べておく必要がある。

『ならば急いだ方がよろう。この森には道らしい道はない、魔物と戦っている者も、苦戦しているようだ』

「分かった。案内してくれ」『承知』

出来れば、魔物と戦っている者も助けたいと思っている。

統利は、彼の契約悪魔が述べる方向に向かって走り出した。

『そつえば主よ』

戦闘地点への移動中に、悪魔が話しかけてきた。

「何だ？ なにか問題でも起こったか？」

もしや戦っている人間が危ないのか、とも思ったが、どうもそういう雰囲気でもない。

『否……そうではない。そろそろ私の呼び名を考えてはくれぬか』

今言うことか？ と反論しかけたが、どうせこの悪魔は分かっているのだろう。

「後じゃ駄目か？」

『今が良い』

くそつたれ！

統利は内心で毒付きながらも、悪魔の要望を叶えるべく思考を巡らせた。

「……メフィスト」

『む？』

「メフィスト、お前の名前はメフィストだ」

メフィストフェレス　ゲートの『ファウスト』で、ファウストと契約して悪魔の名前だ。

この名前にしたのは特に意味はない。ただ真っ先に思い付いたのが、これだっただけの事だ。

『メフィスト……か、悪くない。気に入ったぞ』

悪魔改めメフィストは、満更でもなさそうに答えた。

「そうか、それはよかった！」

適当に返事をしながら、統利はスピードを上げる。  
ついさっき気が付いたことだが、この世界に来て　　と言っ  
も、メフィストと契約して　　、基本的な身体能力も向上している  
ようだ。

「あとどれくらいだ、メフィスト」

『凡そ五百だ……む！？』

「どうした、メフィスト？」

剣戟の音が止んだ。一時休戦となったか、それとも……決着がついたか。

前者は兎も角、後者であれば、魔物と戦っている若い女性が勝っている可能性は低いだろう。メフィストの言を信用するならば、彼女は苦戦していたようだから。

「くっ……！」

木々の生い茂る森では、危険と言えるほどの速度を出し、統利は戦闘が行われていた場所に急行した。

（見えた、あれか　　！？）

森が突如途切れ、戦闘が行われていたと思われる広場が現れた。そこには、腹部に大きな傷を負い、地面に倒れたままピクリとも動かない、十代後半頃の少女　　恐らく彼女が魔物と戦っていた人間だろう　　と、灰色熊グリスリーをも超える身長の人型の魔物　　巨人が居た。



### 第三節 戦闘に続く

## 第一章：第二節 遭遇（後書き）

と言う訳で、最初の敵が出てきました。第三節で戦います。

さて、漸く異世界に來たわけですが、すいません。統利とメフィスト以外のキャラは第三節に出ます。

後、メフィストの命名理由は作中の地の文で出ているものと同じです。どうでも良いですね。はい。

第三節も近い内に投稿します。

感想などいただければ嬉しいです。

## 第一章：第三節 戦闘（前書き）

漸く更新致しました。

第二節の二倍ほどあります。

## 第一章：第三節 戦闘

「な……！！」

統利は、驚きながらも慌てて足を止める。危うく、あれの目の前に飛び出してしまうところだった。

統利がいる場所は、ちょうど巨人の死角になっているため、まだ見つかつてはいないようだ。

「どういうことだ。あんなのが居るなんて、聞いてないぞ……！」

小声でメフィストに抗議するが、全く動じた様子もなくメフィストは答えた。

『巨人とて、人型の魔物であろうが。我はどんな魔物が居るかなど、聞かれてはおらぬぞ』

確かに、統利もそこまでは聞いてはいない。だが、まさか巨人が出てくるとは……精々が、ゴブリンかオークぐらいだろうと思っていた。

「次からは、魔物の種類まで報告しろ」

『よかるう……それで、あやつはどうするのだ？』

出来れば逃げ出したいところだが、距離が微妙だ。もし逃げようとして音をたてれば、確実に気付かれるだろう。

なら、音をたてずに逃げれば良いのだが、統利の周囲には無数の枝や枯れ葉が落ちている。むしろ、ここに来たときに気づかれなかったことが奇跡だ。

「逃げるのは難しいとなると、戦うしかないか……メフィスト、勝てると思うか？」

『其れは主次第だが、実力的には問題ない。後は、主が気圧されずに済むかどうかだ』

そればかりは自信がない。統利とてメフィスト契約するまでは、只の十七の高校生だったのだ。いかに武術を修めようと、実際に命をかけた死闘は経験がない。

「なのに、初めての死闘の相手があれか……」

巨人に気づかれないように、小さく嘆息する。

（仕方ない、今さら逃げるのも無理だ。なら……せめて、やられる前に）

剣を脇に構え、意識を巨人に集中させる。

周りの雑多な景色を意識から閉め出し、

「殺るか」

一息に樹の影から飛び出した。

二歩目でトップスピードに乗り、一気に間合いを詰める。最早巨人に気付かれようととも構わない。

統利から溢れる殺気に気付いたのか、巨人が緩慢な動きで振り返ろうとする。だが、

（遅い！）

巨人が防御や迎撃の体勢をとる前に、統利の剣の間合いに入る。

「はっ！」

短く息を吐き呼吸を整え、すれ違いざまに巨人の胴を斬り上げる。

ガキイン！

「ぐっ！？」

必殺の思いと共に、巨人の胴に吸い込まれていった斬撃は、しかし統利の思いに反して、音を立てて弾かれた。

「くそっ！」

斬りつけた勢いのまま、統利が前方に身を投げると、寸前まで体のあつた場所に、巨人の大木のような腕が振り降ろされた。

避けるのが半秒でも遅れていれば、今頃統利の体は粉々になっていただろう。

（剣が通じない？ どういう事だ）

『一つ、言い忘れていたが、巨人の皮膚は大量の魔力が染み込んでいるせいで、鋼よりも硬い。気を付けよ』

「遅いよ！」

メフィストに抗議しながらも、統利は巨人から目が離せない。

巨人の動きに注意しているから、ではない。それもあるが、統利

が巨人から目を離せないのは、その威圧感に圧倒されていたから。

体がすくむ。森に隠れて様子を窺っていたときとは、とても比べ物になら無い程のそれに、統利は既に吞まれかけていた。

『主、避けよ！』

メフィストの声に、はっとして我を取り戻す統利。その目の前には、巨人の石斧が迫っていた。  
最早回避は間に合わない。

ガガッ！

巨人の石斧が、統利の剣を音を立てながら滑っていく。

（ぐっ、完全に受け流したのに、腕が……！）

受け流してこれだ、まともに喰らったら、文字通り押し潰されてしまうだろう。

巨人の追撃が来る前に、急いで飛び退き、剣を構える。  
巨人も石斧を構え直し、再び睨み合うような状況になる。

（さて、どうするか）

まず、まともに斬り合うことはできない。身体能力が上がっている今でさえ、目の前の巨人とは圧倒的な力の開きがある。まともに斬り合おうとしたところで、一方的にダメージを食らうだけだ。

さらに悪いことにこの巨人、思いの外動きが早い。鈍重そうな見た目に反し、かなり俊敏に動く。

『気を付けよ、あやつの攻撃が掠りでもすれば、人間などひとまりもなかるう』

「そんなこといったって、あの速度だ、いつまでも避け続けられないぞ」

『ならば、一撃で決めればよかるう。相手に攻撃の隙を与えねば、避ける必要はあるまい』

簡単に言ってくれる。それが出来ないから、今こうして悩んでいるというのに。

「グガアアア！」

どう戦ったものかと悩んでいると、巨人が吼声を上げ、統利に向かって斬りかかってくる。

真一文字に振られた石斧をしゃがんで避け、振りきられた巨人の腕を斬りつける。

が、巨人の皮膚に傷一つ付けることなく、剣は弾き返され、統利破体勢を崩した。

「しまっ　　！」　そこへ、巨人の石斧が襲い掛かってくる。

辛うじて剣で受け止めるが、勢いを殺せずに吹き飛ばされ、背中から樹に叩きつけられた。

「がはっ！」

衝撃と激痛で息が詰まり、一瞬視界が白に染まる。もしかしたら、骨に罅くらい入ったかもしれない。

荒く息を吐きながら、樹に手をついて立ち上がる。



『主、魔術を使え。剣を強化すれば、あやつにもダメージを与えよう』

「魔術か……なれない技を実戦で使いたくはなかったが……」

ここで躊躇っていても、あの巨人にあつという間に肉塊に変えられるだろう。やらねば、あるのは死だけだ。

統利は、敵を目前にしながらも、目を瞑った。

本来なら、自殺行為以外のなにものでもないが、ここで焦って不完全な魔術で戦っても、返り討ちになるだけ。ならば、危険でも意識を集中して、完全な魔術を使う方が良い。

まあ、それを言うなら、慣れないなどと言ってないで、最初から使っていればよかったのだが。

（取り敢えず、剣の切れ味を強化して……後は……）

自分の中の魔力を探り、それを手に持つ剣に流し込む。

そんな統利に隙を見たか、巨人が斬りかかってくるのが気配で感じ取れた。

統利と巨人の間の距離は、凡そ八十、巨人の体躯ならば数歩で渡れるだろう。

徐々に、だが恐るべき早さで迫ってくる死を感じながら、統利の心は不思議と落ち着いていた。

何故か、自分がこの戦いで死ぬことはないだろうと思える。それが契約で得た力ゆえか、メフィストが統利の精神に干渉したのかは分からない。只、統利は自分の生のみを確信していた。

「グオオオオオオ！」

目を瞑り、微動だにしない統利の頭上に、死が振りおろされる。

S i d e    ? ? ?

その巨人は困惑していた。訳が分からない。

巨人は『強者』の筈だった。己以外の存在は、巨人の気まぐれで命を落とす、巨人に生を弄ばれるだけの『弱者』で、それは今目の前にいるこの人間も同じだと思っていた。

だというのに、何故このような状況になっているのだ。

その日巨人は、人間の雌と戦っていた。巨人が森を歩いていると、行きなり襲いかかってきたのだ。

人間にしては強かったが、それでも巨人の敵ではなく、すぐに動かなくなった。

それからねぐらに帰ろうと、背後の森に振り向きかけた時、今度は人間の雄が襲い掛かってきた。

その雄は、さっき殺した雌よりもしぶとかったが、とうとう諦めたのか、なんの抵抗もしようとせず、あるうことが目を瞑った。獲物がなんの抵抗もしなくなったことに、少しがっかりしたが、次の瞬間には殺戮への歓喜がわいてきた。

巨人は一気に距離を詰め、なんの抵抗も示さなくなった獲物に、右腕の石斧を振り下ろした。

何時ものように、獲物の無惨な死体が出来ることを疑わずに。

何が起ったか分からない。どうして目の前の獲物は、全くの無傷なのか、いや、そんなことよりも、どうして石斧を持っていた腕が、半ばからなくなっているのか。

困惑と混乱の中、巨人は目の前の獲物の声を聞いた。

S i d e      統利

ザシュッ！

生々しい音が響き、巨人の腕が宙を舞う。  
ギリギリで魔術の発動が完了した。あと少しで、物言わぬ肉塊に変えられるところだった。

（流石に少し焦った。目を開けたら、目の前に石斧だもんな）

だが、これで巨人に攻撃が通用する。先程までは、傷一つ与えられなかったのに、今は軽く剣を振るっただけで腕を斬り飛ばせた。

「さあ、殺し合いを始めようじゃないか、バケモノ」

そう宣言し、混乱しているのか動こうとしない巨人の、がら空きの胴体に蹴撃を食らわせる。

「ガゲエッ！」

魔術で強化された一撃をまともに食らい、先程の統利のように呆気なく吹き飛んだ。

「凄いな、魔術で強化しただけで、ここまで身体能力が上がるのか」  
『最初から使っておれば、苦戦することもなかったであろうに』

それについては反省しているが、そもそもメフィストが魔物の種類まで教えていれば、こんなことに首を突っ込まずに済んだのだ。

『余計なことを考えている場合か？ あやつはまだ生きておるぞ』

その言葉に巨人の方を見やると、ゆっくりと起き上がっているところだった。

「折角だ、色々試してみるか」

巨人に手を翳し、魔力を集中させる。

想像するは熱、万物を燃やし尽くす灼熱の業火。

「詠唱略……術式：獄焰」

巨大な炎弾が、火の粉を撒き散らしながら、高速で巨人に衝突し、盛大に爆発した。

「殺ったか？」

爆煙が晴れると、炎弾が直撃したところは炭化しているものの、それ以外は目立つ外傷のない巨人が立っていた。

『火力が足りなかったな、あれでは怒らせただけだ』

「魔術耐性が高いのか。剣で直接殺るしかないな」

痛みで我を忘れたのか、雄叫びをあげながらがむしゃらに突っ込んでくる。

それに対し、統利は剣を片手で構え応戦する。

「ガアアア！」

統利を押し潰さんと迫ってくるこぶしを避け、その左腕も切り落とした。

「グギャツ！」

痛みで暴れる巨人から距離を取り、構えを解く。

「攻撃さえ通用すれば、大したことはないな……。さて……。折角だ、俺の秘剣を見て逝くが良い」

そう言うや否や、統利は剣に魔力を流し込んだ。強化のためではない。この剣を創る際、剣という形状以外に、唯一設定した機能を起動するためだ。

剣に込められた魔力量が一定に達し、剣が赤黒く淡い輝きを放った。

その光が刀身全てを包むと、その刀身が縦に幾つかの欠片に解れ、鞭状になる。

鞭剣。それが、この種類の剣の名前だ。

（我流……秘剣・蛇）  
くちなわ

統利が鞭剣を振るうと、魔力によって操られた刀身が、さながら、生きた蛇のように巨人の体に巻き付いた。

腕の切り落とされた巨人に、その魔剣から逃れる術はない。

「……無慚と散れや」

統利が鞭剣の柄を引き寄せると、それに連動して刃が巨人を切り裂いた。

否、切り裂いたなどという生易しいものではない、切り分けられた。

それこそ、六十センチ以上の塊がないほどに。

呆気ない、余りにも呆気ない程に、幾多の命を奪ってきた魔物は、その生を終えた。

「ふう……さて」

雨のように降り注ぐ血を被りながら、統利は巨人にやられた少女の元に駆け寄った。

見目麗しい少女だ。未だ成熟しきつてはいないながらも、後二三年もすれば、稀代の美女と呼ばれていたかもしれないと、そう思わせる美貌をしている。

その、血にまみれてなお美しい容貌も既に青白く、生気を宿してはいない。

『駄目だな、完全に息絶えておる』

「そうか……」

出来れば助けたかったが、戦闘が長引いた上に、そもそも統利が来たときには虫の息だった。結局助けることはできなかっただろう。それでも、もしもと思っってしまうのは、統利が甘い証拠だろうか。

「よし！」

少女の遺体に手を伸ばし、そのまま抱き上げる。

『主？ 何をする気だ』

「何って……彼女を運ぶんだよ、近くの街まで。こんなところに放置していたら、魔物に食い荒らされるだろ」

それを聞いたメフィストは絶句した。何を言っているのだ、こいつは。生きるために悪魔へも魂を売ったのではないのか？ なのに、何故この森で余計な荷物を背負い込む。まして、その雌姓体は既に死んでおるのだぞ！

「俺の目的が生きることだからだよ。必死に生きるために戦った者を、こんな所に置いては行けない」

『……魔物に襲われたらどうする』

「その時は自分の命を優先するさ。俺だって、そこまでする程お人好しじゃないさ」

『今でも十分すぎるわ、愚か者！』

「自覚してるよ。メフィスト、案内を頼む」

『やれやれ、とんだ変わり者と契約したものだ』

メフィストの嫌味に苦笑しながら、統利は森に入っていくた。

「ここか」

目の前にあるのは、石造りの頑丈そうな城壁。  
メフィストによれば、この街ガラドヘイムは地方都市らしいが、  
ここまで堅牢そうな城壁を持つのは、幻魔の森に接しているためだ  
ろう。

『それで、これからどうするのだ？』

「街に入る」

『死体を抱えてか？』

「何のために運んできたと思ってるんだ」

『……まあ良い、精々警備兵に捕まらぬことだ』

何処か諦めたようなメフィストの、忠告とも皮肉とも取れるそれ  
を無視して、統利は城門へ近付いて行った。

「おい、止まれ」

素知らぬ顔で城門を潜ろうとした統利を、全身鎧を着込んだ屈強  
そうな門番が遮った。

幻魔の森のある方角からやって来た帯剣した少年が、少女の死体  
を抱えたまま、城門を通ろうとしたのだから当然だが。

「君、その遺体はどうしたんだ？」

「幻魔の森で戦闘音が聞こえたので、その現場に駆けつけたら、彼  
女が魔物にやられてたんです」



取り敢えず、大まかな流れのみ説明する。

「君が彼女を見つけた経緯は分かったが、何故その遺体をわざわざ街に「お姉ちゃん！」何だ？」

門番が次の質問をしようとするのを遮って、誰かの叫ぶような声が聞こえた。

辺りを見渡すと、街の中から一人の少女が駆け寄ってきた。

「姉？」

『主の抱えているその事ではないか？』

「いや、それは何となく分かるが」

統利とメフィストがそう話している間に、少女は目の前にまでやって来ていた。

「お姉ちゃ      ！？」

統利の抱いている姉に話しかけようとして、少女は絶句して立ち尽くす。もしかすると、遠目では、既に死んでいることが分からなかったのかもしれない。

だが、巨人の石斧によつて腹部を大きく抉られたその姿は、誰が見ても死んでいることが明らかだった。

「嘘……お姉ちゃん？    お姉ちゃん！」

呆然として、我を忘れたように、少女は姉を呼び続ける。

「フィエナ！」

街から三人の男女が、走ってくる。

「フィエナ、急に走り出して、一体どうしたんだ？」

彼らは、フィエナと呼ばれた少女に駆け寄りながら、怪訝そうな表情でたずねた。

「本当にどうしたんだ？ エレナを探しに　　！？」

「おい、どうし　　んなつ！？」

「え……！？」

統利の抱えている少女を見て、三人が息を飲む。

「お、おい……まさか、死んで……？」

「い、嫌あああああああ！」

後から来た三人の内、赤い髪の大剣を背負った男がそう呟くと、フィエナと呼ばれた少女が、泣き叫びながら崩れ落ちた。

「……君は何者だ、何故彼女の遺体を抱えている」

もう一人の、伶俐そうな鋭い眼をした端正な顔の男が、詰問するような口調で話しかけてくる。

「それは　　」

「待て、こちらで状況を把握したい、詰所で話そう」

統利が説明しようとすると、それを門番が遮った。

「俺は構いませんが」

「……良いだろう、ここは人目にもつく」

それを聞いた門番は、彼らを詰所へと案内した。

「成る程、つまり君が駆けつけたときには、既にエレナは息絶えていた。その後、君はエレナの命を奪った巨人を倒した、と」  
「ええ、その通りです」

簡単な自己紹介のあと、赤い髪の男がジーン、もう一人の男がレイル、女性はサーシャ、一通りの説明が終わり、レイルがそのときの状況を確認する。

「マジかよ、エレナと戦っていた巨人って、あのトロールの事だろ？ それを一人で殺ったってのかよ……」  
「間違いないわ、彼の服に付いている血は、紛れもなくあのトロールのものよ。凄い……」

あの巨人、トロールと言う種類らしいが、それを単独で倒したことにジーンとサーシャが驚いている。

確かに、普通の剣であの皮膚を貫くことは無理だ。それを考えれば、この反応も理解できる。

「だが、何故君はエレナの遺体を？ あの森をエレナを抱えながら突破するのは、楽ではなかった筈だ」

「理由と言われても……放って行くのが可哀想だったから、では駄目ですか」

「可哀想等と言う理由で いや、そのお陰で私達は死体とはいえ、

エレナと再会できたのだ、それは聞かないでおこう」

重い空気が部屋を覆う。ジーンとサーシャの二人も押し黙り、フイエナは俯いて言葉を発さない。

「あゝ、ちよつと良いか？ トーリ・シジョウだったか、君は何処から来たんだ？ 俺は昨日と今日は、一日中この北門に立っていたが、君は見えていない」

その空気に耐えられなかったのか、門番の男が話題を変えるように質問してきた。

まさか、本当のことを話すわけにもいかない。

「東の国から来たんですが、路中思いの外時間がかかって、旅費が底をついたんです。それで、少しでも旅費を稼ごうと。幻魔の森には、魔術や錬金術に使う、珍しい素材も多いですから」

「成る程、それなら納得できる。一度街に寄らなかつたってことは、ギルドには登録してないのか？」

「ええ、元々冒険者という訳ではないので」

メフィストが考えた台詞を、そのまま答える。門番も特に疑問に思わなかったのか、追求はしてこなかった。

「しかし、遺体一つ運んできたんだ、素材を運ぶ余裕はなかつただろう。旅費も無いということだし、これからどうするんだ？」

「どうしますかね、これからまた森に入っていくのは、正直御免被りたいですし」

確かにそれは問題だ。そもそも、なにか計画を練ってあの森に居たわけではない。文字通り行き当たりばったりだったのだから、これからどうするかなど、考えてある筈がない。

話が長引いたせいで、もう日も沈みかけている。今から再び幻魔の森に行くのは、ただの自殺行為だ。

「あ、あの」

どうしたものかと悩んでいると、今まで塞ぎ込んでいたフィエナが、遠慮がちに話しかけてきた。

「何？」

「えっと……もし宜しければ、今夜の宿をお貸ししましょうか？」

「お貸ししましょうかって……」

「厳密には、貴方の代わりに宿代をお支払するということですが」

「それは」

願ってもないことだ。宿代から何まで出して貰うというのは心苦しいが、一文無しの今、そんなことに拘ってもいられない。「……良いんですか？」

統利は、レイルたち三人に向かって尋ねた。

「問題ない、私たちも君には感謝している」

「当たり前だぜ。わざわざエレナの遺体を運んでくれたんだ、これくらいの事はしねえとな」

サーシャもそれに頷き、同意を示す。

反対するものが居ないのであれば、統利がその厚意に甘えるのに、委細の問題はない。

「では、お言葉に甘えさせていただきます」

「ふう……」

統利は、ベッドに倒れ込みながら息を吐いた。

長い一日だった。

通り魔に殺されたことから始まり、虚界にてメフィストと契約し、新たな命を得て異世界に来了。

果てには巨人との殺し合いだ。

とても、一日に起こった出来事とは思えない。否、或いはかの虚界にて、実際に遥かな刻に身を委ねていたのかもしれない。

（ならば、元の世界に戻れなかった理由にもなる）

何れにせよ、今さら考えたとして詮なきことだ。

今はそんなことよりも、これからの未来に目を向けるべき時だ。

（さしあたっては ）

「メフィスト、一つ聞きたいことがある」

『よかるう、我も主に聞きたき事がある』

その言に、統利は眼を瞑り沈黙する。

何を考えているのだろうか。

彼と契約したメフィストでさえ、その心中を推し量ることはできない。

暫しの後、統利は再び眼を開けた。

「そつちから聞こう。大体予想はできるが、何が聞きたいんだ？」

『恐らく、その予想と違わぬであろう。我が聞きたいのは、主があの雌姓体をこの街まで運んだ理由だ』

矢張それか、と統利は内心苦笑する。

流石に、あの時メフィストに語った理由では納得してはもらえなかったか。

そもそも、統利がメフィストであつたとしても、あの様な理由、信じようとしなかつたであらうから。

だが、

「改めて聞かれても困るな。あのとき語った理由に、一片の嘘も混じつてはいない」

『あの様な理由で、数多の魔物が跳梁跋扈する幻魔の森を、死体一つ抱えて踏破したというのか』

馬鹿な、と思う。その様な理由で、自らの命を危険にさらしかねない真似を、この契約者が行つとは、到底信じられない。

「理解できないだろう？ お前だけじゃない、恐らく、三千大千世界に住むあらゆる存在の中で、この行動を本当に理解できるのはほんの一握りだろう」

『……』

例えそうだとするのなら、メフィストには何があるうとも、到底理解し得ないだろう。恐らく、統利を理解できる者とは、彼と

同じ執着を持つものだけだろうから。

「次は俺の番だ。メフィスト、契約の時お前は言ったな？ 俺の命を貰うのは、俺が特定の言葉を口にしたときだと。特定の言葉とは何だ？」

『ふむ……もう少し主がこの世界に慣れてから考えようと思っていたが、よかるう』

メフィストは、少し考えるように間を空けた。

『主は我をメフィスト名付けた。ならば、これが最も相応しかろう。我が主の魂を奪う為の言葉、其れは』

一拍の後、悪魔はその言葉を口にした。

『"V e r w e i l e d o c h ! D u b i s t s o s c h o n . " 《瞬間よ止まれ、汝はいかにも美しい！》』

T o b e c o n t i n u e d



## 第一章：第三節 戦闘（後書き）

長い……………

というわけで、鬼柳堂で御座います。

色々詰め込んだ結果、第二節の二倍ほどの長さになってしまいました。

しかし、疲れた……。

では、中身の解説を少々……。

まず、主人公の使っていたあの剣ですが、ただ単に作者が変わった武器を出したかっただけです。いやほんとそれだけ。

多分途中で武器変わります。

さて、これが一番肝心なことなのですが、最後の方の統利とメフイストの会話で、契約に関することが出てきました。

それに関して第一節を改訂しましたので、この場を通じてお知らせ致します。

まあ、正直数文字変わったただけなので、改めて見直す必要はないかと。要は、契約終了の条件が、統利の死から特定の言葉を口にしたら、に変わったただけなので。

最後に今後の予定を。

取り敢えず、次話はまた短くなるかと思えます。更新は二週間ぐらい後になるかと。

次話更新前に、簡単な用語集の様なものを入れようかと思っています

ます。

それでは、第四節にて皆様と又お会いできますことを

## 第一章：第四節 依頼

幻魔の森の木々の影から、子供ほどの大きさの、人に似た姿の魔物が数体現れた。

その魔物　小鬼<sup>ゴブリン</sup>　は、キイ、キイ、と声をあげながら統利を取り囲んでいく。

統利は、右手に持った長剣を構えることもせず、ただただ静かに、そして無感情に小鬼たちの行動を眺めていた。

「クキイイイ！」

リーダーなのか、ゴブリンの中の一匹が叫ぶと、統利を取り囲んでいた他のゴブリンが統利に向かって、一斉に飛びかかってきた。

『やれやれ、身の程を知らぬ愚か者共め。……主よ、少し思い知らせてやるがよい』

「言われるまでもない。……形態式：鞭剣」  
囁くと共に、右手の長剣に魔力が注がれていく。

「秘剣・暴蛇<sup>あばれみ</sup>」

統利が静かに鞭剣を振るうと、鞭状に展開した刀身がゴブリンたちの体を寸断していく。恐らく、自分の身に何が起こったかも分かつたらず、その命を散らした事だろう。

それ程鋭く、また一切の容赦の無い剣だった。

反す二の太刀で、号令を放ったゴブリンの首が宙を舞った。

「これで 未だ出てくるのか……」

終りだ、と言いかけた統利を遮るように、再び複数の魔物が現れる。種族は先程と同じく、小鬼。

先程から同じことの繰り返しだ。これで二十体を数えただろうか。

街で請けた依頼は、最近ガラドヘイム周辺に出没する、ゴブリンの集団の討伐だった。

本来集団であつても、そこその実力を持った戦士ならば、なんの問題なく倒せる。それがゴブリンというものだと言いた。だからこそこの依頼を請けたのだ。

ただ一つの誤算、それは

『異様に数が多いこと、か』

「全く、何処から湧いて出てくるんだ」

そう、問題はその数だ。倒しても倒しても、何処からともなく現れてくる。

何処から出てくるのか分からないため、ゴブリンの住みかを魔術で吹き飛ばすことも出来ない。

（やれやれ、依頼を請けたときは、楽な仕事だと思っただけど…  
…）

それは、数時間前に遡る

陽光が窓から統利に降り注ぐ。もう、朝だ。

「ん……」

統利は、眩しそうに手を翳しながら、ゆっくりと体を起こした。

『起きたか、主よ』

「メフィスト？　ああ、そう言えば、ここは異世界だったな」

忘れてたよ、と苦笑する統利。その声には、どこか悲しげな、失望したかのような響きがあった。

生への執着が強い統利の事だ。これ迄の全ては夢だったと、違うとわかっていても、そう思わずに入らなかったのだろう。

だからこそ、その夢が打ち破られ、失望を隠しきれなかった。

『……大丈夫か、主よ』

「問題ない、例え一度死んだとしても、今俺は生きている。なら、次は死なないよう精々足掻くさ」

『ふん、ならば良い。ところで、あの小娘共がここに向かってきておるぞ』

「フィエナ達が？」

そう言えば、昨日別れる前に「明日の朝に部屋に伺います」と言っていた。統利がギルドに登録するのを、手伝ってくれるそうだ。

統利はベッドから降り、上着を着て来客に備えた。

『主よ、今の内に伝えておくが、今後我と会話するときはその内容を思い浮かべるだけで良い。いちいち口に出しては不便である』  
『う』

「思い浮かべる……」

『ごうか？』

『問題ない、以後はそうしろ』

分かった、と統利が返事すると同時に、部屋の扉がノックされた。

「フィエナです。トーリさん、起きていらっしゃいますか？」

「ああ、今開ける」

扉を開けると、フィエナ達四人が立っていた。

「おはようございます。トーリさん」

「おはよう、トーリ」

「よう！ トーリ」

「お早う、トーリ君」

「おはよう」

挨拶を返しながら、フィエナ達を部屋に招き入れる。

全員が部屋に備え付けられている机につくと、フィエナが口を開いた。

「まず、改めて昨日のお礼を申し上げます。ありがとうございます  
た」

「良いつて、宿も取って貰ったし」

「いえ、姉をちゃんと葬ってあげることが出来たのは、トーリさん

のお陰です。何度でもお礼を言わせてください」

そう言って頭を下げるフィエナ。

統利は困ったように頭をかきながら、フィエナに頭を上げるよう促す。

エレナの遺体は、統利を含む今この場にいる五人だけで簡単な葬儀を執り行ったあと、この町の教会の墓地に葬られた。

そのときのフィエナの悲しみようを見ると、宿を取ってもらった上にここまで感謝されることが心苦しくなる。

彼女の姉を、助けることが出来無かったことが。

そんな統利の心情に気づいてか、レイルがフィエナに話しかけた。

「フィエナ、トーリも困っている。それに、今日ここに来たのはトーリをギルドに登録するためだろう」

「そ、そうでした。すみませんトーリさん。それでは本題に入らせていただきます」

すっかり忘れていたのか、レイルの言葉に慌てて頭を上げるフィエナ。

端から見えていれば微笑ましい限りだが、本題に入ると言うことは、統利のギルド登録について話し合うということ。正直、あまり和んでもいられない。

何せ、今の統利は無職の上に完全な一文無し。

如何に腕が立とうと、仕事にありつかなければ金を得ることは出来ない。金がなければ、生きていくのは不可能、とは言わないが、困難だ。

ならば、統利にとってそれは、何よりも優先して解決しなければならない事案に他ならない。

『ギルドの依頼も相応に危険だが……』

『お前の魔術があれば、たいして危険でも無いだろう。ヤバそうなのは避ければいいし』

『……まあ、良いが』

「あの、トーリさん？」

「ん？ ああ、ごめん。それで、ギルドの登録だったな。どうすればいいんだ？」

メフィストとの念話に向けていた注意を、再びフィエナ達に戻す。

「ここで説明してもいいんですけど、実際にギルドに行った方が早いと思うので……」

「分かった、案内してくれ」

統利にしても、ここで長々と説明を聞いているよりは、ギルドに行ってから説明を聞いた方が分かりやすいだろうと思う。

「よし。んじゃあ、早速行こうぜ！」

統利がフィエナに同意すると、ジーンが大声をあげて立ち上がった。

統利は思わず耳を塞ぐ。

「朝っぱらから五月蠅いわね。静かにしてくれろ？」

「す、すまん……」

サーシャに怒鳴られるジーン。それを呆れたように眺めるレイルと、「あはは……」と苦笑いするフィエナ。



このパーティーのヒエラルキーが分かったような気がする。

「……騒いでないで行くぞ。トリー、フィエナ。時間の無駄だ」

「はい。行きましよう、トリーさん」

「ああ」

騒いでいるジーンとサーシャをよそに、部屋を出る統利達三人。

「ちよつ、置いてくなって！」

「あんたは黙ってなさい！」

部屋のなかで、二人が騒いでいるのが聞こえる。

『やれやれ……賑やかな連中よ』

§

ガラドヘイムの市街地は、冒険者達のお陰で、辺境にあるとは思えないほどに賑わっている。

そして、その市街地の一番街に、冒険者ギルドは存在した。

「へえ……ここが冒険者ギルド？」

統利の目の前には、辺境にはふさわしくない、大きな酒場がそびえ立っていた。

高さは地球の現代建築物と比べれば、さほど大したことはないそれでも、中世相当のこの時代では、十分驚嘆に値する　　が、

その酒場の建っている敷地がまた広い。少なくとも、辺境の街にたてようと思う大きさではない。

出入りしているのも、一般人とは違う、明らかに冒険者や傭兵の類いと分かる姿をしている者達だ。

「すげえだろ？ これくらいの規模のギルドは、大都市にもそうそう無いぜ」

「幻魔の森に隣接しているお陰で、冒険者や傭兵が腕試しや金稼ぎに来るのが理由ね」

確かに、街中にもそういった人種が多く見受けられる。

「さあ、行きましょう。先ずはトリーさんの登録です」

フィエナの言葉と共に、一行は酒場を兼業する冒険者ギルドへと入っていった。

「あの……すみません、ギルドへの登録をしたいのですが」

フィエナが、酒場のカウンターに居る店員に話しかけている間「しばらく待っていて」と言われた統利は、手持ち無沙汰に酒場を見渡していた。

広い室内に無数に置かれたテーブルでは、今しがた戦闘してきた、といった雰囲気 of 戦士達が酒をのみ交わしている。

今が朝といっても差し支えない時間帯であることを考えると、彼らは夜中に稼ぎに出ていたことになる。

『単に朝から酒が飲みたかっただけではないのか？』

『これから同業者になるのが、そんな連中ばかりだとは思いたくないな』

正直な話、ギルド登録を止めようかとまで思ってしまった。

統利がどうしようかと半ば本気で考えていると、その様子を見たレイルが話しかけてきた。

「どうした？ トーリ」

「いや……冒険者や傭兵にとって、朝っぱらから酒を飲むのは当たり前なのか、と疑問に思っ」

「ああ、彼等は今朝ガラドヘイムに着いたばかりなんだろう」

「……此れだけの人数がか？」

ガラドヘイム中の冒険者・傭兵が集まっているかのような数がここに居る。其れが、今朝ガラドヘイムに着いたばかりだとは……。

「さすがに全員ではないが、少なくともここに居る殆どはそうだ」  
「つつても、昨日まで居た奴等の半数は、もうガラドヘイムを出ただろうがな。結構そういつた職業の人間の移り変わりが激しいんだよ、ここは」

レイルの説明に補足を入れるジーン。

どちらにしろ、驚くべきことには変わり無いが。

「トーリさん！ ギルド登録できるそうです！」

「あら、お姫様が呼んでるわよ。行きましょ、トーリ君」

「ん？ ああ」

フィエナに呼ばれてカウンターに行くと、何か文字の書かれた用

紙を手渡された。

「これに名前を記入して下さい。詳しくはこれに書いてありますので」

と言われ、用紙を覗き込むと、其処には見慣れない文字が書かれていた。

『……まあ、当然か。異世界なんだし。寧ろ、何で言葉が通じていたんだ？』

『今更それを聞くのか？……言葉が通じていたのは、我がそのようにしたからだが 暫し待て、文字も分かるようにしてやるっ』

徐々に、用紙に書かれている文字が理解できるようになっていく。

『 良いぞ。此れで、如何なる文字も理解し使いこなせよう』  
『 有難い』

今度ははつきりと理解できるようになった文字を、統利は読み進めていく。

用紙に書いてあるのは、ギルド使用時の注意事項。そして、ギルド登録に必要な名前の記入欄。

意外に思ったのが、名前以外の個人情報嫌ならば特に記入しなくても良いらしい。自分の事を詮索されたくない者が多いのだろう。

「っと、此れで良いか？」

用紙に名前を書き、カウンターの店員もといギルド員に手渡す。

「はい……トリー・シジヨウ様ですね。ギルド証を発行しますので、少々お待ちください」

ギルド員がカウンターの奥に引っ込む。

少しの時間の後戻ってきたギルド員は、お待たせしました、と言いながら統利に銀で出来たカードを渡す。

「これがギルド証です。貴方はトロールを既に倒されているので、Bランクからとなります。依頼はギルドのカウンターにて請けることが出来ます。他に何かご質問はありますか？」

「いや、無い」

「では、依頼を請けられますか？ 現在トリー様が請けることのできる依頼は、Aランクまでとなっています」

「どんなのがあるんだ？」

統利の前に、Aランクまでの依頼書が置かれた。  
フィエナ達が統利の横から、それを覗き込む。

依頼書の数、Dランクが4、Cランクが3、Bランクが2、Aランクが1の計十枚。

「やっぱり、Dランクは素材集めね」

「せっかくギルドランクがBなんですから、この二つのどちらかにしてはどうですか？」

そう言ってフィエナは、依頼書の中からBランクの二枚を取り出した。

一つは近隣の街までの護衛任務。

もう一つは、幻魔の森に出没するゴブリンの討伐だ。

統利は、その二枚の依頼書の内、ゴ布林討伐の方を手にとった。

「お、それにするのか？」

「ああ……来たばかりで、他の街への護衛任務もないだろ。大体金もないしな」

報酬の支払いは、基本的に後払いらしい。なら、文無しの今は、少しでも早く終わりそうな方を選んだほうがいい。

「成る程な。で、俺たちはどうする、フィエナ？」

「えと……どうしよう？」

可愛らしく小首を傾げるフィエナ。

パーティーのリーダーだったエレナが死んだ今、次のリーダーは彼女になるらしいが 正直大丈夫なのだろうか。まあ、実際にはレイルが補佐という形で代行するのだろうか。

そんなフィエナに、サーシャが呆れながら答えた。

「もう！」「どうしよう？」「じゃないでしょう。仮にもリーダーならしっかりしなさい！」

「落ち着けサーシャ。取り敢えず」

これからの方針を相談し始めたフィエナ達をよそに、統利は依頼を請ける手続きを進める。

「取り敢えず此れを」

「はい。……ランクB『ゴ布林討伐』ですね。それでは、ギルド

証をお貸し下さい」

言われた通りギルド証を渡すと、受け取ったギルド員は手元の小さな台にギルド証をのせ、台に付いている水晶に魔力を注いだ。

台から淡い光が発せられ、その光がギルド証に移っていく。

『魔力を使い、情報を刻印しておるのか……』

『凄いのか？ それ』

『其奴が使っておる魔導具、其れが非常に珍しいのだ。本来なら、魔力を此のように使わぬ』

魔導具 魔を導くという名の通り、特定、或いは不特定の魔術の発動を助長する。中には、存在そのものが魔術となっている魔導具や、魔術には存在しない現象を起こす魔導具もある。

ギルドで使っている魔導具も、後者の物なのだろう。

刻印が終わったのか、ギルド証と魔導具から光が消えていく。

「これで、トリー様の請けられた依頼の情報が、ギルド証に刻まれました。これは依頼完了、もしくはトリー様が依頼を放棄なさるまで消えることはありません」

ギルド員は、そこで一度言葉を切り、ですが、と続けた。

「あまりにも長期に渡り依頼遂行に進展が見られなかったり、幾度も依頼放棄を繰り返した場合は、一部の依頼の受領不可や、ギルドが提供するサービスが受けなくなるなどのペナルティが課せられますので、ご了承下さい」

それはギルドの信用にも関わる事。

だからこそ、貴重な魔導具を使っても、依頼遂行状況を把握しているのか。

統利は、ギルド証を受け取りながらギルド員に頷き、了解の意を示した。

「それでは、御健闘をお祈りします」

「有難う。 さて、向こうも話が纏まったか」

フィエナ達も話し合いが終わったようで、トリーの方へ歩いてきた。

「それで？ あんた達はどつするんだ」

「ああ、我々も暫くここに滞在する事にした。ここに来た目的も、未だ達成出来てはいないからな」

「お前はこれから幻魔の森に行くんだろ？ 戻ってきたら、宿で一杯やろうぜ」

コップを傾ける仕草をするジーンに苦笑を返し、ギルド登録を手伝ってくれた事への感謝を述べる。

畏縮するフィエナをからかうサーシャ達を後に、統利はギルドを出た。

「さて、さっさと終わらせて宿に戻るか」



その後、幻魔の森に入った統利は、集団のゴブリンを発見し、攻撃を仕掛けた。

そして、その場にいたゴブリンを全滅させ、ガラドヘイムへ戻ろうとその場に背を向けた途端、再びゴブリンが現れ、今に至る。

統利は思考を現在に戻す。

（フツ、現実から目を逸らしていても仕方ないな。しかしこいつら、数の多さも異様だが、それ以上に何故手も足も出ない相手に挑む？ 丁度良い練習台だと思っていたが、こいつは ）

『主よ！』

背後から殺気。油断していたのか、思考に没頭していて気づくのが遅れた。

「ちっ！」

咄嗟に左前に身を倒しつつ、剣を振るう。同時、首筋に鋭い痛み。

斬られた。

首筋に手を当てると、ドロリとした感触。避けるのが刹那遅れていたら、間違いなく首を切り落とされていただろう。

『主よ、如何に相手が雑魚と云えど、あれほどに油断してはは』

「煩い」

『主？』

説教を始めたメフィストを遮り、統利はユラリと立ち上がる。

「慣れない武器の練習台にと遊んでやれば、そうか……そんなに俺の命を奪いたいのか。なら」

統利が顔を上げる。その目に浮かぶのは、憤怒。

「奪えるものなら、奪って見せる」！

絶大な魔力が、統利から噴出される。

その魔力に呼ばれ、頭上の晴天に雷雲が立ち込める。

『主！ 少し待て』

「堕ちろ！ 【鳴神いいい】！」

瞬間、天が轟き、目を焼かんばかりの光が、地上に降り注ぐ。

実際は数秒ほどだっただろうか、その何十倍にも感じられる時間が過ぎ、森は再び元の静寂さを取り戻した。

辺りを覆っていた煙を、風が吹き散らす。

中から現れたのは、統利ただ一人。並みいたゴブリン達は、一匹残らず森ごと豪雷に薙ぎ払われ、その身を碎かれている。

『……主の特定の行動に対する沸点は、些か低すぎはせぬか？』

それには答えず、統利は荒く息を吐く。

かなり無理に魔術を展開したせいだ、魔力残量に比べて、不自然なほどに疲労している。

『主よ、魔物共も一掃したのだ。此处は一先ず　む？』

粉塵が晴れ、先程までは木々が生い茂っていた場所に、魔力を放つ扉のようなものが建っていた。

否、それは初めから存在していたのだろう。木々に遮られていたというだけで。

言葉を切り、沈黙したメフィストからは、それを観察するような気配が感じられる。

『……ふむ、成る程……あれが原因か』

「どういうことだ。見たところ扉に見えるが、あれから小鬼共が出てきたということか？」

『その様だ。でかしたぞ、主が怒りに我を忘れて周囲を焦土としたため、あれが出てきたのだ。さもなくば、見つけられなかったかも知れん。中々巧妙に隠されておったようだからな』

魔術で隠蔽でもしてあったのだろう扉はしかし、傷一つ無く、魔力を放ち続けている。

ゴブリンが出てこないのは、あの攻撃で不具合が生じたからか、それとも出てくるべきゴブリンが居ないからか。

「兎に角、あの魔導具か？ あれを何とかすれば、依頼も達成できるんだろ？」

『転送門と言う。だが、あれは開けた術者にしか閉じられぬ』

「俺でもか？」

『然り。今の主では難しかりう』

「そうか……」

再び、統利から魔力が溢れ出す。唯一つ先程と違うのは、その魔力が完全に制御され、綿密に練り込まれているということ。

「なら、壊してしまえば良い」

底冷えしそうな声。

『主よ、未だ怒っておるのか』

「俺を殺そうとしたんだ。あれくらいで済ませられる筈無いだろ？」

『半分は自業自得だと思うが……』

統利は聞く耳持たず、魔力を右手の先に集めていく。

やがて、右手に集められた魔力が、混沌とした色合いの光球を形作る。

「さっきの攻撃には耐えられたかもしれないが、此れを受けても、同じように耐える事が出来るかな？」

その光球を更に圧縮し、馬鹿げたほどの魔力を集めた魔術が完成する。

それは静かに、だが圧倒的な威力を秘めたまま、攻撃の時を待つ。

「さあ、万物に滅びをもたらせ。【破滅の恒星】！」

打ち出された光球は、高速で直進し、転送門に直撃する。

半秒ほどの均衡の後、光球が数十倍にも膨れ上がり、周囲の物を飲み込みながら再び縮小。そしてその一瞬後、内に秘めた膨大な魔力を、破壊に変えて解き放つ。

音よりも早く、衝撃が訪れた。

破壊は、焼け焦げ砕かれた木々も、元の面影無く粉碎されたゴブ

リンの死体も、あらゆる物を飲み込んでいく。

魔力で壁を作っておかなければ、統利冴えも例外ではなかっただろう。

『先程といい、今といい、無茶をする男だ。だが、此れで原因は取り除かれたか』

転送門があった場所から円形に、統利を除くあらゆる全てが消滅し、地面も一センチの高低差も無い程、平らに均されている。

『さて、気はすんだか？』

「ああ、スッキリしたよ」

『次からは油断はせぬことだな。死にたくなくば』

「そうするよ。　ふう、流石に疲れた。早く宿に戻って休もう」

今度は、何者にも邪魔されること無く、統利はガラドヘイムへ足を向けた。

S i d e   u n k n o w n

ガラドヘイムから遠く離れた街、エルバンド。その高級住宅街にある一軒の屋敷の中庭で、フードを被った一人の人影が、噴水を覗き込んでいた。

フードで顔の部分が影になり、口元のみが覗いている。性別はわからない。

そのまま暫く時間がたち、噴水の中に何を見つけたか、ふと笑みを浮かべる人影。

「へえ、あの門を破壊するのか。凄いな」

紡ぎ出された中性的な声は、誰の耳にも届くこと無く、虚空へと消えていった。

「これは、近い内に此方から挨拶をしなくてはいけないな」

そして、人影は暫く愉しそうに笑った後、再び噴水に目を落とす。

陽光を照らし返し、フードの人影のみが映る水面に、上空を横切った白い鳥が、一つの羽根を落としていった。

T O b e c o n t i n u e d

## 第一章：第四節 依頼（後書き）

後書きの前に、前話後書きにて予告していた2週間で、大きく過ぎてしまったこと、この場をお借りして謝罪いたします。  
申し訳ありませんでした。

一応理由はあるのですが、何を言っても言い訳にしかならないか  
と思いますので、割愛させていただきます。

ここからが後書きです。

えー、予定を大幅に過ぎてしまったこともあり、展開が強引で見逃してください。

さて、最後の方に怪しげな人物が登場しましたが、暫く出てこないかもしれません。

まあ、私の予告何ぞあてにはならないわけですが。

最後に、次回更新ですが いつになるかはわかりません。予定は未定です。

と、言いますが、また遅くなるのが嫌なので、そういうことにしておきます。

それでは、また次話にてお会いできますことを。

追記・感想お待ちしております。

## 第一章：第五節 生還（前書き）

今回戦闘は一切有りません。

あと、誰か感想下さい。お願いします。



## 第一章：第五節 生還

「これが報酬のファセリナ銀貨十枚となります。ご苦勞様でした。またのご利用をお待ちしております」

依頼の報酬を受け取った統利は、ギルドを後にする。

『さて、宿に戻るか』

『あ奴らも宿に居るのか』

『そう言ってたな。ところでメフィスト。このファセリナ銀貨、どのくらいの価値があるんだ？』

正直、依頼の報酬として金銭をもらっても、その価値が分からないことには下手に使うことも出来ない。

『ふむ……そうだな、ファセリナ銀貨一枚で、ゴルディン銅貨百枚程度の値打ちがあるな』

『あの宿が一拍銅貨十二枚だったな……結構な大金じゃないか』

平均的な値段の宿に一泊すると、三食付きでゴルディン銅貨十枚程掛かる。庶民の買物にも銅貨が使われるため、最も目にするものの多いのがゴルディン銅貨だ。

そして、庶民が目にすることは稀だが、それでも、庶民が目にするのは一生に一度あるかないかのフォロン金貨と比べれば、比較的流通しているのがファセリナ銀貨。

さて、統利が報酬で得たファセリナ銀貨十枚だが、これだけあれば、度合いにもよるが一月は遊んで暮らす事が出来る。下級の魔物の討伐依頼としては些が多いが、この場合依頼そのものの報酬に加

えて、統利が倒したゴブリンの数に応じて加算されているため、本来の報酬より高くなっている。

『ふう、取り敢えずはそこその大金も手に入れたし、暫くは低ランクの依頼をこなしていくか』

『高ランクの依頼はせぬのか？』

『確かにあの力であれば問題は無いが……せめて、もう少し魔術に慣れておきたい』

そもそも、今まで使った魔術は、その膨大な魔力に任せて無理やり発動していたところがある。如何に魔力保有量が多くとも、こうも非効率的な運用をしていれば、遠からず限界が来るだろう。魔力を効率的に扱う為の知識はあるのだ。後は慣れ問題ともいえる。加えて、この世界に来て創った鞭剣にもなれる必要がある。何れにせよ、経験は積んでおいたほうが後々のためにもなるだろう。

統利は、幻魔の森からガルドヘイムに戻る間に考えていたことを、メフィストに話した。

統利のその考えにメフィストも納得したのか、それ以上口をはさむことは無かった。

『つと、宿についたぞ』

『後はゆっくり休むが良からう。……まあ、未だ昼過ぎではあるが』

『そんなことどうでもいいって。早く飯食って休みたい』

統利は宿の扉を開け、そこで自分を待つて居るはずのフィエナ達を探した。

「あ、トリーさん！　こっちです！」

彼女等の姿を探してあたりを見回していると、先にこちらの姿を見つけたフィエナが統利の名を呼んだ。

統利はそれに応えながら、彼女たちが座っている席に向かった。

「あら、もう終わったの？ 流石ね、トリー君」

「まったくだぜ。あいつら弱いくせに数だけ多いからな。もう少し時間がかかると思ってたんだが、どんな手を使ったんだ？」

統利がフィエナ達と同じテーブルにつくと、サーシャとジーンが話し掛けてきた。

飲み物と昼食を店員に頼むと、統利は二人に返事を返した。

「流石って程でもないよ、サーシャ。あとジーン、どんな手って言われても、普通に魔術で一掃しただけだよ」

こともなげに答えた統利に、四人――特に、サーシャとレイルが驚いた顔を向けた。

この世界において、威力の高い魔術を使おうとするほど、一定以上の長さの詠唱と極度の集中が必要となってくる。これは、どれだけ高位の魔術師になろうとも変わらない、絶対的な法則であり、魔術師ではないもの、それこそ子供ですらも知っていることだ。

そのため、この世界の魔術師は、いかにして詠唱速度を速めるか、いかにして周囲に注意を向けたまま精神を集中させるかに最も多くの時間をかける。この二つが出来なければ、魔力保有量や魔術の威力で圧倒的に劣る魔術師に敗北を喫することもありえるのだ。

フィエナ達が驚いたのも、この事実に起因する。

範囲系の魔術自体はそう珍しいことではないが、下位とはいえ魔物を一掃するほどのものであれば、大抵は上級あるいはそれに近い

中級に位置する。が、別にそれ自体に驚く要素があったわけではない。

ここで問題となるもの。それは、相手が多数のゴブリンということに他ならない。

何故なら、集団で一気に襲い来る魔物に包囲されている状況で、長つたらしい詠唱を唱え、極度に精神を集中させることは、困難であり自殺行為だ。事実、魔術を使わずに戦っていた統利とて、幻魔の森の空気と多数のゴブリンの気配に惑わされて、背後から近づく敵に気付くのが遅れたのだ。

そんな状況において、自分の行動に激しく制限を掛ける事がどれほど愚かな事か、想像に易いだろう。

無論、統利が使っている魔術は非常に特殊なため、必ずしもこれに当てはまりはしない。とはいえ、ファイエナ達がそれを知るはずも無いため、ここまで驚くのも無理からぬことだ。

統利もこの世界の魔術についてもっと詳しければ、このような不用意な発言はしなかった。だが、メフィストに魔術に関する知識を与えられていても、その時に必要な情報のみを参照していたため、この世界の魔術と自らの使う魔術との決定的な差に気づくことはなかった。

「――それが本当なら、最上位魔人と同等の実力だぞ……」

レイルが呆然として呟く。

『……なあメフィスト。俺、何か変な事言ったか？』

『……やれやれ、事前に教えておかなかった我にも非はあるが……。諦めよ、主。既に手遅れだ』

『いや、手遅れって。お前、何を言って……』

メフィストの言動について問いたただそうとした統利に、意を決したようにフィエナが言葉を発した。

「トリーさん。少し、お話を聞いていただけますか」

§

「ランクAの討伐依頼？」

フィエナの言った事を復唱する統利。それに対して、フィエナは頷くと話を続けた。

「はい。明朝四時、私たち四人も含めた、現在ガラドヘイムに滞在しているほぼ全ての冒険者や傭兵が参加する、幻魔の森に集結した魔物の大規模な討伐作戦が行われます」

「……」

統利は、それに対して何も返さない。その沈黙をどうとったか、レイルが話を継いだ。

「そこでトリー。君にも、この作戦に参加してもらいたい。危険ではあるが、その分報酬も桁が「断る」何？」

まさかいきなり断られるとは思っていなかったのか、レイルが素っ頓狂な声を上げた。

見れば、他の三人も統利の返答に驚いている。

「その依頼、ランクAとは言うが、限りなくランクSに近いだろ？俺はギルドに登録したばかりだし、そこまで高ランクの依頼を請ける気はない」

「何故だ？ 強制するわけではないが、君ほどの実力があれば、考えてみてもいいと思うが……」

考えるにも値しないとも言おうに切り捨てる統利に、納得のいかないレイルは、統利を説得しようと言葉を紡ぐ。

だが、統利はそれに耳をかそうとしない。

平行線をたどる二人に苛立ったか、ジーン達が口をはさむ。

「ちょっと待てよ統利。確かに、ギルド登録を済ませたばかりの奴に言うべきことじゃねえけどよ……今回の敵は、マジにやべえ。だからこそ、お前の力を貸して貰いてえんだよ」

「……」

「せめて、どうしてそこまで強く拒むのか、教えてくれない？」

「……」

沈黙。ジーン言葉にも、サーシャの疑問にも答えず、統利は口を閉ざす。

統利がそれを拒む理由。統利と出会って間もないフィエナ達では、それを悟ることも、想像することも出来ない。

「トリーさん……」

フィエナが呟く。四人の視線が統利に集まっている。

統利は内心でため息をついた。彼女達は、理由を教えてもらえない限りは諦めようとはしないだろう。だが、統利としては、ここで諦めてもらわなければ困るのだ。

統利は小さく息を吐き、この依頼を請けたくない理由を言葉にした。

「死にたくないんだよ」

「え？」

「だから、俺は、死にたくない」

フィエナは僅かな時間、呆けたように動きを止め、はっとしたように言葉を発した。

「で、でも、それは誰だって同じで」

「いや、違う。本能のみで死を避けるお前達と俺とでは、根本的に異なっている」

「根本的に？」

「そうだ。俺は、動物が持つ本能のみで死を避けているわけじゃない。俺の感情が、俺の意思が、俺の細胞の一片に至るまでの全てが、俺に死ぬことを、死ぬような状況に陥ることを、許さない」

そう宣言する統利の気迫に、フィエナ達は気圧されて何も言えない。ただその圧力の前に息を呑み、統利の次の言葉を待ちつづけるだけ。

この時の統利の眼には、狂気などとは比べ物にならないほどの『意志』が宿っていた。

「あの時俺は誓ったんだ。例え世界全てを敵に回しても、例え自分以外のあらゆるを滅ぼしても、その寿命尽き果てるまで生き続けると」

静かに語る統利。だが、その軀の内では膨大な魔力が統利の感情と共に荒れ狂い、たまに漏れ出るそれは、フィエナ達の心に統利の性が<sup>さが</sup>刻み付ける。

確かに、今の統利であれば大した危険も無いだろう。魔術の使用にも多少は慣れたし、メフィストのサポートもあるのだ、早々簡単にやられはし無い。

だが、全く危険が無いわけではない。そもそも、雑魚でしかないゴブリンにすら、油断のため危うく命を奪われるところだった。同じ徹を踏む気は無いが、それでもゴブリン討伐依頼などはかけ離れて危険であることには変わらない。だからこそ、統利は次は低ランクの依頼を請けようと思っていたのだ。

統利は、これ以上言うことは無いと席を立ち、部屋へと戻っていた。

Side フィエナ

トーリさんが部屋に行ってしまった。まさか、こんなことになるなんて。

「今の魔力、『万色』並みじゃねえか――！　今まで魔力をかけらも漏らさなかったトーリが、制御を手放すたあな」

「すごい威圧感ね、トーリ君。過去に何があったのかしら？」

「あの様子では教えてもらえそうにないな。まあ、確かにギルドに登録したばかりでこの依頼に参加しろというのも、非常識ではあるか」



レオンの言葉に、トリーさんを誘おうと提案したジーンがうな垂れる。とはいえ、それに賛成したのはわたしたちな訳だし、ジーンを責めることも出来ないのだけだ。

それに、今更後悔したってトリーさんが怒ったのをなかったことには出来ない。お姉ちゃんの事で恩もある人を無理に巻き込もうとは思わないし、別にトリーさんに断られたのはどうでも良いんだけど、怒らせてしまったのはやっぱり気になる。

嫌われちゃったかな。せつかく仲良く慣れたと思ったのに……どうしよう……。

「ん？ どうしたの、フィエナ」

サーシャが話し掛けてくる。どうやら、落ち込んでいたのが顔に出てしまったみたい。

「……トリーさんに嫌われちゃったのかな」

「何だ、そんなこと？ 大丈夫よ、きつと。トリー君だってつい感情的になっちゃったけど、きつとまた元通り接してくれるわよ」

サーシャはそう慰めてくれるけど、その顔を見れば本心からそう思っているわけではないことが分かる。

大体、あそこまで感情的になったのだから、生きるっていうのはそれだけトリーさんにとって大事なことなんだと思う。なら、そう簡単に心が落ち着くとも思えない。

サーシャもわたしがそう思っていることを察したのか、一度ため息をついてわたしを慰めるのを諦める。

「ところでジーン。あなた、ガラドヘイムに来てから新しい技の練

習をしてたみたいだけど、上手くいったの？」

「あ、ああ。何とか実戦で使えるようになったぜ。まだまだ改良点はあるがな」

「そう。なら、明日の戦いで見るのが楽しみね。そういえば――」

あからさまに話題を変えたサーシャだけど、この件に関して何か出来るわけでもないの、仕方がないといえば仕方がない。

レイルも、そんな二人を一瞥して、さっきのトリーさんの魔力を感じて集まってきた人たちの対応に行った。

わたしも、トリーさんの事を意識の片隅におきながら、サーシャとジーンの会話に加わった。

明日が終わった後に、再びトリーさんと話せる事を願いながら。

Side メフィスト

統利が無言で部屋に入っていく。一階の食堂から此处まで、我が幾ら話し掛けようと、一言もそれに返そうとはしない。

あの四人に怒っている、のとは違うのだろう。寧ろ、怒っているとすれば自分にはないだろうか。

この男、生への執着は強いが、どこか気に入った者には甘い部分がある。なまじ生への執着が強いせいだろう、死地においても生きようとする者には近親感を抱くのか。

あ奴らとて、死に行く訳ではないのだからな。

ただ、今のこやつから感じるの、怒りと言うよりも嫌悪の方が強い。別段あ奴らに対して負の感情を抱いている様子もない。恐ら

く、自己嫌悪の類であろうな。

もう少し、魔術に慣れていればよかったのかも知れぬが……。仕方あるまい、何時までも不機嫌でいられても困る。ここは我が一肌脱ぐとするか。

『良かったのか？ 主よ』

『……何がだ？』

『あの話を断った事だ。あ奴ら、死ぬぞ』

エレナと言ったか、あのトロールと戦って死んだ小娘とそう実力差があるとは思えん。流石にあれほどの魔物ばかりではないだろうが、それでも生き残るのは困難であろう。

『あ奴らが何故あの依頼を請けたかは知らぬが、少なくとも死ぬためではあるまい』

『………』

『主は、生きるために戦う者を見殺しにするのか？ 昨夜主が言っていたこととは間逆ではないか』

心が揺らいだか。もう一押しだな。

『主がああの依頼を請けるならば、我も少しは手伝ってやろうぞ。ならば、死にはすまい』

『………』

『主よ』

『……依頼は請けない。既に決めたことだ』

駄目か、強情な奴よ。そこまで強く、生に縛り付けられておるのか。

僅かな不安ですら避けようとするのは、先の戦いが原因であろ

な。

この世界に來た時のトロール戦では、苦戦はしたものの死に瀕することはなかった。だが、ゴブリン戦では油断して危うく首を落とされるところであったからな、殺し合いに対する怯えが出たか。

しかし、依頼をこなして生きていこうとするのであれば、殺し合いは避けられぬ。我が楽しむためにも、ここはやる気になってもらわねばならぬが――これ以上何を言っても無駄か。こやつのが変わることを祈るしかない。

S i d e      統利

メフィストが言っている事。確かに凶星だが、俺には明日の討伐に参加する気はない。いや、さっきのゴブリン討伐依頼を請ける前であれば、恐らく参加していただろう。

だが、死んだ事と異世界へ跳んだ事で一時的に麻痺していた、あの時感じた死の恐怖が、ゴブリンとの戦いでフラッシュバックしてしまった。

トロールとの戦いでは、強敵だったものの結局傷1つなく倒す事が出来たが、ゴブリンとの戦いでは、トロールを倒したという自信と相手が雑魚だという油断のために、刹那遅れば首を落とされるという事態を招いてしまった。

その時感じた恐怖が、俺が生に執着するようになった原因を再び呼び覚ました。

だから、少なくとも今は死の危険の高い依頼を請けるつもりはない。例え、この世界に來て始めて知り合ったあの四人を見殺しにする事になったとしても。

ああ、嫌だ。自分に嫌悪感を抱いてしまう。

彼女たちだって、死ぬために戦う訳じゃない。そんな事は分かっている。でも、それでも、彼女たちを助けるよりも、自分の死の危険を回避しようとしてしまう。……彼女たちを助けるに足る力があるというのに。

だけど、どうしようもないじゃないか。今の俺では、その危険をゼロにする事は出来ない。そして、死ぬ危険があるのに、俺はそこに飛び込んでいくことは出来ないんだから。

そうだ、仕方ない。彼女たちは運が悪かったんだ。だから、俺が危険を冒す必要は何処にもないんだ。そうに違いない――

S i d e O u t

かくして時は夜となり、彼らはそれぞれの想いを抱えたまま、一時の安らぎに身を委ねる。

次なる覚醒が、彼らにとっての人生の岐路となる事にも気付かず――。

T o b e c o n t i n u e d

## 第一章：第五節 生還（後書き）

更新が遅いのは悪ではない！

更新しないことこそが悪なのだ！

皆さんご無沙汰しております。鬼柳堂です。

しかし、主人公がへたれましたね。と言うか、部屋に戻ってから性格がかわってるような気がします。

まあ、人間なんてこんなものですよ。

ああ、何か段々更新速度が落ちてる……。

次回も遅くなると思いますが、見捨てないで下さい。お願いします。

では、また次話にてお会いしましょう。

## 第一章：第六節 開幕（前書き）

感想ご意見お待ちしております。

## 第一章：第六節 開幕

早朝、ガラドヘイムの西門に、ギルド長の演説が響き渡る。

「良いか、諸君！ 此度の作戦は、ガラドヘイム市庁からの依頼である！ 敗北も、撤退も許されない。恐らくは、ガラドヘイム史上最も大掛かりな作戦となるだろう。無論、命の危険も今までとは比べ物にならない」

そこで一拍置き、整然と並んだ冒険者や傭兵を見回すギルド長。

「しかし！ 俺は諸君らのことを、百戦錬磨の戦士達と理解している！ ならば、我らに敗北と撤退の二文字は存在しない！」

『うおおおおお！』

「往くぞ諸君！ 今こそ我らは、人に仇なす魔物を屠り、栄誉と報酬を手にするのだ！ 総員出撃！」

『うおおおおおおお！』

号令と共に、集まった数十の戦士達が、幻魔の森へと足を進める。

其処には、フィエナ達四人の姿もあった。

「いよいよか。くく、緊張するぜ！」

「随分楽しそうに見えるけど、突出しすぎたら死ぬのよ？ 分かってんのかしら……」

大規模戦闘を前に、興奮した様子のジーンと、その姿に呆れたように溜め息をつくサーシャ。傍目から見れば、二人とも結構な余裕だ。だが、そんな筈がない。



現に、余裕ぶりながらも、二人の顔には時たま不安が見え隠れしている。

そもそも、この四人の中で強力な魔物との集団戦を経験したことがあるのは、レイルだけなのだ。

他の三人も、常に群れで行動する低位の魔物との戦闘経験はあるが、今回は魔術も使える高位の魔物も出てくるのだ。比べ物にはならないだろう。

レイルは、自分が使える魔術の確認をしながら、二人を一瞥する。実のところ、レイルは二人についてはそれほど心配はしていなかった。別に、大規模戦闘の経験がないだけで、二人一流の戦士と魔術師だ。いざ戦闘になれば、体が勝手に動くだろう。

寧ろ、心配なのはフィエナの方だ。

潜在能力で言えば、彼女は自分の姉を越えるだろうが、其れでも戦士としてはまだまだ未熟。加えて、他の何かに意識を奪われているようだ。

トーリの事が……。

優しい子だ。昨日の事が未だ気になっているのだろう。

自分だって、姉の死をこんな短期間で乗り越えられた筈は無いのに、出会って二日の人間の事を気にかけている。

優しい。が、そこまでの優しさは、時によっては欠点とも成り得る。特に、今のような状況下では、他に気をとられていれば死に繋がりがねない危険がある。

（或いは……姉の死の悲しみを、他者を気遣うことで誤魔化しているのかもしれないな。否、それは俺も同じか）

どちらにせよ、今は目の前のことに集中するべきだ。

レイルは一度横に首を振り、フィエナに言葉を掛けようと近付いていった。

S a i d      統利

統利は、昨日と比べて静かなガラドヘイムを、あてもなくさまづいていた。

することがない。

ギルドは、今日は件の作戦で皆出払っている。例え開いていたとしても、今は依頼を請ける気分ではないが。当然、件の作戦に参加するつもりもない。

『何処へ行くつもりだ。主よ？』

『……何処へも。何もやる気が起きないし』

『難儀な奴よ。小娘共が気になるのなら、主も参加すれば良かったであろうに』

『しつこいな。やらないって言うてるだろ。俺はまだ死にたくない』  
『……………』

『何だ？ 何か文句でも      て、ここ何処だ？』

気付けば、人通りの無い裏路地に入り込んでいた。

ここは、表通りと違いかなり入り組んでいるようで、振り返って

みても、複数ある曲がり角のどこから来たのかが分からない。

苛々する。内心で舌打ちしながら、表通りに続く道を探そうとも  
と来た道に戻っていく。

と、そこへ一人の少年がぶつかってきた。

「うわッ！」

「ッと」

衝撃で後ろに倒れる少年。其れを助け起こそうと伸ばした手を弾  
き、少年は路地の奥へと駆けていった。

「あ……おいッ！」

呼び止める暇こそ無く、少年の後ろ姿は見えなくなっていった。

「ったく。何をそんなに急いでるんだ」

後を追って礼儀を教えるつもりもない。

さっさと宿に戻ろうと、裏路地の奥に背を向け歩き出そうとする  
と、再び邪魔が入る。

『待て、主よ。金は持っておるか？』

『は？ 持ってるに決まって 無い？』

腰に付けていた筈の財布が無くなっている。  
さっきまでは確かにあった。と言うことは

『あの小僧に掏られたな』

「くそッ！ メフィスト、あいつは何処へ行った？」

『少し先の角を左に曲がった後、三つ目の角を右だ』  
『よし。絶対取っ捕まえてやる』

メフィストの指示通りに角を曲がり少年を追う。  
これで少年を取り逃がせば、また無一文だ。それだけは何としても回避する必要がある。

何分走っただろうか。メフィストの指示にしたがって少年を追っている内に、急に人の集まった、広い空間が目の前に現れた。

『これは……』  
『スラム  
貧民街のようだな』

表通りと比べると、余りにも暗い雰囲気。しかし、確かにそこには人の暮らしがあった。

『スラムの人間だったのか……』  
『その様だな……。しかし、スラムと言えど人の数はなかなか多いようだ。この中から探し出すのは、用意ではないぞ』  
『魔術は……駄目なのか。情報が足りないな』

魔術で人や物を探し出すことは可能だが、それには対象の情報が必要となる。

この場合、種族、性別、年齢、身長、体重、特徴などがそれに当たる。別に、これらすべての情報が揃っていなければならない、と言うわけではなく、どれかひとつの情報があれば魔術は使える。

そして、ここで問題となってくるのが、その探索範囲だ。

例えば、此処が人気の無い荒野や森林であれば、何の問題もない。

種族人間で検索をかければ、特定したも同然だからだ。

しかし、此のような市街地ではそうはいかない。人間など無数にいる上に、スラムではあのような子供など、さして珍しくもあるまい。

『取り敢えず、聞き込みでもするか。あいつもこっちを撒いたと思ってるだろうし　ん？』

S a i d ？ ？ ？

「姉ちゃん！」

スラムの一角に、姉を呼ぶ声が響く。

声の主は、歳は十ほどの、どこか小生意気そうな目をした少年だ。

嬉しそうなその声に、少年の姉とおぼしき少女が、スラムのあばら屋の一つから顔を出した。

「カイル、帰ってきたの？」

「見てくれよ姉ちゃん！　銀貨十枚だぜ」

興奮しながら今日の成果を見せるカイル。だが、それを見る少女の顔は青くなっている。

「カイル！　あなたまたそんな事を――！」

「な、なんだよ姉ちゃん。これだけあれば、一年は楽に暮らせるぜ？」

怒られるとは思っていなかったカイルは、少女の剣幕にうろたえながらも反論する。何故少女が起こっているかを理解していないのか、その口調は拗ねたような物になっている。

「カイル、泥棒は悪い事なのよ？ 私はあなたにそんな事はして欲しくないの」

「……なんだよ、折角掏ってきたのに。だいたい、あんなとこ一人で大金もって歩いてるほうが悪いんだよ！」

そう言つて駆け出すカイル。

「待ちなさい、カイル！ 何処へ行くの！」

「へへん！ 市場で何か買ってくるよ。姉ちゃんは家でおとなしくしてて！」

「カイル！ 盗んだお金で……危ない！」

「なんだよ……え？ うわあ！」

姉に言い返そうと走りながら振り返つたため、前方が不注意になったカイルは、そこに立っていた男にぶつかつて地面に尻餅をついた。

「ああん？ 何だこのガキ！ 何処見て走つてやがる！」

「お？ こいつ、銀貨もつてやがるぜ。しかも十枚もかよ」

「勿体ねえなあ。俺たちで貰つちまおうぜ。そのほうが銀貨も嬉しいだろうよ」

「そりゃいい考えだ。……おいガキ！ その金よこしな」

見るものを威圧させるような言動でカイルに迫る男たち。偶然を装っているが、恐らく最初から狙っていたのだろう。カイルの言葉を借りるならば、貧民街の、それも人目のつくような所で大金を隠

しもせずに持っていたほうが悪いというところか。

そんな男たちに、カイルは反応する事も出来ずにただ呆然と見上げるだけだ。

それを拒絶ととったか、男たちは浮かべていた気味の悪い笑いを消し、いきなりカイルの腹部を蹴り上げる。

「がッ！」

「カイル！」

大人の男の蹴りを受けて吹き飛ぶカイルに駆け寄る少女。

男たちは、容姿の整った少女を見て、好色そうな笑みを口元に浮かべた。

「ヘッヘヘ……なかなかの上玉じゃねえか。おらッ、てめえも来やがれ！」

「きゃあ！」

「姉ちゃん！」

「おめえはさっさと金よこせ！」

苦痛で動けないカイルの手から銀貨を奪い、少女の腕を無理やり引っ張り連れ去ろうとする男たち。それを見る周りの人間は、誰一人として助けようとはしない。

当然だ。日々を生きるのも命がけなこのスラムにおいて、わざわざ危険を冒して他人を助ける者など居よう筈も無い。居るとしてもそれは打算からであり、助けられた者はより過酷な状況に陥る事になるだろう。

「ヘッ、今日は最高の一日だな」

「全くだ。大金手に入れた上に良い女までか、罰当たりそうだな」

「ハッはははははははは！」

「カイル！」

「ぐ……姉ちゃん！　姉ちゃん！！」

高笑いしながら少女連れ去る男たち。カイルは、痛みに呻き声を上げながら姉を呼ぶが、ともに立つことも出来ないのでは男たちを止める事も叶わない。

何も出来ずに姉が連れ去られていくのを、ただ眺めているしか出来ないカイル。そこへ、殺伐とした空気に合わない、落ち着いた声が響く。

「やれやれ……これは、如何するべきなんだろうな？　俺は」

Side　統利

「やれやれ……これは、如何するべきなんだろうな？　俺は」  
『如何するも、主の金はある破落戸達が持つておるようだぞ』

面倒な事になった。統利は内心でため息を吐く。

子供から金を取り返せばいいだけだったはずが、何故か屈強な大人が統利の金を持つている。見逃すという選択肢がない以上、この破落戸達から金を奪い返すしかない。

（大人しく渡しては……くれないんだろうな、こいつ等は）

たかが破落戸に遅れは取るまいが、正直なところ、今の心情では上手く加減が出来そうに無い。

流石に、人を殺すのはいい気はしない。できれば穏便に済ませた



いが――

「おい、何だてめえは。何か文句でもあんのかよ!」

『無理か』

『無理だな』

『やれやれ……』

「てめえ! 無視してんじゃねえ!」

怒鳴り声を上げる男に五月蠅そうに顔をしかめながら、統利は男の持つ財布に目をやりながら口を開く。

「別にお前等が何をしようと知った事ではないが……その銀貨な、俺のなんだ。大人しく其れ置いて失せろ」

「な……! ンだとおツ!」

「ふかしてんじゃねえぞ! 誰がんな事!」

「てめえが失せろや!」

全く説得する気の無い統利の言葉に激昂した破落戸達は、一斉に統利に殴りかかってくる。

それをその場から動くこと無く投げ飛ばす統利。何が起ったか分からないまま、破落戸達は地面に叩きつけられた。

呻きながら起き上がろうとするが、そこへ統利の鋭い蹴りが入り、苦痛で意識を刈り取られていく。

物の数秒で破落戸達を叩きのめした統利は、銀貨の入った袋を回収すると、腹部を押さえて蹲っている少年に向き直った。

「さて……お前がスリで間違いないな?」

「うツ……」

「で? 覚悟は出来てい「お待ちください!」……今度は何だ?」

破落戸達に連れ去られようとしていた少女が、少年と統利の間に立ち塞がった。

「どうか……どうか命だけはお助け下さい。罰をお望みならば、私が受けます！ だから弟だけは――！」

「姉ちゃん……」

「いや……誰も命を取ろうとは思ってないが……」

『あれを見れば……。しかし、此れでは主が悪人だな』  
『煩い黙れ』

ふう、と溜め息を吐き、統利は少女に頭を上げさせる。

「別に、何もしないさ。そんな気分でもないしな」

「本当ですか！ 有難う御座います！」

勢い良く頭を上げた少女を見ながら、苦笑する統利。そんなに容赦の無い人間に見えたのだろうか。

一応、破落戸共も生きてはいるのだ。ただ、最後に割と本気で蹴ったため、骨折に加え内臓破裂位はしただろう。

まあ、このまま放置していれば間違いなく死ぬだろうが、統利にとつてはどうでもいいことだ。

「じゃあな」

統利は、少女達と破落戸を一瞥し、スラムの出口へと足を進めた。

「生命を育みし紅蓮の精霊グランベルグよ。汝の力を我が身に！」

ボゼッション  
【憑依】！」

「生命を産みし黄壤の精霊ザムジュノームよ。汝の力を我が身に！」

ボゼッション  
【憑依】！」

「生命の祖たる青藍の精霊ガツディーネよ。汝の力を我が身に！」

ボゼッション  
【憑依】！」

「大空を歩みし流浪の精霊ギオラードよ。汝の力を我が身に！」

ボゼッション  
憑依】！」

世界を構成する精霊、魔術により召喚されしその超然的存在が、  
ファイエナ達の身体と融合を果たす。

ジーンは炎。

レイルは土。

サーシャは水。

ファイエナは風。

それぞれが契約した精霊の持つ属性へと、その身を変質させていく。

精霊魔術。通常魔術師が使う魔術とは違い、己が契約した精霊の力を自らを媒体とすることで行使する、一種の召喚魔術だ。ただ、召喚するのは精霊そのものではなく、その力のみという違いはあるが。

この精霊魔術は、通常の魔術 - 一般的に不偏魔術と呼ばれているそれと比べ、使用する者は遥かに多い。何せ、使用条件が精霊との契約だけなのだ。高位の精霊との契約は困難極まるが、低位の精霊であれば比較的容易く契約できる。こと最低位に位置する精霊であれば、魔術師でも武術かでも何でも無い只の一般人にすら契約を交わす事ができる。

魔力が矮小であっても使え、汎用性では不偏魔術に遥劣るものの、

契約精霊の属性に限っては他の魔術の追隨を許さないことから、特に戦士系の冒険者や傭兵に多く使用されている。一流と呼ばれるには、中位の精霊との契約が必須な程だ。

フィエナ達が使ったものは、その精霊魔術の中でも上位に位置する【精霊憑依】だ。

精霊を自らに憑依させ、その属性に身体を変質させて、ヘルフテ半精霊体へと己を昇華させる術。

これは契約した精霊を自身の身体に直接召喚するため、危険度や使用後の代償も大きいが行使できる力も大きい。精霊との親和率が高ければ使用可能だが、これを使った後は魔人でもない限りどれほど魔力が高かろうと魔力が枯渇し、極度の疲労が使用者を襲うため、滅多に使われる事は無いのだが。

その【精霊憑依】をフィエナ達、否、一部ではあるが他の討伐隊の者も使用している。そこまで精霊との親和率が高くない者は、【精霊憑依】より下位の精霊魔術を使っている。それをしないのは、純粋な魔術師が精霊と契約していない者だけ。契約精霊が居る者は例外なくその力を行使している。

対する敵は、トロール、オーク、ゴブリン、オーガ、ミノタウロス、マンティコア、オルトロス、キマイラ、ラミア……何処にでも生息しているような魔物から、極限られた環境でしか生きて行けないものまで、およそ魔物という魔物が集結している。

「本来なら、群れる事の無い魔物まで居るな……」

「やっぱり、魔物が群れを組んでガラドヘイムに攻め入ろうとしていたって言うのは、当たりみたいね」

「んなこたあどうだって良い。今はこいつ等を殲滅して生き残るのが先決だろ？」

ジーンの言葉に、レイルは【精霊憑依】で高揚した心を落ち着かせるように短く息を吐き、

「そうだな……行くぞ！」

同時に地属性の魔術を発動。精霊の力によって無詠唱で放たれた其れは、他の討伐隊の人間が放った魔術と合わさり、魔物の群れに着弾し爆発を起こす。

生じた土煙で魔物の群れが覆い隠されるが、風属性の魔術が魔物ごと粉塵を吹き飛ばす。

「良し、全軍突撃イイイ！！」

ギルド長の号令。其れを聞くやいなや、ジーンは長剣に炎を纏わせながら最前にいた魔物数体を斬り払う。

ゴブリンやオークなどの低位の魔物は、炎に焼かれ斬撃に刻まれる。倒しきれなかった魔物には、レイルが魔術を放ちながら魔力を纏わせた長剣で止めを刺していく。

辺りには同じような光景が繰り広げられていた。半精霊体<sup>ヘルフテ</sup>となった戦士達を先頭に、各自が自らの持てる最大を以って敵と戦っている。

誰も後の事など考えてはいまい。例え戦いの最中に力尽きようとも、今此处で力を出し惜しみしていれば『後』など存在しないのだ。今ここにあるのは『魔物を殲滅して生き残る』か『魔物に殺されて死に絶える』かの二択しかない。

「やッ！ はッ！」

フィエナが風を纏って片手剣を振るう。

- - 攻撃が軽い。

風であるが故に、速度は魔物のそれすらも超えるが、如何せん質量が足りない。不偏魔術にせよ精霊魔術にせよ、其れが持つエネルギー量によって威力が決定付けられるのだ。質量の低い風では、必然的にエネルギー量も低くなり、一撃の威力は他の属性よりも遥に劣るものとなる。

フィエナやレイル達も其れを分かっているため、フィエナは手数で敵を牽制し、出来た隙にレイルとジーンが高威力の攻撃で止めを刺す。サーシャはその援護。といった作戦で戦っている。

だが、だからと言って自分の力不足を自覚しないではない。

齒がゆいと思う。風という性質上当然のことではあるが、それでも姉はその風で他の属性を正面から打ち破る事を可能としていた。魔術が封じられていなければ、トロール如き秒で事足りただろう。あの規格外の姉と比べても仕方がない事は分かっているが、此処にも姉がいれば、と思ってしまうのは止める事が出来ない。

「フィエナ！」

「ッ！ きゃあッ！」

何時の間にか動きが止まっていたようだ。その隙を突かれ、フィエナがオーガに弾き飛ばされる。

半精霊体<sup>ヘルフテ</sup>になっていた為、実質的なダメージは少ないが、それでも無傷とはいかない。

「チィッ、おらアアア！」

「はッ！」

ジーンとレイルがオーガに斬りかかり、その間にサーシャがフィエナの傷を癒す。

魔術による治療が終わり、レイル達のほうを見ると、丁度ジーンがオーガに止めを刺すところだった。

「目の前に集中しろ、フィエナ。死にたいのか！」

「……ごめんなさい」

「まあ良い。……討伐隊にも損害が出てきたようだな」

見れば、鮮血に身を横たえているのは魔物だけではない。討伐隊にいた傭兵や冒険者たちも、次々に討ち取られていく。

最初の勢いが弱まってきたせいで、徐々に圧され始めているのだ。

「こつちも何時までも時間があるわけじゃねえからな。長期戦になるとヤバイぜ」

「分かってる。後の事は生き延びてから考えればいい」

「そうね。……取り敢えずは、あつちから行きましようか」

そう言っつて、強力な魔力耐性を持った魔物の群れを指差すサーシヤ。

其れに頷きながら、改めて剣に魔力を込めるレイル達。

「良し……狙いはアレだ。出し惜しみするなよ！」

「おおよー！」

「ええ！」

「はい！」

「『行くぞ（ます）（わよ）！……！』」

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



## 第一章：第六節 開幕（後書き）

後二、三話でガラドヘイム篇は終わりです。

しかし、予定していないエピソードがどんどん増えていきます。スラムとか有ったんですね、ガラドヘイム。ちなみに主人公はまだスラムに居ます。

では、又次話にてお会いしましょう。

### 次回予告

お礼をしたいという少女と共に、姉弟の家に行った統利は、少女から一冊の魔道書を渡される。

その頃討伐隊は、幻魔の森で思わぬ事態に遭遇していた。

石の街に響く悲鳴。幻魔の森から消えた魔物。そして一冊の魔道書。ガラドヘイムは今、魔物の脅威に滅びようとしていた……。

次回、第一章：第七節 悲鳴

第一章・第七節 悲鳴（前書き）

今までで一番長いです。

## 第一章：第七節 悲鳴

Side 統利

掏りの小僧（から統利の金を奪った破落戸数名）から銀貨を取り返し表通りに戻ってきた統利は、宿屋に帰ろうと通りを歩いていた。

『然し……あの小娘も中々に変わっておるな』

『ああ……』

あの後、立ち去ろうとした統利を姉弟の姉が引き留め、助けてもらった事への礼をしたいと言ってきた。

§

- - 礼なんていいから、宿に帰らせてくれ！

少女に礼をしたいと言われた瞬間そう叫ぶ所だった。これ以上此処にいて、また面倒事に巻き込まれても困る。次はスラムごと魔術で吹き飛ばしてやろうかと、半ば本気で思っている。

統利はそんな内心を隠しながら、少女に断りの言葉を口にした。

「ですが、助けていただいてお礼もしないでは、私の気がすみません！」

「別に、お前を助けた訳じゃない。俺の金を取り戻したかっただけ

だ」

「だとしても、結果的に助けていただいた事に変わりはありません」  
確かに、状況的に見れば統利が少女を助けたという事になり、少女がそれに対して礼をしたいと思うのも、まあ当然といえば当然だ。統利がそれに対して如何感じるかは別として、だが。

『厄介な娘よ。純粋な善意や感謝は、時として最も煩わしい』

『なまじ言ってる事に正当性がある分、下手に断れば俺が悪人だな』

周囲の統利を見る目も、何処となく冷たく感じる。これでは無碍に断る事も難しい。この娘、本気でわざとやっているのではなからうか。

統利は内心頭を抱えながら、再度断りの言葉を口にしようとする。

「悪いが――」

「それに、見た所冒険者や傭兵のようですし、それならばお見せしたい物もあります」

「だからそんな物――」

『待て、主よ。この小娘の申し出を受けよ』

「要らない――ッて、は？」

思いもよらないメフィストの言葉に、統利の口から間の抜けた声が漏れ出る。

『……何だいきなり』

『この娘の見せたいという物、我は興味がある。此処は我の助言に従え』

『其れは助言か？……まあいい、その助言、意味の有る物である事を願うぞ』

「あの……」

少女が戸惑いながら話し掛けてくる。

いきなり奇妙な声を発したまま口を閉ざしていたのだから、訝しげに思うのも当然だ。どうも最近この世界に来てからというものの、突発的な出来事に上手く対処できていない気がする。

こちらの返事を待っている少女に、その見せたい物とやらの所に案内してくれと言うと、一瞬驚いたような顔をされたが、次の瞬間嬉しそうに顔をほころばせた。

「では、こちらに来て下さい。――ほら、カイルも行くよ」  
「うう……まってくれよ姉ちゃん」

少女は統利の手を引いて、姉弟の家へと歩いていく。

『これで良いんだろ？――で、何でいきなりあんな事言い出したんだ？』

『あの娘にな、異質な魔力の残滓があつたのだ。恐らく、常日頃から魔道具の側で暮らしておるはずだ』

『魔道具……転送門のような、か？』

『あれは真正銘稀少品だからな。あれよりランクは落ちるだろうが、相当強力なものではあるう』

『そうか、其れは楽しみだ』

『まあ、見せたい物というのが其れであるとは限らぬが――どうやら着いた様だぞ』

メフィストの言葉に、意識を現実に戻す。確かに、丁度姉弟の家に着いたところのようだ。

家といっても、殆どあばら家ではあるが、その中から僅かに妙な

感じの魔力が漏れ出ているのが分かる。

（此れがメフィストの言う魔道具か）

少女の案内に従って姉弟の家に入ると、感じる魔力が段違いに跳ね上がった。

咄嗟に入り口を振り返ると、扉代わりの垂れ幕に幾何学的な模様と象形文字で出来た、摩訶不思議な文様が描かれていた。

『魔法陣か……其れも相当古い物だな。此れが魔力の流出と、不審人物の侵入を拒んでいたのだな』

『魔法陣……』

『今では使う者は滅多におらぬがな。否、使える者がおらぬといったほうが良いか……。現在の魔術とは根本的に性質が異なっており、からな』

『なるほど』

暫くその魔法陣を観察していると、奥に行っていた少女が鎖が何十にも巻かれた木箱を持って戻ってきた。この家も、外から見れば只のあばら家だが、中に入ってみると結構な広さがある。

「それが気になりますか？ 剣士様」

「ああ……。それと、俺の事は統利で良い。――で、其れが例の？」

「はい、剣士――トリーさん。これは元々、父が冒険者をしていた時にとある遺跡で見つけた物らしいです。力有る魔導書らしいのですが、冒険者として未熟だった父では扱いきれなかったので、仕方なく知人の魔術師に頼んで封印を施したと聞きました」

確かに、この家に充満する魔力の元は、この木箱の中にあるもので間違いない。

それにしても、見れば見るほど異質な魔力を放っている。封印されていて此れとは、どれほどの力を持った魔導書なのか。

統利は、木箱に向けていた目を少女に戻し、これを自分に見せた理由を聞いた。

「父が生前に、これぞと思う冒険者や傭兵と出会ったらこの魔導書を譲り渡してくれと……。それに、今の私に出来るお礼といったら、これ位しかありませんから」

「なら、此れは貰ってもいいんだな？」

「はい。トリーさんがご迷惑でなければですが……」

「否、そんな事は無い。ありがたく頂くとしよう」

そう言つて統利は、魔導書の入っている木箱を少女から受け取つた。

「しかし、此れはどうやって開けるんだ？」

「父が言うには、資格あるものがもてば勝手に解けると」

「それはまたアバウトな……ッ!？」

開ける方法のわからない木箱を調べていると、急に木箱が強烈な光を発した。

数秒間の後光が収まるとそこには木箱は無く、替わりに奇妙な質感の表紙の本が在った。

『主の魔力に反応したようだな。中々にかわつた術だ』

『資格はあつたつて事か。――まあそれはともかく、この魔導書の表紙は何なんだ？ また奇妙な質感だが』

奇妙と言つか、どこかで触つた事の有るような質感だ。こんな表

紙の本など触った記憶は無いが、珍しい動物の皮だろうか。それにしては何処か懐かしいと言うか、普段から触っているようにも感じる。

『ふむ、確かに珍しいと言えば珍しいが……端的に言うならば、人の皮だ』

『人……だと……？』

それはつまり、この魔導書の装丁には人間の皮膚が使われていると言う事か。

メフィストこそあつさりとした物言いだが、だからと言ってああそうですかと返せるはずも無い。心なしか、手に持つ魔導書が呪物のたぐいに見えてきた。

というより、人間の皮膚が使われているなどどう考えてもまともな――まともな魔導具というのも変だが――魔導具ではあるまい。

統利は僅かに顔を顰め、メフィストに抗議の念を送る。

『どういうことだ？ どう考えても持っていると碌な事にならなさそうなんだが』

『問題あるまい。見たところ、人皮を装丁に用いている割には異常なほど邪氣が無い。恐らくだが、聖人聖女の類の皮膚を使っておるのだろくな』

（寧ろ余計に呪われそうな気もするが、メフィストがそう言うのだから大丈夫なのだろう。多分）

無理矢理ではあるが、一応は納得する統利。それに、此れが呪われた魔導書であるなら、封印を解いた時点で既に手遅れだろう。

悪魔であるメフィストとも契約しているのだ、今更人間の皮膚が装丁に使われた魔導書如きで騒ぐ事もあるまい。



ふう、とため息を1つ吐き、統利は此方の反応を窺っている少女に向き直った。

「……これは有り難く貰っておくよ。確かに、中々強力な魔導書のようだし」

「気に入っていただけたようで何よりです」

いや別に全くこれっぽっちも気に入っていないし寧ろ此れ厄介払いじゃないのかと言いそうになる心を抑え、統利は少し引き攣った笑みを浮かべ少女に別れを告げ、姉弟の家を後にする。

スラムの出口の路地に入り、姉弟の家が見えなくなると統利は壁にもたれかかり、盛大にため息を吐いた。

「どうするんだ此れ……。呪われる呪われない以前に、装丁に人間の皮膚を使った魔導書なんて持ち歩きたくないぞ、俺は」

『贅沢な奴よ……。これほどの魔導書、本職の人間ならば狂喜するであろうに……。』

『俺をそんな理解不能な狂人と一緒にしないでくれ……。で、何とか成らないのか此れ？』

放たれる魔力は最初と比べ随分と小さくなっているが、こんなあからさまな物を持ち歩いていれば確実に目立つ。それも悪い意味で。正直、こんなもの持ち歩いてて警備隊につかまっても、文句が言えないのではないだろうか。

魔術師が狂喜する品物といっても、実際に人前で此れを晒す訳ではあるまい。それこそ、人間の死体を弄びましたと公言するようなものだ。

姉弟の父親も、実力云々よりそのせいで使えなかったのではなからうか。

『取り敢えず、ローブかマントでも買ってその下に隠すか』

『其れが妥当であろう。流石に我も、堂々と其れを見せびらかせとは言えぬな』

『言われたら即行契約の破棄を要求するぞ悪魔』

メフィストと言い争いながら、統利は表通りへと足を進めた。

§

「はあ……」

ほんの数分前の事を思い出し、統利は再びため息を吐く。

件の魔導書は、裏路地を出る前に創ったローブを羽織ってその下に隠してある。

最初は商店で買おうかと思っていたが、ならば魔力も隠せたほうが良いのではないかと言うメフィストに、其れもそうだとこの世界に来て二度目となる虚界の魔術を使った。

メフィストの助言で、姉弟の家の入り口の垂れ幕に書かれていた魔法陣を参考にしたので、魔導書自体の魔力は完全に隠す事が出来た。

二日ぶりの虚界の魔術だが、矢張りかなり疲れる。とは言え、ため息の原因は疲れではないが。

この世界に来てから、どうも予想外の事態に数多く直面している

気がする。

『天性の苦勞人と言つた所か。我としては樂しめて良いが』

死に晒せ腐れ下道

悪魔に言っても仕方ないが、悪態を吐かずにはいられない。メフ  
イストと契約したのを、少し本気で後悔してきた。

『もういい、かえって寝る』

『このような時間から寝ようなどと、駄人の極みぞ』

『誰のせいでこんなに疲れてると思っ  
ているんだ』

『ふん、まあ戻るならば早くしたほうが良からうな。主の事だ、どうせまた厄介ごとに巻き込まれるに決まつておる』

『やめろよ。そんな事言つて本当に巻k「キャアアアアアア!」』

『オイ……』

「尊をすれば影か」

こいつ  
メフィストは悪魔じゃなくて疫病神なんじゃなかつたかと頭痛をこらえながら、統利は悲鳴の聞こえた方へ頭を向ける。

[illegible]

統利からほんの百数十メートル程度離れた所では、阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっていた。

飛び散る鮮血、撒き散らされる肉片、響く悲鳴。

およそ陽気な昼下がりの大通りにはとても似合わない残酷劇を演

じているのは、トロールにも匹敵しそうな体格の、然しより凶悪な外見をした一匹の魔物。

その魔物が手に持った大槌を振るう度に、大通りは深紅に染められ鉄臭いにおいを濃くしていく。

『魔物だと、何故此处に！？』

『アレは――オーガか？　いかん、此れは不味いぞ、アレは――ッ！』

ギロリ、とその魔物――オーガ――が統利へとその血走った眼をまなこ向けた。

殺気。

身体が凍りつきそうになるほどの其れを受け、統利は無意識に後退る。

解かる。理性ではなく本能で、アレはトロールとは似ていても全く違う、もっと兇悪で強暴なナニカだと。トロール如きで梃子摺るような者が相対して良いモノではないと。

「グギヤオオオオオオ！！」

「ッ！？」

咆哮一つ。

直後、オーガはその体躯を撓らせ跳躍した。

その鈍重そうな外見からは想像もつかないほど軽やかに空を駆け、ただの一飛びで百数十メートルの距離を越えてきた。

「くッ！」

咄嗟に真横に身を投げる統利。寸前までいた場所には、オーガの大槌に挟られた大地があつた。

「術式：獄焰・数！<sup>あまた</sup>」

無数の炎弾を至近からオーガに放ち、僅か怯んだ隙に大きく後ろに跳び退る。

「術式：獄焰、<sup>らいてい</sup>雷霆、<sup>かまいたち</sup>窮奇、<sup>むひょう</sup>矛雹」

動きの止まっているオーガにむかつて、高威力の魔術を連続で放つ。

着弾の衝撃で捲き起こる風塵で、オーガの姿が完全に隠れていく。

「続けて術式合：<sup>あわせ</sup>獄焰・業焰・爆焰・刃焰：混合術式：<sup>そうえん</sup>叢焰！」

異なる性質を持つ同じ属性の魔術を四つ掛け合わせたそれは、さながら小型の太陽であるかのように輝き凄まじい熱気を周囲に撒き散らしている。

轟ッ！ と叢焰が塵芥を燃滅させ、オーガへと襲い掛かった。

叢焰がオーガに直撃し、摂氏数千度にも及ぶ炎熱が周囲を火の海へと変える。これほどの熱量、仮にトロールと言えど秒も持つまい。それほどまでに圧倒的な威力。

『此れは驚いた……。本来の三割程度の威力だろうが、初めて使った合成魔術を成功させるとはな……。』

『人間死ぬ気になれば何でもできるさ。――で、流石に此れで死んだか？』

一合も打ち合ってすらいないので正確にはわからないが、少なくとも先日戦ったトロールの倍以上の身体能力は持ち合わせているだろう。勿論、魔術耐性もそれに順ずるとみた方が良い。

だが、あのトロールでさえ獄焔の一発で表皮は炭化したのだ。メフィストの言うように本来の三割程度の威力であろうとも、元が単体魔術の数十倍以上の威力を誇るといふ合成魔術、たかだかトロールの倍程度の強さで耐え切れるものではない。

地面を融解させるほどの威力に勝利を確信する統利。

しかし、メフィストからは己の契約者の勝利に対する何の感情も伝わってはこない。それどころか、数千度の焔に焼かれ骨すら残さず燃え尽きた筈のオーガに対し、未だ警戒を解いてはいない。

『メフィスト、どうしたんだ何時までも？ もう敵はいないだろ』

『否……アレがオーガならば、この程度では倒せぬ』

『おいおい……幾らなんでもあれだけ食らったんだぞ、流石に死んだだろ』

あれで死なないのであれば、今の統利にはどうしようもない気がするが。

何せ、あれほどの威力の魔術を使おうとすれば、かなり精神を集中させなくてはならない。不意打ちならともかく、戦闘中にそれを行うのは中々難しい。まあ、圧倒的实力差があるなら話は別だが。

ともかく、【破滅の恒星】には及ばないものの現在統利が使える魔術の中では、特に強力なものを使ったのだ。これで生きていけるとなると、正直打つ手が殆どなくなるのだが――

「グオオオオオアアアアア！」

「ッ！ 何だと！」

『矢張りか!』

咆哮が轟いたかと思うと、粉塵の中から巨大な影が飛び出してくる。その姿は、紛れもなくオーガ。

高位魔術が直撃したはずの皮膚表面には僅かにダメージ痕は見られるものの、それは獄焔を食らったトロールよりも軽く、既に傷もふさがりかけている。

オーガは大槌を振り上げ、統利に力任せに叩きつける。それは突進の威力とあいまって、魔力による身体強化をしていない統利では致死となりうる一撃。

それを辛うじていなす統利。力任せの一撃を躲されたオーガが体勢を崩した一瞬の間に、身体の隅にまで魔力を浸透させる。

身体強化は出来た。が、僅かな時間だけではそれも十分なものではない。下手に一撃を貰えば、到底軽傷では済むまい。

良くても先頭に支障が出る程度のダメージは負うことになるだろう。

『くッ、何故魔術が……』

『だから言っただであろ。アレ等の身体能力は、良くてもトロールの二倍程度だ。だが、魔術耐性に関してならば、巨人種でも最高位に位置するギガント族に次ぐ程だ。俗に魔術師殺しとも言われているな』

『ギガント族とやらが……くッ……どれほどのものかは知らないがとにかく……ぐッ……今の俺の魔術では碌なダメージは与えられないと言っ事か』

メフィストに念話でオーガについて聞きながら、暴力の嵐の如きオーガの連撃を長剣でいなし続ける。

オーガの攻撃は当たれば重傷はほぼ確実だが、所詮技術も何も無  
いただ身体能力に頼った攻撃だ。防御に専念すれば容易く防ぐ事が  
出来る。

ただ、逆に言えば攻撃に転じる事が出来ないでいると言う事でも  
ある。

何せ、体勢を崩したと思ってても力任せに攻撃してくるのだ。下手  
に斬りかかるものなら、大槌で弾き飛ばされる事は間違いないだ  
ろう。

「ちいッ、ならば……。術式【電雷】！」

放たれるは雷光。低位魔術のため威力は低いが、その閃光はオー  
ガの目を焼き致命的な隙を作り出す。

「はッ！」

下段から長剣を斬り上げる。速度の乗った斬撃は、容易くオーガ  
の胴体を両断する――

「なッ!？」

――事は無かった。

常人の目には映らぬほどの速度で放たれた斬撃は、オーガの皮膚  
を切り裂くも、その身を絶つ事なく勢いを失い停止する。

「グオオオオオオオオ！」

驚愕し動きの止まった統利へ、体勢を立て直したオーガが大槌を



横薙ぎに叩きつける。当たれば如何に身体強化していようと、骨を砕かれ内蔵は潰される事だろう。

「ッ！ くそッ！」

完全に不意を突かれたその一撃に反応できたのは、最早奇跡と言つていいほどの偶然。

実戦の経験が無くとも、地球に居た頃にひたすら研鑽を続けて得た剣士としての勘。今まで物語の中でのみの話だと思っていた幻想を、現実のものとして目の当たりにした衝撃で一時的に狂っていたそれは、事此处に至りようやく正常に働いた。

その勘に従い、咄嗟に剣で防御しようとする統利。だが、オーガを断つに至らずともその身に深く突き刺さった剣身は、オーガの強靱な筋肉により抜き去ることが困難になっている。

統利はそれを理解した後すぐに魔力を集中させ、身体を更に強化すると共に大槌の直撃するであろう個所に、魔力の障壁を張る。

だが、それは一秒にも満たない時間。如何に魔術の知識を持つていようと、どれほどの魔力を内包していようと、魔術の使用や魔力の運用に慣れていない統利では大槌の一撃を防ぎきるには時間が足りない。

振るわれた大槌は、威力を減らしながらも障壁を破壊し統利を弾き飛ばす。

統利は数メートルほど吹き飛び、空中で身体を捻り受身を取った。

「ッと……グッ！」

受身の衝撃で左腕と左胸に激痛が走る。見れば左腕はあらぬ方向に曲がっていた。恐らくあばらの二、三本は折れているだろう。た

だ幸運な事に、折れた肋骨は内臓には刺さっていないようだ。

吹き飛ばされた時にオーガから抜けた長剣を支えに立ち上がり、折れた骨を魔術で治療する。

その間オーガは追撃してこず、渾身の一撃を食らっても立ち上がった統利を、警戒するかのように見て唸っていた。

『ふむ……警戒しておるな。仮にも胴体に剣が刺さったのだ。幾らなんでも軽傷ではあるまい』

『だとしても、何故途中で止まったんだ？ 結構魔力込めたつもりなんだが』

『アレ等はこの世界でも異端だ、生半可な攻撃では殺れぬ。だが、今の主がアレを斬れるほどの魔力を剣に込めようとすれば、致命的な隙が出来るぞ？』

つまり、生き延びたければあのオーガの動きを止めろ、と言うのか。

確かに、逃げる事が出来ず、倒すにしても魔術が祿に効果が無い以上、今現在統利が制御し得る最大の魔力で強化した剣による一撃でなければ不可能だろう。如何に魔力耐性が強かろうと、魔力で強化されたものには意味が無いのだから。

ただ問題は、どうやってオーガの動きを止めるかだ。

魔術で捕縛しようにも抵抗<sup>レジスト</sup>されてしまう。戦いながら膨大な魔力を剣に込めることは不可能なので、取れる手段も非常に限られてくる。

いや、オーガが統利を警戒しているこの好機にとるべき手段など、初から決まっている。

『虚界の魔術、か？』

『ああ、あれならオーガに対抗できる物を創れるだろ。……まあ、結構魔力も食うからな、あれを仕留めるだけの魔力が残るかは解らんが』

『問題なからう。今の主に一度に扱える魔力の限界はあれど、魔力の総量が並外れて強大であることに変わりは無いのだ。アヤツを殺す程度の魔力は残ろう』

ならば、採るべき道は只一つ。

（虚界……接続……）

虚界への意識接続のために、刹那だけオーガから意識が外れる。無論、それを見逃すようなオーガではない。

「グガアアアアア！」

咆哮一つ。再び嵐のようなオーガの攻撃が始まる。

それを剣で防御しながらも、虚構の想像を同時に続ける統利。

だが、多大な魔力を消費する虚界の魔術を行使するため、最低限の身体強化しか出来ず、虚界の魔術の特性上防御に意識を集中できないため、長くは防いでられない。

（形状は……沼……）

底無しである必要は無い、最低限魔力を込める時間さえ稼げればいい。

（素材は……闇……）

光すら飲み込む深淵にて、脱出不可の楔となす。

（範囲……三メートル……）

広大である必要は無い。只、眼前の鬼を捕捉出来る範囲でいい。

（創造……完了）

夢幻の世界にて創られた虚構は、統利を通じて現実へと昇華される。

次の瞬間、統利とオーガの足元に闇が広がる。

「術式：獄焰」

沼が現界すると同時に獄焰を放つ。無論オーガに効きはしないが、その衝撃で後ろへ飛び沼の上から退避する。

無茶なやり方ではあるが、此れで自身までもが沼に飲まれる事は無い。

オーガは突如現れた闇の沼に反応できず、ずぶずぶとその身を沈めていき、腰まで沈んだところで停止した。これで沼が消えるまでは動く事は出来ないだろう。

（とは言え、沼もそう長くは持たないな。……さて、久々にマミヤの業わざを使うとするか）

長剣を納刀し、腰を落とし右手を柄の前に置く。所謂抜刀術の構え。

それは、あまり切断を重視しない西洋剣を扱う為の技法ではなく、「断ち切る」ことを重視した刀を扱う為の技法。西洋剣を使ってい

るものの、一撃で相手を断ち切る必要がある今この状況において、最も適した技法であろう。

統利は目を瞑り、極限まで意識を集中させる。どれほどの威力であれば良いのか正確にわからない以上、出し得る最高の一撃を持って一擲乾坤を賭さねばならない。

そのために、虚界の魔術を使ったときよりも遥かに強い集中を要する。

膨大な魔力が、統利の持つ長剣の剣身に集まっていくのを見て暴れだすオーガ。だがもう襲い。

如何に暴れようとも、闇がより纏わりつくだけで逃れる事は出来ない。そう創ったのだから当然のことではあるが。

『主よ、これ以上の魔力は主の体が持たぬ。沼も後数秒で消えよう』  
『委細承知。沼が消えた瞬間に、最速にして最強の一撃で奴を断つ』  
『！』

徐々に沼が消えていく。それと同時に、沼に沈んでいたオーガの下半身が姿を現していく。

統利は最後に息を整え、オーガが沼の拘束から逃れるのを待つ。

「グルアアアアオオオオオ！」

残り僅かとなった沼の拘束を力任せに引きちぎり、オーガが咆哮と共に統利に襲い掛かってくる。

対する統利は不動。迫り来る脅威を前にして微動だにしない。

瞬く間に距離を詰めたオーガは、常人には視認する事すらあたわぬ一撃を放つ。

かなりの速度ではあるものの、統利には視認が可能なレヴェル。にもかかわらず、統利は未だ避けようとしない。

否、避けないのではなく避ける必要が無いのだ。

「真宮流抜刀術：不拔……」

統利の右手が霞む。抜刀術には不向きな西洋剣でありながら、抜合の極みにまで至ったその業は、容易に後の先を取ることを可能にした。

シューイン、キンツ！

まさに瞬光。鞘走りと納刀の音が、間を開けず連続で聞こえるほどの速度で放たれた斬撃。

常人どころか達人にすら視認が困難なソレは、初撃で大槌を斬り飛ばし、返す一閃で袈裟懸けにオーガを両断する。

「グ……ガ……ア……？」

「マミヤの抜合は最速にして必殺。……無惨と散りて黄泉路を惑え、鬼人……」

ドサツとオーガが倒れる。斜めに断たれたその鬼は、既に事切れ骸と化していた。

「ふう……。ツ！？ くツ……」

これで終わったと気を抜いた瞬間、統利の体から力が抜け崩れ落ちる。

咄嗟に剣を抜き地面に突き立てるが、支えきれずに膝をつく。

今までに無いほどに疲労している。当然だ。何せ、疲労が激しい虚界の魔術を使った後に、処理能力の限界までの魔力を只一撃に込めたのだ。更に、不拔自体も本来ならばかなりの集中を要する。これで疲れない筈がない。

『流石は主よ。あれほどの魔力を暴走させずに制御しきるとはな』  
『正直、満身創痍だが……』

酷く目眩がする。気を抜けば倒れてしまいそうだ。

『討伐隊の者共も、既にこの街に向かっておる。眠るが良い、後は我が見張っておこう』

『ああ、頼む。流石に……きつ……い……』  
『然し、……や此れほど……く……を倒そうとは……り……契……の……』

統利は、メフィストの独白を聞きながら薄れ行く意識を手放していった。

S i d e   O u t

『ふん、久方振りの来訪者であつたが、中々の拾い物のようだ。我が隷獣を屠るとは……こ奴、我の次の玩具に相応しい。精々我を楽しませよ――我が主にして契約者、熾条統利よ』

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



## 第一章：第七節 悲鳴（後書き）

……これ魔導書のくだり要らない気がします。前回、予告で書いてしまったため入れたわけですが、直後の戦闘で何の役にも立っていないどころか、明らかに忘れられてる訳ですし。

多分今後も余り出てこないんでしょうけど。流石にアレを人前で堂々と使うのもどうかと思いますしね。装丁人間の皮膚ですし。

後最後の最後で怖い事言ってる人？ が……。まあ気にしないで下さい。

それはさておき、これからの予定ですが、後一話か二話でガラドヘイム編が終了し、その後によりやく冒険の旅へ出ます。

取り敢えず暫くは確固たる目的の無い旅になります。魔王とか居ないですし。

さて、それでは簡単な次回予告を。

ガラドヘイムにオーガが侵入したと言う知らせを受けた討伐隊。急遽進攻を止めガラドヘイムに帰還した彼等が見たものは、身体を上下に断たれ事切れたオーガと、その側で死んだように眠る一人の少年の姿だった、

目覚めぬ少年と来襲する魔物の群れ。石の街を舞台に、人と魔物の決戦の火蓋が切って落とされる。

次回、第一章：第八節 決戦

あれ、これ後二・三話じゃ終わらなくね？

## 第一章：第八節 決戦（前）

「このエリアはこれで終わりか……」

ドンツ、と巨大な戦槌バトルハンマーを地面に置き、屈強な体の戦士は呟いた。

彼の名はゲアハルト・シュタイナー。ガラドヘイム傭兵ギルドの長であり、自身も鉄槌ゴッドハンマーのゲアハルトの異名をとる兵だ。じつもの

ゲアハルトは、討伐隊を率いて最前線で戦っていた。

今も、襲い来るトロール三体を始末したばかりだ。これで、幻魔の森のこのエリアに居た魔物はあらかた片付いた。

だが、順調に作戦が進んでいると言うのに、ゲアハルトの表情は暗いままだ。

ここに来るまでに死傷者が出たから、ではない。

いや、確かにそれもある。だが、魔物の巣窟に乗り込む以上、この程度の損害は折込み済みだ。

ゲアハルトとて歴戦の古兵。ふたつもの事前に予想出来ていたのだから、その程度で戦場の只中にて感情を揺らすことは無い。

ゲアハルトの悩みは、この森に入ってから感じていた、奇妙な違和感に起因する。

（何故だ？ 予想より魔物が弱い）

広大な幻魔の森は、森の奥に行くほど生息する魔物の種類も増え、魔物の能力も幾何級数的に強くなっていく。

故に事前の作戦会議での、このエリアの魔物掃討時点での死傷者

の数は、討伐隊全体の三分の一を越えると予想された。  
然し、いざ此処に来て見れば、討伐隊の損害は予想されていた数の八割にも満たない。

ゲアハルトからしてみれば、予想されていた損害ですら、樂觀視しすぎていると思っていた。だと言うのに、実際の損害は予想を遥か下回っていたのだ。

つまりそれは、幻魔の森にて戦った魔物が、それだけ予想と比して弱かったと言う事。

有り得ない……、と思う。

ゲアハルト達が敵を過大評価しすぎていた 訳では無い。

幻魔の森への討伐隊を結成する事になった経緯を考えるなら、それは当然の事だ。寧ろ、それでも未だ相手を過小評価していると言われても、何ら不思議ではない。

だからこそ、予想より損害が少なかった事に対する安堵よりも、不自然に弱かった魔物に不気味さを感じてしまう。

「だが、魔物そのものの能力が落ちている訳ではないな。矢張り、あの時の魔物の強さが異常すぎただけか？ - 否、それだけならばこの作戦、此処まで苦戦する事も無かったか……」

どれだけ考えても答えが出ない。 - いや、もとよりイレギュラーな出来事だった以上、判断要素が少ない現状で、幾ら考えようとも答えが出るはずも無い。

せめて、もう少し事態を調べる時間があればよかったのだが。

（答えが出ない以上、考えても無駄か。気にしすぎて、戦闘に差し障っても問題だな。頭の片隅にでもとどめておけばよいか）

ふう、と溜め息を吐き、思考を切り替える。  
今はとにかく体を休めるのが先決だ。まだ戦いは終わっては居ないのだから。

## Side レイル

周りの傭兵達は、ほぼ例外なく顔に疲労の色を見せている。何れ劣らぬ歴戦の戦士達だろうが、こう連戦が続けば、流石に作戦開始時の勢いも失せると言うものか。

フィエナ達もその例に漏れず、一様に疲労で顔色が悪い。

何時もは騒がしいジーンですら、先ほどから一言も喋ってはいないのだから、討伐隊の疲労の度合いが良く分かる。

「……なあ、レイル。目標地点まで後どれくらいだ？」

「このエリアまで来ると、後は……およそ十ケイメルトル位か？」

「マジかよ……」

ジーンが呆然と呟く。此処まで来るのにも、かなりの労力を要したのだ。

精霊魔術は先の【精霊憑依】の反動の影響で使えず、魔力も底をつきかけている。連戦のせいで体力も限界が近い。なのに、後十ケイメルトルも有るという。

「また戦闘しながらだろ。無理じゃねえか？」

「流石に今日はもう進まないだろう。結界で安全を確保した後に、このエリアでキャンプじゃないか？」

このまま進めば、高確率で全滅しかねない。元より、一日では終わらないだろうと予想されていたのだ。討伐隊の疲労を考えても、今日の進攻はここで止めるべきだろう。

レイルのその予想を聞き、ジーンが安堵の息を漏らす。

「でも、これだけ戦力を投入して、ガラドヘイムの方は大丈夫なのかしら？ 別ルートで魔物が襲撃したら危ないんじゃない……」

ふと思いついたようにサーシャが呟く。

実際、ガラドヘイムに残っている戦力は、街の警備隊と討伐隊に参加しなかった、或いは参加できなかった傭兵たちだけだ。

とは言え、ガラドヘイム警備隊とてそれなりの実力はある。そうむざむざと魔物にやられはしないだろう。

「傭兵の方はどうかは知らんが、ガラドヘイム警備隊でも梃子摺るような魔物なら、保有魔力のせいで討伐隊に気付かれずに幻魔の森を抜けるのは無理だろう。そんなに心配する事も無いと思うが」

「それは――確かにそうね。どの道心配した所で、私たちに何が出来るでもないし」

「そう言う事だ」

とは言え、確かにそれは気になる。この作戦の元が元だけに、それもあり得ないとは言えないのだ。

最も、だからといってレイル達に何か出来るというわけでもないが。

その可能性についてレイルが黙考していると、少し離れた場所が騒がしいのに気付く。

周りに目を向けると、ゲアハルトが誰かと話しているのが見えた。他の討伐隊の者たちも、何事かとそちらに目を向けている。

「馬鹿な……！ 我々の目を潜り抜けてガラドヘイムを襲撃すると  
は――」

「如何します？ これが事実なら、警備隊では荷が勝ち過ぎるか」と  
「決まっている。街へ戻るぞ」

「宜しいので？」

「事が事だからな。――聞け！ 討伐隊の勇者たちよ！ 先ほど、  
ガラドヘイムから連絡が入った。幻魔の森に棲息する魔物が一体、  
ガラドヘイムを襲撃したそうだ。無論、警備隊がすぐさま迎撃に入  
ったそうだが――」

そこで一旦言葉を切り、討伐隊を見回した。レイル達も含めて、  
それが如何したのかと言いたげな表情をしている。

「――恐らくはそう持たないだろう。否、既に壊滅している可能性  
もある」

傭兵達に驚愕が広がる。当然だ。討伐隊に気付かれない程度の低  
級な魔物に、ガラドヘイム警備隊が敗北を喫する等と、誰が想像出  
来ようか。

「その――ガラドヘイムを襲撃した魔物とは？」

誰かがゲアハルトに問い掛ける。

「……………オーガだ」  
「『ッ！？』」

先ほど以上の驚愕が、傭兵達を襲った。

オーガ。

並み居る魔物の中でも上位に位置し、極めて稀少な部類に入るオーガ。その姿を実際に見たことがあるものは、彼等の中でも果たしてどれほど居ようか。

しばしの静寂の後、討伐隊の傭兵達がゲオハルトを質問攻めにする。

「静まれい！！！」

魔力の籠った一喝に、傭兵達が静まり返る。傭兵達が静かに自分へ注目しているのを確認し、ゲアハルトは話を再開した。

「何故　、と思う気持ちはわかる。だがしかし、今はその様な問答を行っている時ではない。事は一刻を争うのだ。これより我等討伐隊は、作戦を中止、速やかにガラドヘイムへと帰還する！」

ゲアハルトの宣言。フィエナ達討伐隊は、其れに我知らず息を飲んだ。焦りの見え隠れする其の声色に、傭兵達は改めて事の重大さを理解する。

歴戦の強兵たるゲアハルトが此れほど動揺するのだ、ガラドヘイムが壊滅したかもしれないと言うのも、強ち只の比喻ではないのだろう。

一瞬傭兵達の時が止まるが、流石プロというべきか、直ぐに我を取り戻し帰還の準備に入る。

大して休息も得られなかったが、今は其れを気にしている時間はない。フィエナ達も、疲労の消えぬ体に鞭打って準備を進める。



「てか、オーガってマジかよ……。何で気づかなかったんだ？」  
「矢張り誰かが事件の裏に居るのか？ 転移門でも使えば、此方には気づかれずに済むか……。索敵特化の魔術師も居たのだから」

偶然見つからずに抜けた、などと言う事はまず有り得ない。加えて、ガラドヘイムを襲撃したのはオーガー一匹だけなのか、という問題もある。

オーガだけでもかなり厄介だというのに、其れが数体、或いは他の魔物までもが居るとなれば、疲労した討伐隊では相手にならないかもしれない。

「そういえば……。トリー君ってまだガラドヘイムに居るのかしら？」

ぽつり、とサーシャが呟く。

まだガラドヘイムに滞在する積もりのようだったが、だとすればオーガの襲撃に巻き込まれている可能性がある。

フィエナが其の呟きを聞いて、はっと顔を上げる。

よもやオーガに戦いを挑むなどという無茶はすまいが、狙われてしまえば逃げることも難しい。トリーはかなりの魔力を持っているため、其れが脅威と認識されてもおかしくはないのだ。

「だ、大丈夫でしょうか！？ オーガと戦ったりなんかしたら！」

「落ち着きなさい、フィエナ。あれ程の魔力を持っているのだから、逃げに徹すれば早々大事にはならないわよ」

顔色を変えて詰め寄るフィエナを、サーシャが宥める。

だが、確かに其れは心配ではある。なまじ強いからこそ、戦うという選択肢を選んでしまいかねない。

とはいえ、昨日のトーリの様子からすれば、其の可能性もそう高くないだろうが。ただ、万が一という事もある。

レイルは頭を振り、其の思考を打ち消した。このまま思考を続けていても、碌な考えしか浮かぶまい。元より幾ら考えても詮無い事だ。その様なことよりも、今は目先に集中すべきだろう。

キャンプを張る前だったため、出立の準備にはさほど時間はかからない。他の傭兵達も準備は終わり、ゲアハルトの言葉を待っている。

一通りの準備が終わったのを確認して、ゲアハルトが号令をかける。其の言葉と同時に、集団は一斉にガラドヘイムへと向かって行軍していく。

レイルたちもまた、其れに遅れないようにと足早に歩き出した。石の街と、其処で出会った一人の少年の無事を願いながら。

S i d e    u n k n o w n

自らの下方を武装した集団が駆けていくのを、其の人影は眺めていた。ローブから覗いた口元には、愉悦の微笑が浮かんでいる。

「如何やら、オーガが既に斃された事までは知らないようだね」

其れもつい先ほどの事。寧ろ知っている方が不自然ではあるのだ

が、よもやあれ程容易くオーガが斃されるとは想像の埒外であったため、もしかとの不安が有ったのだ。

何せ、疲労した討伐隊をガラドヘイムへと撤退させるのが本来の目的とはいえ、ガラドヘイムを墮とすつもりで仕掛けたことであった。其の為に、苦勞してオーガをガラドヘイム近隣に轉移させたのだ。

然し、実際は只一人の少年に斃されてしまった。其れも、其の少年に大傷の一つも与える事無くだ。

「轉移門を破壊した時から目はつけていたけど、あれは驚いたな。単純な戦闘能力だけなら、オーガが勝っていた筈なんだけどね。殺し合いの才能でも有るのかな？」

討伐隊の行軍を眺めながら、人影は独白を続ける。

「クス……。契約者というのも、中々に底の知れない。まだまだ遊べそうだ。さしあたっては、今回の実験を終わらせるとしようか。其の後に挨拶に行こう。うん、其れが良い」

其の言葉とともに、人影が空の赤に融けてゆく。

全くの無詠唱での轉移魔術を行使した人影は、其の姿が完全に消え行く前に、眼下の集團の中の一人に目を向けた。

「君も因子の一つだ。精々彼と仲良くしてあげてくれ」

そして人影は其の姿を消した。

「？」

ふと、違和感を感じて頭上を見上げる。だが、其処には沈みかけた日によつて赤々と染まる空のみがあつた。

気のせいだったかと、フィエナは顔を戻す。矢張り疲れているのだろう。まともに休むことも出来なかつたのだから、其れも仕方のないことではあるが。

「フィエナ。どうかしたの？」

「ん、なんでもないよ。大丈夫」

「そう？　ちゃんとした休憩も出来なかつたから、あまり無茶はだめよ？」

フィエナの言葉に、不思議そうにしながらも特に疑問にも思わなかつたのか、それ以上は追求せずにフィエナの体力を心配するサーシャ。

「わかつてる。ありがとう、サーシャ」

「どういたしまして」

其れから誰一人と喋る事無く、討伐隊は森を進んでいく。

フィエナも、逸る心を抑えながら、魔力の回復に努めている。動きながらでは、大した回復は見込めまいが、其れでも万が一の時には足しにはなるう。

（トリーさん、ガラドヘイムの皆、どうか私たちが到着するまで無事でいて！）

「おい、森の出口だ！　ガラドヘイムはもう直ぐだぞ！」

「!？」

先頭に行く誰かの声が届き、討伐隊は知らずと其の速度を上げていく。

ガラドヘイムはどうなったのか？ あの街はまだ残っているのか？ それともオーガに蹂躪されつくしたのか？

討伐隊の誰もが、ガラドヘイムが近づくにつれ、其の不安を隠せなくなっていく。フィエナもまた、疲労だけではない心臓の動機に、押しつぶされそうになっていた。

ガラドヘイムの門に着いても、普段なら居るはずの門番たちの姿が見えない。幻魔の森方面のこの門に誰も居ないなど、まず有り得ない事だ。

「止まれ！ ベルディオ、索敵を頼む」

「了解しました」

ゲオハルトの命に、ガラドヘイムギルド専属魔術師、ベルディオ・デルベインが詠唱を開始する。補助魔術に特化した彼ならば、ガラドヘイム全体を調べることが出来るだろう。

討伐隊の傭兵は、焦燥を抑えながら結果を待つ。

数分にも感じられた数秒の後、ベルディオから発せられていた魔力が収まっていった。ガラドヘイムの探索が終わったのだろう。

「ベルディオ、結果は？」

「オーガは居ません。その他の魔物の存在も感知できませんでした」

「敵が居ない？ ……まさか、既に手遅れだったのか!？」

ゲアハルトが声を荒げながらベルディオに詰め寄ると、周囲の傭兵たちが騒ぎ出した。

ベルディオは片手を挙げて其れを沈め、ゲアハルトの言を否定する。

「いえ。すみません、言葉が足りなかったようですね。正しくは、”生きた”魔物の存在は感知できません、ですね。警備隊の修練所に、件のオーガの死体らしき物を感知しました。如何やら、我々が戻るまでもなく、既に誰かが斃してしまっていたようですね。其れなりに被害はありますが、ガラドヘイム住民の無事も確認しました」

「ッ！?!?」

「……どういうことだ、其れは？ オーガを斃せるものが、この街に残っていたと言うのか？」

「落ち着いてください。今から、私が感知した全てをお話します」

そう言つてベルディオは説明を始める。

まず最初に彼が感知したのは、ガラドヘイムの住民たちだった。負傷者や、少数ながら死者も出たものの、彼らの殆どは既に日常生活に戻り始めていたという。

そして次に、件のオーガの搜索を始めたベルディオは、ガラドヘイム警備隊本部の修練所に其の死体を発見する。ただ、大通りの一角に戦闘の跡と、膨大な血液を処理する住民たちの姿があったことから、戦闘後に死体を移動させたものだろうとの事。

其れを聞きながら、フィエナ達四人は『オーガを斃したものに  
ついて密かに話し合う。』

「オーガを斃した者。一人だけ心当たりがあるのだが」  
「奇遇だな、俺もだよ」

何処か難しげな顔で呟くレイルとジーン。フィエナにも一人、其の心当たりはあった。

己を盗賊に荷を取られた旅人と言いながら、大陸最強クラスの魔人にも匹敵しよう魔力を持ち、単独でトロールを撃破することが出来る少年。トリー・シジョウと名乗った彼ならば、或いはオーガすら斃せるかもしれない。

「やっぱり、トリー君なのかしら？」

「警備隊では話にならん。ランクの高い傭兵は討伐隊に。ならば、俺たちが知っている限りではトリーが最も可能性が高いな」

「……でも、トリーさんがオーガと戦ったりするでしょうか？」

そう、疑問なのはそこだ。如何に魔力量が多くとも、其れを使いこなせていなければ意味は無い上、オーガ自体に魔術が通用しにくいと言ったこともある。そもそも、死を極端に忌避するトリーが、態々そんな相手と戦うだろうか？

否、普通は逃げるだろう。トリーでなくとも、其れは変わらないはずである。基本的に、どんな強者であってもオーガとの戦いは避けようとするものだ。

戦闘において重要なファクターである魔術が効かないのだから、其れは当然のことと言える。

実際のトリーの強さがどれほどのものかは分からないが、あの歳でオーガに対して一方的な戦闘を挑めるほど強いとは思いがたい。ならば、持ちうる全力を持って戦闘を回避、ガラドヘイムからの離脱を行うのではないだろうか？

「逃げる隙無く襲われたって事もあんだろっけどよ、あれほどの魔力があつて魔術が使えるなら、オーガから逃げんのは難しくないはずだしな」

「ベルディオならば、トーリの魔力を感知できるだろうが、ああ、如何やら分からなかったようだな。何れにせよ、直ぐに分かることだ。可能性としてゲアハルトに報告しておけばいい」

ベルディオの説明が終わったのを見て、レイルが話を切り上げる。其れと同時に、ゲアハルトの号令がかかり、フィエナ達も注目する。

「如何やら、最悪の事態は避けられたようだ。これより、俺とベルディオはオーガの死体を確認しに行く。ガラドヘイムギルド専属傭兵は本部に戻り、状況確認後ガラドヘイムの機能復帰を行え。それ以外は警備隊に変わり周囲警戒を頼む」

其れを聞いた傭兵たちは、速やかに行動していく。そんな中、警備隊の修練所へ行こうとしていたゲアハルトに、フィエナ達は話しかけた。

「あの……」

「ん？　なんだ、お前たちか。先も言つたとおり、警備隊の代わりに周囲警戒を頼むぞ」

「其のことなのですが、オーガを斃した者、我々に一人心当たりがあります」

「……何？」

「ほう、其れは興味深い」

萎縮したフィエナの代わりにレイルが口にした内容を聞き、ゲアハルトとベルディオは驚愕に目を開いた。



「我々が先日知り合った一人の少年　昨日ギルドで傭兵登録したばかりなのですが、彼は単独でトロールを撃破しています。また、その身に宿す魔力も膨大なもの。可能性は有るかと」

「その話は聞いたことがありますね。初期ランクがBの期待の新人ほら、昨日観測された魔力の持ち主ですよ。報告は上げたと思いますが」

「ああ、あの　。成る程……………確かに残員を考えると……………そうなるか。良いだろう、お前たちも共に来い。事実の確認が必要だ」

「了解しました。皆も其れでかまわないな？」

「はい、大丈夫です」

レイルの確認に、三人を代表してフィエナが答える。これで、トリーの安否も直ぐに分かるだろう。

再び修練所に向かうゲアハルトとベルディオに続き、フィエナ達も歩き出した。

Side　ゲアハルト

トリー・シジウ。男性。十六歳。赤黒い刀身の長剣を武器にする。ギルド登録時の初期ランクはB。出身地不明。

ゲアハルトの知っているトリー・シジウの情報である。これに加えて、未確認では有るが魔人である可能性も高い。トロールを単独で撃破したと言うのだから、恐らくは事実なのであろうが。

（然し、出身地不明と言うのは……………。あれほどの魔力を持ち、噂に上がらない筈も無いが）

魔力を抑えていたとしても、生まれた時より其れが出来た訳では有るまい。或いは、余程の辺境の出身なのか。

オーガを斃したのが彼ならば、その力も含めて確かめる必要がありそうだな。無論、生きていればではあるが。

だが、街の被害を見る限り、戦闘そのものは短時間で終わったようだ。人的被害は兎も角、倒壊した建物も少ない。短期でオーガを斃したのなら、トーリ・シジョウが死亡している可能性も低いだろう。

「所でゲアハルト。オーガの死体を確認するのは結構なのですが、此れからの事についてはどの様に考えているのですか？」

「街が健在であつたのは幸いだが、魔物の討伐は中断したからな。今からもう一度、と言うわけにもいかない以上、あちらの出方を待つしかあるまい」

戦力の建て直しも急務であるし、警備隊がほぼ全滅した以上、ゲアハルトら傭兵が街を離れるわけにもいかない。

「黒幕さえ姿を見せてくれれば、どうとでもなるのだがな」

「前も同じような事言っていますでしたか？ まあ、気持ちは分かりますが」

「ままならんな……」

その対策に追われるであろう事を想像すると、頭が痛くなる。王都にも救援は頼んだものの、距離を考えると、余り当てには出来ない。

其れを考えると、オーガを斃した可能性のあるトーリ・シジョウの協力は是非とも得たいものだが

「おや。着いたようですよ、ゲアハルト」

「む？　そうか。なら、先ず件のオーガを確認した後に、オーガを斃した者について聞くとしよう」

「了解しました。ファールリエルさんたちもそれで宜しいですか？」

何か思うところでもあったのか、此処に来るまで終始無言であったファイエナ達が、ベルディオの言葉にうなずくのを確認し、ゲアハルトは警備隊本部へと入っていく。

既に連絡が行っていたのか、本部内へ入って直ぐに警備隊の非戦闘員が二人、ゲアハルトたちを迎えた。

その二人に事情を話す間こそあれ、ゲアハルトら六人はオーガの死体が置かれている裏の修練所へと案内される。

修練所に近づくにつれ、えもいわれぬ異臭が漂ってくる。恐らくは、オーガの死体の腐臭。夏場ゆえか、只でさえ朽ちるのが早い下等巨人種の腐敗速度は、より増しているようだ。

それにしても臭い。余りこついった事に慣れていなさそうなファイエナは、特に顔色がわるく、今にも嘔吐しそうなほどだ。

「ファイエナ・ファールリエル。辛いのなら、本部の一室で待っているが良い。どの道、君たちにはオーガを見てもらったところで大して意味は無いからな」

「……済みません。お言葉に甘えさせていただきます」

辛うじて、と言った体で細々と呟く。慣れていなければ、大の大人でさえ耐えられないであろうその異臭に、未だ耐えていられるのは賞賛に値するが、これ以上は流石に無理であろう。

「私も一緒に行くわ。こんな状態のフィエナを一人には出来ないもの」

「分かった。そっちの君、彼女たちを臭いの届かない部屋に案内してやってくれ」

「了解しました」

フィエナ達が来た道に戻っていくのを見送った後、再び修練所に向かつて歩き出す。

「……所で、今警備隊で動けるのは何人だ？」

「戦闘要員は、オーガによってほぼ全滅させられましたから……。そうですね、戦えるのは無理しても十人前後かと」

非戦闘員を除いた警備隊の総数が、確か三十人前後だったか。戦える十人と言うのも比較的軽傷だったと言っただけで、実際はまともな戦力としては数えれまい。

魔物相手には傭兵が居るため、警備隊は対人に特化していたのが仇となったか。警備隊も決して弱くは無いが、相手にダメージが無いのだからどうしようもない。

魔物が徒党を組んで襲撃してきた場合、実に遺憾な事態に陥ることとは想像に難くない。

其処を如何するかがゲアハルトの腕の見せ所なのだろうが、正直一介の傭兵風情にどこにかできる状況では、既に無くなっている。大体、ゲアハルトは大規模戦での指揮を執った経験など、数えるほども無い。だというのに、一体神は何をお考えなのか。

防衛の要所にある要塞にも匹敵する堅牢さを誇るこの街だが、オーガの件は別としても、はてして魔物相手に持ちこたえられるもの

だろうか。

「ああ、着きましたよ」

考え込むゲアハルトを、修練所への到着を知らせる警備兵の声が、現実へと引き返させる。

顔を上げれば、目の前には修練所への扉。ゲアハルトですら、其処から漂う悪臭には顔を顰めずにはいられない。

「氷結系の魔術が得意な奴は居なかったのか？ 流石にこれは……」  
「はは……。腕利きの魔術師は、殆んどが討伐隊に参加してしまいましたから……」

苦笑する警備兵に、ゲアハルトはため息で返す。

正直な話、今すぐ回れ右して無事だった酒場で一杯やりたい所だが、ギルドの長としての義務を放棄するわけにも行かない。

事が片付いたら、秘蔵の火酒ウオッカでオーガの腐臭を記憶から洗い流そうと心に誓いながら、ゲアハルトは扉を押し開いた。

「うっ……」

「これは……」

「何ともはや……」

「臭せえ……」

一度この臭いを嗅いだであろう案内の警備兵を除き、ゲアハルトら四人は顔を顰め、鼻を押さえる。

その悪臭に引き返そうとする我が足を懸命に抑えながら、ゲアハルトは修練所の中央へと歩みを進めた。

其処に鎮座するのは、無造作に放り捨てられた悪臭を放つ二つの肉塊。袈裟懸けに体を両断されたオーガの死体は、既に表皮の大部分が腐食し、かくもグロテスクな異様を見せていた。

「ベルデイオ？」

「ええ……。あれで間違いありません。袈裟懸けに一太刀で両断されていますね……。一体どれ程の業物を持っているのでしょうか、シジョウ・トーリは」

ゲアハルトとて、オーガ一匹の単独撃破など然程苦勞もせずに行えようが、成る程、只の一撃でその命を刈り取るなど、ゲアハルトですら困難な絶技だ。

「此れを殺った者の名は分かるか？」

「いえ、見ていた者の話によると、オーガを斃して直ぐに氣を失ったそうですから。只、赤黒い長剣持っていた黒髪黒目の少年だと言うことは確認しています」

赤黒い長剣に黒髪黒目の少年。確かに其れは、トーリ・シジョウの特徴に一致する。

「では、その他に何か特徴は？」

「そうですね……。他の特徴となると、黒いフードを身につけていたというくらいしか……。ああ、そう言えば、この大陸では見たことの無い素材で作られた、変わった服を着ていました」

「黒いフードは知りませんが、トーリが変わった服を着ていたのは確かです。恐らくトーリで間違いないかと」

警備兵から特徴を聞き、トーリ・シジョウ本人で間違いないと断言するレイル。隣のジーンも其れに同意するかのように頷いている。

「その者は今何処に？」

「外傷は無かったので、彼の泊まっている宿に運ばれたはずですが、すみません、何分後始末に気を取られていまして、どの宿かまでは……」

「否、かまわない。今の話で大体の目星は付いたのでな、君たちは君たちの職務を果たしてくれ」

そう言いながらレイルとジーンの二人に目を向けると、彼等は委細承知とばかりに頷いた。

その宿を知っている、否、同じ宿に泊まっていると言うことだろう。ならば、後は彼等に案内を任せればいい。

「よし、では彼に会いに行くとしようか。二人とも、案内を頼む。

それとベルディオ、序でに此れを事が終わるまで何とかしろ。臭くて堪らん」

「了解しました。凍<sup>コンゲリット</sup>て付け、悠久の刻より外れ其の身を留めよ」

ベルディオの唱えた呪文に呼応し、オーガの死体が巨大な氷に包まれていく。

生体ほどではないとはいえ、魔術に掛かりにくいオーガを、此れほど容易く凍らせることが出来るのだから、ベルディオの卓越した技量が伺える。

完全に氷棺に封じられ、悪臭を外に放つことのなくなったオーガの死体を満足そうに眺めた後、ゲアハルトはレイルとジーンを促し修練所の出口へと歩いてった。

## 第一章：第八節 決戦（後）（前書き）

私の地元にも原発があるんですが、福島原発の件で結構影響でそうですね。型も同じだそうですし。

三号機と四号機の運転が送れそうです。寧ろ中止になる可能性も……。



## 第一章：第八節 決戦（後）

トーリ・シジヨウとオーガが戦ったと思しき場所は、地面が抉れ、其の一体だけが焦土と化していた。

「派手に戦ったものだ。炎熱系の魔術に、あの痕跡は風刃か？ 通用しなかったとはいえ、大した威力だ」

「後始末も大変そうですね。いや、家屋に火が移らなかっただけでも幸運ですか」

だが、戦闘に巻き込まれたのであろう、何軒かの家屋が崩れているのが見て取れる。痕跡から見て、恐らくはオーガの攻撃によるものだろうが、一日二日では片付きそうに無い。

今現在も、街の住民や非戦闘員の警備兵等が総出で始末に当たっているが、一向に終わる気配が無い。

「まあいい。それより、トーリ・シジヨウのガラドヘイム防衛戦への参加の話だが、頼めそうか？」

「それは……、トーリさんの性格を考えると、難しいかもしれませんが」

「性格？ 其処まで難儀なのか、トーリ・シジヨウは」

「いえ……その……何というか……」

何かを迷うように言葉に詰まるフィエナ。其れを見てレイルが横から助け舟を出した。

「トーリは死を極端に恐れています。だから討伐隊にも参加しないと、そう言っていました」

「……は？」

予想外の一言に、ゲアハルトは間の抜けた一言を返してしまう。

傭兵だろうと一般人だろうと、死ぬのを怖がるのは至極当たり前のことだ。だから、高確率で死ぬ危険のある幻魔の森討伐隊やガラドヘイム防衛戦に参加しようとしなのは理解できる。

だが、其れならば何故この街に来たのかが分からない。

討伐隊の募集は、国中に出していたのだ。少なくとも、旅をしていたというのであれば、今この街が穏やかならざる状況にあるという事を、知らないはずが無い。

其れに、聞くとところによると、フィエナ達が彼に始めて会ったとき、彼は幻魔の森から出てきたという。果たして、極端に死を恐れる者が幻魔の森から出てくるだろうか？

ましてや、其の時の彼は未だ傭兵ですらなかったのだ。如何考えても、幻魔の森から出てくる理由が無い。

其れこそ、つい先ほど彼はオーガすら単独で斃しているのだ。此れで死を極端に恐れるなどと、誰が信じれようか。

「其れについては確かに疑問では有りますが、然し彼の言葉が嘘だったとは思えない。明らかに感情の箍が外れ、魔力の制御すら成っていないかった」

「……それは、もしか昨日観測された魔力の？」

ベルディオの疑問を肯定し、レイルは其の時のトーリの様子について語った。

成る程、話を聞く限りでは、確かに死を恐れているのだろう。だが、それ故に疑問は深まるばかりだ。

「ゲアハルト、考えていても仕方有りません。ちょうど宿にも着いたようですし、こういう事は本人に話を聞くのが一番ですよ。宿は此処で間違いないのですよね、ファールエルさん？」

「はい。この宿の二階に、トーリさんがとった部屋があります」

それほど高級な宿でもなく、かといって安宿というわけでもない。宿としては中堅ぐらいだろう。其れなりに値は張りそうだが、Bランク以上の傭兵が泊まるには手頃な宿か。

宿の二階部分を一瞥し、ゲアハルトは扉を開け宿に入った。

ガラドヘイム傭兵ギルドのギルドマスターが入ってきたのを見て、宿の主人の顔に驚愕が浮かぶ。然しそこはプロか、すぐさまそれを押し隠し用向きを尋ねてきた。

「トーリ・シジョウに会いに来たのだが、構わんか？」

「は、はい。それは勿論。ただ、まだ気を失ったままですか？」

それを聞いて、サーシャが宿の主人に詰め寄った。

「まだ目が覚めないの？ 原因は？」

「お医者様がおっしゃるには、なにやら休眠状態が如何とか……」

「休眠状態？ 成程、魔力の過剰使用で負荷がかかったのね」

サーシャが納得したように何度も頷いている。実際、高い魔力を持った魔術師が、自らが扱える魔力の限界を超えて過剰使用したために気を失い、休眠状態に陥ることなどさして珍しいことではない。だが、一度こうなれば、恐らく数日間は無眠のままであることが多い。

「これでは、トーリ・シジョウの性格云々以前に、ガラドヘイム防

衛への協力など望めんな」

「此ればかりは無理にも起こせませんからね」

「仕方あるまい、ギルド本部に戻りこれからの対策を考えるか。フアーリエル君たちは他の傭兵と共に街の警備を頼みたいが」

「分かりました。わたしたちは、一度トーリさんの様子を見てから警備に回ります」

「うむ。では主人、騒がせたな」

ひたすら恐縮している宿の主人に一声掛け、ゲアハルトとベルディオは宿を後にする。フィエナ達は、宿の主人から鍵を借り受けトーリ・シジョウの部屋へと向かったようだ。

「ベルディオ、此処からが正念場だ」

「此れほどの戦い、あの頃を思い出しますね」

「懐かしんでいるときではないぞ。やる事は山済みなのだからな」

ベルディオをたしなめながらも、ゲアハルトの口元には微かな笑みが浮かんでいる。

ガラドヘイムの戦力は半減し、いつ魔物が襲来してくるかも分からない。そんな危機的状況にあってもなお、ゲアハルトに焦りは見られない。

当然だ。この程度で慄くほどゲアハルトは物分りがよくない。どれ程の困難が立ちかはだかろうとも、一切合財まとめてぶち壊す。鉄槌の異名はそのためにあり、其れこそがゲアハルトの生き方なのだから。

刻にして未明。偵察に出ていた傭兵の一パーティーより、幻魔の森から前代例無き大量の魔物の群れが押し寄せているとの報告が入った。

此れを聞き、ガラドヘイムは即座に戦闘態勢へと移行。街中を警戒警報が鳴り響いた。

事前に仕掛けておいた魔術トラップのお陰か、魔物たちの進行速度は遅く、ガラドヘイムへ到着するのは空が白んでくるころとの事。

既にガラドヘイムは、ゲアハルトの指揮で万全とはいいがたいものの、最善の迎撃準備が完了している。傭兵や動ける警備兵たちも配置につき、今か今かとその時を待っている。

「！ 見えたぞっ！」

右手から薄っすらと日が顔を出し、空が徐々に明るくなってきた頃、誰かが前方より迫り来る黒い群を見つけ叫んだ。

仄かな明かりに照らし出される其れは、数多の魔物の姿。一般人が思い浮かべるであろうそれらをすべて抜き出したかのごとく、多種にわたる魔物たちが遥か前方をうごめいていた。

其処彼処から息を呑む音が響いてくる。

討伐隊がかなりの数を斃したはずなのだが、果たして何処にあれだけの魔物が隠れていたのだろうか。或いは、オーガのように誰かが他所から転移させたのかもしれないが。

「総員、砲撃戦用意！ 魔導兵装一番二番、魔力充填開始！」

圧倒的な魔物の群れを前に、開戦前から気後れしている傭兵たちを、ゲアハルトの指示が正気に戻した。

傭兵たちは、それぞれ迎撃体制に移る。其の中でも、街門の上に五つ設置されている、魔物の群れに砲口を向けた巨大な大砲は、一際威容を放っていた。

これは、威力と射程にのみ特化した砲撃魔術を、魔力の消費のみで発動するために作られた魔導兵装、其の試作品である。

魔力さえあれば、魔術の才に関係なく砲撃魔術を放てるこの大砲は、容易く戦況を変えることを可能とする。であるが、既にこの大砲の研究は頓挫している。

確かに威力は高く射程も長い。だが、魔力の重点に時間がかかり、なおかつ一度使用することにより全面的なオーバーホールを要するこの大砲は、兵器としての費用対効果が悪すぎるのだ。

ガラドヘイムにある五機の大砲も、不要になった試作品をベルデイオが伝を使って貰い受けた物だ。

故に、本格的な施設の要するオーバーホールが出来ず、一度放てば部品が劣化し二度は使えないこの大砲は、文字通り使い捨ての消耗品である。

だが、威力はある。上手く使えば、かなりの数の魔物を掃討出来るだろう。

「良いか、ギリギリまで引き付けるんだ。成るべく多く巻き込むぞ」

迫り来る死の群れに、今にも引き金を引きそうになっている砲手にゲアハルトが声をかけ、落ち着かせる。

タイミングが重要なことから、恐怖で折角の切り札の一つを台無しにしたらうわけには行かない。

誰一人として音を鳴らさないガラドヘイムへと、魔物が轟かせる地響きの音が数百メルテス程まで近づいたその時、ついに其の号令が轟いた。

「魔導兵装三番から五番魔力充填開始。一番二番放<sup>て</sup>ええええ！」

轟っ！ と二筋の光弾が天空を裂き、蠢く黒い群へと着弾する。地上に極小の太陽が生まれたかのごとき閃光が一帯を覆い、一瞬遅れて凄まじい衝撃と轟音が傭兵魔物の双方を襲った。

閃光の消えた後には、二割近くを消滅させた魔物の群が在った。其の余りの威力に、傭兵たちは絶句し、魔物すら一時其の進攻を停止した。

「圧倒的だな、この兵器は。だが、まだだ。弓兵、魔術師部隊は斉射用意！ 魔導兵装の魔力充填も急がせろ！」

「『はっ！』」

街壁の上にいた警備兵や魔術師たちが、それぞれ弩<sup>バリスタ</sup>砲に矢を番え、杖を構えて詠唱を開始する。其の目が見据えるのは、眼下の化生。

「良し……。斉射始め！」

号令と共に、空を鉄と魔の矢が覆いつくす。動きを止めていた魔物に、其れを避ける術は無い。魔物の群の先陣に着弾した其れは、瞬く間に魔物の死屍を晒していく。

雨霰と降り注ぐ弾幕に、魔物は引くも進むも叶わず、其の身を穿たれる。

「魔導兵装三番から五番、魔力充填完了。何時でも撃てます！」

「撃ち方止め！ 十秒後魔導兵装発射。三番は敵後方を、四番五番は先陣へ照準合わせ。総員、対閃光対衝撃防御。五、四、三、二、一、今！」

三度地上に陽が瞬き、赤光と豪風が戦場を包み、巻き上がる粉塵が魔物を覆い隠す。

晴れやらぬ粉塵に、傭兵や警備隊は次手を決めかねている。此方が圧倒的不利なのだから、無駄弾を消費するわけにもいかない。故に、敵の姿が見えぬ今、委細の攻撃をしかねているのだ。

「！」

静寂を打ち破るような咆哮一つ。

刹那、魔の群を覆いし粉塵の内より、一匹の狗が飛び出してくる。只の狗ではない、凡そニメルトルにも達しようかという其の体躯、妖しげな紫炎を纏いし其の姿は、正しく化生の物であろう。

「ヘル……ハウンド……！」

誰かの半ば悲鳴じみた声が聞こえる。さもありなん。煉獄に棲まいし魔狼の眷属なのだ、見えて嬉しいものでは有るまい。

「如何します、ゲアハルト。あれには弓も魔術も効きませんよ？」  
「ふん。是非も無い」

只一言をつむぎ、傍に立て掛けてあった戦鎚を手に構えるゲアハルトへ、ベルディオが恐る恐る声を掛けた。

「……あの、ゲアハルト？ まさか貴方」



「後は任せた」

跳躍。ゲアハルトは一息に街壁を飛び越え、ヘルハウンドへと降下する。

「ぬおおおおおおお！」

可視化するほどの高密度な魔力を籠めた渾身の一撃。十数メルトルの上空からの落下速度も加わった其れは、容易く魔狼の頭蓋を砕き、直下の地面を大きく陥没させる。

ゲアハルトの攻撃はそれでは終わらない。着地時に起こった一瞬の膠着の後、ヘルハウンドに続いて迫り来た魔物数体を屠り、付着した血糊を払い落とした。

其の姿、戦鬼の如し。

「俺はゲアハルト・シュタイナー。鉄槌ゴッドハンマーの名を戴きしガリムの騎士なり！ 命の要らぬ者から疾く参れ！！」

其の名乗りに呼応するかのように、魔物たちの進攻が再開する。迫る地響きを、ゲアハルトの背後から轟く関の声が押し返す。

「今こそ、我等全力を賭して戦う時！ 刃持ち敵を討て！ ゲアハルトに遅れを取るな！！」

「『うおおおおおおお！！！！』」

魔術による拡声で部隊を鼓舞するのは、街壁の上に居るベルデオ。ゲアハルトの参謀として知られる彼の合図と共に、隊は陣形を整え、魔物の群とぶつかり合う。

二つの軍勢がぶつかり合った瞬間、鮮血が空を染め、肉片が地を

覆った。

魔物を斃せば傭兵が、傭兵が討たれれば魔物を。一度二度と剣戟爪牙が振るわれる毎に、凄まじい速度で互いの死者が増えていく。

だが、斃しても斃しても後から湧いて来る魔物に、一晩では疲労も覚めやらぬ傭兵たちは、時間と共に不利になるは必定であろう。故に、決着は早期で無くばならない。

とは言うものの、地力が違う以上其れもまた難しい。

此処に在中で最強の傭兵たるゲアハルトや、ファイエナ達『トニトルス』を始めとして、名だたる傭兵も居るには居るが、大多数は中堅程度の実力者だ。

雑魚には勝てても、多少強い魔物が出てくれば、途端に押されていく。元々人間より魔物のほうが強く出来ているのだから、其れも仕方の無いことではあるが。

「ぬおおおお！ 総員、怯むな！ 常に複数で敵に当たれ！ 出来るだけ単独での行動は避けよ！！」

其の中でいて、否、その様な状況だからこそ、ゲアハルトの奮戦振りは異様とも言えるほどだった。

数百ケイグリムもある巨大な戦槌が一振りされる毎に、並み居る魔物が血肉を散らし、戦槌が的を外し、地を打ったかと思えば、巻き起こる衝撃波が魔物を容易く吹き飛ばす。

まさに圧倒的なまでの武勇を持って、ゲアハルトは戦場に君臨していた。

「ふん！」

衝撃波に耐えて獲物を振り上げたミノタウロス。その頭を戦槌で砕き、開いた左手で魔物を掴み別の魔物に叩き付けた。

さながら嵐の如き彼の奮戦は、其れを見る傭兵たちの士気を上げ、絶対不利な戦線を辛うじて維持している。

「ええい、限が無いわ！ このままでは全滅も時間の問題か……。せめて国軍が来るまで持てば　むっ！？」

思考により、僅かに集中が削がれた其の瞬間、四方より複数の魔物がゲアハルトに其の爪牙を振り下ろした。

反応が送れ、且つ攻撃直後だったゲアハルトは、其の半数を迎撃するものの残る数体を防ぐには至らない。

（いかん！）

咄嗟に身を投げるが、其の程度で回避できるほど魔物の攻撃は甘くは無かった。致命傷は避けられるであろうが、其の傷は確実に戦闘続行に支障を及ぼす重傷であると、結果を見るまでも無くゲアハルトは理解した。

最早此処までか、とゲアハルトが覚悟した正に其の時、何処から飛来した魔の矢がゲアハルトを囲む魔物たちの命を一瞬にして奪っていった。

「何っ！？」

地に倒れると同時に、すぐさま身を起こし辺りを見回すゲアハルトだが、魔術を放ったものの姿は見当たらない。

或いはベルディオかとも思ったが、彼は弓兵・魔術師混合部隊を率い、己もまた渾身の魔術で持つて敵後方に攻撃を加え続けている。

どう見ても、ゲアハルトをピンポイントで援護する余裕は無いだろう。

相対する魔物を牽制しながら、不可解な援護のもとを探るゲアハルト。其の時だった。大戦の最中おおいくさでありながら、静寂を打つかのうに”彼”の声が聞こえたのは。

「これはこれは……、囃子おどろこに惹かれて来て見れば、今日は何の大祭だ？」

其の声が聞こえた瞬間、ゲアハルトは魔物を一掃し、ガラドヘイムの方へと向き直る。其処には余りにも奇妙な光景があった。

傭兵たちが血花を咲かせ、一体でも多くの魔物を撃滅せんと戦う中、”彼”は唯一人、戦場に舞う何れかとも異なる、ある種独特の雰囲気をもつて、其の煉獄を闊歩していた。

奇妙なのは、”彼”よりも寧ろ其の周囲の方であろう。

傭兵たちはまだ良い。圧倒的不利なこの状況で、他人にまで気を取られている暇などありはしないのだから、気付いていなくとも不思議は無い。だが、魔物となると話は変わる。

明らかに目の前を通り過ぎたというのに、何れの魔物も”彼”を害そうとはしない。むしろ、其処に”彼”が居る事すら認識していないようにも見える。

否、そもこの戦場で”彼”の存在に気付いているものが、果たしてゲアハルト以外に居るのだろうか。

直ぐ背後の魔物に意識を向けながらも、ゲアハルトは”彼”から目を離す事が出来ないでいた。

黒いローブを身に纏い、左手に開かれた書物を持ち、右手には赤

黒い長剣を携えた姿で悠然と歩みを進める”彼”は、さながら悪魔を見ているかのような錯覚をゲアハルトに与えていた。

「……トリー……シジヨウ……」

その外見特徴に合致する者を、ゲアハルトはたった一人だけ知っていた。

本来ならば聞こえるはずが無いであろうこの距離で、”彼”

トリー・シジヨウは、ゲアハルトが微かに呟くと同時に、其れに答えるかのごとく口元を歪めた。

「ッ!？」

まさかこの距離で聞こえたのか、と驚愕で目を見開くゲアハルトをよそに、トリー・シジヨウは書物を掲げ一言呟いた。

音としては聞き取れなかったが、ゲアハルトの目には其れが『跳躍』と言っているように見えた。

真の驚愕は、寧ろこの時であった。トリー・シジヨウが何事か呟いた半瞬後、彼の姿は影形残さず掻き消える。同時に、ゲアハルトの背後で肉を断つ鈍い音が響いた。

振り返ってみれば、其処には右手の長剣を振りぬいたままのトリー・シジヨウの姿があった。

「……無詠唱での転移とは、聞きしに勝る実力だな」

ゲアハルトは構えていた武器を下ろし、トリー・シジヨウに話しかける。

事前にフィエナ達から聞いていた情報から考えると、彼が今此処に立っている理由が分からない。死を人一倍忌み嫌うならば、生道

無きこの死地に自ら身をおきはしないだろう。

転移を無詠唱で行える彼が参戦してくれるならば、大幅な戦力向上が見込める。だが、彼が何を考えてこの場にいるのかが分からない以上、諸手を挙げて喜ぶわけにもいかない。

そんなゲアハルトに、トーリ・シジヨウは長剣に付いた血糊を掃い、事も無げに答えた。

「何を聞いたかは知らないが、取り敢えず先に魔物を何とかしないか？」

「……良いだろう。だが、一つだけ聞きたい」

背後から襲い来る魔物を、振り返らずに両断したトーリ・シジヨウは、無言で続きを促してくる。

危なげなく死角からの攻撃にも対処する彼に、内心感嘆の声を上げながらも、其れを表に出す事無くゲアハルトは話を続けた。

「君は……死を極端に忌避している、と聞いたのだが？」

その問いに、トーリ・シジヨウの表情が僅かに揺らいだ。

「それは」

『「う、うわあああああ――！」』

「ッ!？」

「何だ!？」

「それは」

「うわあああああ!!」

「ッ!？」

「何だ!？」

統利の言葉を遮るかのように響き渡る悲鳴。其れを聞いた統利と戦槌の戦士は、悲鳴の上がった方へと顔を向けた。

「あれは……!」

『トロールか!』

嘗て、この世界に降り立ったばかりの統利が、初めてまみえた魔物。統利の魔術すら大幅に軽減させるほどの防御力を持ち、並人では到底及ばぬ膂力を振るう巨人の末裔。

其れが十体、味方であるはずの魔物諸共、傭兵たちを蹴散らしていた。

「滅茶苦茶な……、敵味方お構い無しか」

戦追の戦士が得物を構えなおしながら、呆氣にとられたようにそう呟いた。

所詮は理性の欠片もない狂獣に過ぎないのだろう。明らかに敵味方の区別すら出来ていない。

とは言え、あれを放置しておけば、只でさえ不利な状況にある戦線が確実に崩壊してしまうだろう。実際、突如現れたトロールに、傭兵たちの士気は目に見えて落ちている。

『如何するのだ? 主よ』

『当然、塵だ。俺にとって害にしか成らないからな』

ジャラツ、と長剣の刃が分離し鞭状になったそれが、音を立てた。その物音を怪訝に思ったか、今にもトロールに突撃せんと得物を構えていた戦槌の戦士が振り返る。

「トリー・シジョウ？」

「別にあんたが聞いたことは間違っちゃいない。俺は人より生への執着が強いからな。少しでも危険があれば、其れに近付こうとは思わない。だが……、向こうから迫ってきた危険は別だ」

魔力を鞭剣に通していく。赤黒い刀身が、淡い輝きを帯びる。

刀身に神経が張り巡らされたかのように、感覚が鞭剣に広がるのが分かる。

「俺の命を奪おうとする者は、全て打ち砕くと決めている。此れも同じだ。俺がいるガラドヘイムへ侵攻している魔物、其れは我が命の脅威に他ならない。故に」

右腕を僅かに後ろへ引き、打突を放つかのように鞭剣を振り上げる。

「脅威は、実力を持って排除する」

「ギャ？」

重力を無視し、高速で飛来した鞭状の刀身が、呆気なくトロール一体の脳天を貫いた。

己が身に何が起ったのか、恐らく毛ほども理解していないであろうその巨人は、眼前の獲物を屠ろうと腕を振り上げた姿のまま、大地へと崩れ落ちた。



強い対魔の性質を持ち、並みの打撃斬撃では傷一つつかぬトロール。其れをあつさりと葬った統利に、ゲアハルトはおるか、死戦を繰り広げる傭兵たちですら束の間驚愕に目を見開いた。

「グギヤアアアアアアア！」

同胞を殺された怒りか、残る九体のトロールが咆哮を上げながら、統利へと突進してくる。対する統利は、左手の魔導書を仕舞い剣を（おき）構え、悠然と雰囲気ですれを待ち構えた。

一瞬だった。傭兵たちを蹴散らしながら、トロールの一体が統利から凡そ数メートルの距離にまで迫ったまさにその瞬間、不動の構えを見せていた統利の体が紫電の如く閃き、刹那の後にはトロールの眼前で剣を逆袈裟に斬り上げていた。

果たしてどれだけの者がその動きを見切れたであろうか。人も魔物も、恐らくはその殆どが身体強化に使われた魔力の残滓が見せる影しか見えなかったに違いない。

それほどまでにその動きは鋭く、疾はやかった。

「ふっ！」

だが、それだけで統利の進撃は終わらない。

胴を断たれ、既に命宿らぬ同胞の肉ごと、統利を押し潰さんと振り下ろされた石剣。それを、僅か身を動かすことで避け、そのトロールに鞭状に展開した剣を巻きつけた。

「その程度で俺を殺そうなど、四十と六億年、早い……！」

その言葉と共に、統利が鞭剣を持った右腕を思い切り引いた。肉を裂く音と共に、トロールが無数の肉片へとその身を変えた。

奇しくもその光景は、嘗て統利が始めてトロールを撃破せしめた時と、酷く似通っていた。

「グギョアアアアア！」

突如響いた断末魔の叫び。背後より聞こえたそれに統利が振り向くと、統利を襲おうと腕を振り上げた格好で、戦槌の戦士により胴体を砕かれたトロールが、ゆっくりと倒れていく姿があった。

「ふむ……。無用かとは思ったが、身体が動いてしまったのでな」  
「いや……。助かった。感謝する」

実際、あのトロールの動きは察知していたし、その対処も瞬時に幾通りか考えていた。しかし、彼の助力のおかげでより安全に切り抜けられたのだから、統利としては十分感謝に値する事だ。

短い会話を終え、統利と戦槌の戦士は背中合わせに武器を構えた。既に二人の周りは、残る六体のトロールに包囲されていた。

「流石に仲間が四体も殺られて、それでも矢鱈に攻撃してくるほど馬鹿ではない、か」

「如何に最下の巨人と言えども、その程度の知能はある。痴愚と侮つては、命を落とすぞ」

「一度死に掛けたからな。それくらい分かってる」

とは言え、最早この程度の相手に苦戦することが無いのも事実だ。隙さえ見せなければ大事無いだろう。

「そう言えば、アンタの名前は？ ガラドヘイム傭兵ギルドのギルドマスターって事は知ってるが」

トロールを牽制しつつ、統利が戦槌の戦士へと尋ねる。

敢て膨大な魔力を放出しているため、トロールは此方を警戒し、攻撃を加えてはこない。ならばこそ、今のうちに聞ける情報は聞いておくべきだろう。

何せ、目が覚めてから状況も分からず、ただ衝動のままにこの場へと来たのだ。如何に統利と言えども、この戦場の魔物全てを屠るのは不可能である以上、最低限勝利条件は確認しておきたい。

「ゲアハルト。ゲアハルト・シュタイナーだ。人からは、鉄槌アイゼンマーなど」と大層な名で呼ばれている。まあ、ゲアハルトと呼んでくれ」

「統利・熾条。統利と呼んでくれ。今のうちに聞いておきたいんだが、まさか何の勝算も無くこの戦いを始めたわけじゃないだろう？

魔物を殲滅する以外の勝利条件があるなら教えてくれ」

「いいだろう。ではトリー、現在の状況は分かるな？ 見ての通り、此方が押されている。だが、王都に要請した援軍が来れば、魔物など鎧袖一触に出来るだろう。我等はそれまでガラドヘイムを守りきればよい」

ガラドヘイムの街壁は非常に堅牢であるし、攻め来る魔物も極一部を除けばCランクの傭兵でも対処できる程度の強さしかない。基礎能力で負けていようと、戦いで磨いた技術や仲間との連携があればそう簡単に後れを取ることもないだろう。

但し、あくまで防御に徹していれば、ではあるが。

「兎に角、俺と君は強敵の遊撃だ。他の強者は兵を纏めて貰わねばならんからな」

「了解。先ずはこの醜愚な巨人からか」

「そろそろ痺れを切らすだろうからな。3秒コンドでいくぞ」

統利はその言葉に頷き、改めて長剣を構えなおす。

ゲアハルトの言葉通り、いい加減憤怒が忍耐の限界に来たのだろう。寸前まで統利の魔力をあれ程警戒し近付こうともしなかったトロールが、理性の欠片ない表情で襲い掛かってくる。

このあたり、トロールにとっては本能における恐怖の比重が低いのもかもしれない。どうでもいいことではあるが。

「良いな？ 3、2、1、行け！」

ゲアハルトの合図と共に、二人は素早く右方に動いた。

背後で二人を狙っていたトロール二体が相打つの音を聞きながら、統利は眼前のトロールが振り下ろす腕を断ち、心臓を突く。

急所は人体と変わりなかったのか、胸より鮮血を撒き散らし倒れていく。

先ずは一体。

統利は行き着く暇なく、魔力で強化した足でそのトロールを蹴り飛ばし、その隣にいたトロールへとぶつけ、動きを阻害させる。

「はっ！」

蹴り飛ばしたトロールの死体を足場に、同胞の死体に邪魔され、動きが一瞬停止したトロールの上空に飛び上がる。

そのまま宙で一回転し、落ちる勢いのままにトロールを両断した。

「何ともアクロバティックな体術だな」

声に振り返ると、其処には血糊の付いた戦槌を地面に下ろし、此方を見ているゲアハルトの姿があった。

彼の後方には、トロール六体の屍骸。その内二体は相打ちだとしても、統利が二体斃している間に、ゲアハルトはその倍の数のトロールを葬ったと言うのか。

「ゲアハルトこそ、流石はギルドマスターと言ったところか」

「なに、攻撃に定評があつてな。巨人の末裔と言えど、鈍重な下等種など相手にならんよ。

ふむ、如何やら他に然程難敵もないようだな。……良し。トーリ、右翼を頼む。俺は左翼を支えよう」

「中央は？」

「両翼で余裕が出来た分を回す」

『主。早速右翼が崩れかけておるぞ』

『何？ 分かった。折角の機会だ、もう少し魔術に慣れておくとするか』

「了解した、ゲアハルト。戦が終わったらまた会おう 【跳躍】」

視界が歪む。次の瞬間には、統利の体は先程居た場所よりも遠く、魔物の密集した場にあった。

統利が転移してきたことに気づいた魔物が、その爪牙を持って襲い来る。

「さて……、先ずは小手調べといくか」

その言葉と共に赤炎が巻き起こり、魔物を飲み込んでいく。

炎が消えた後には、黒く炭化した魔物の姿。自らが放った魔術の威力を見て、統利は口元を歪めた。

「素晴らしい。この魔導書、矢張り手に入れて正解だった。感謝するぞ、メフィスト」

『主には、精々我を楽しませてもらわねばならぬからな、当然のこ

とよ』

「ふ……、続けていくぞ。墜ちろ、神の怒りよ」

鳴り響くは、轟音を超えた爆音。魔術によって生み出された暗雲より、無数の雷霆が降り注ぐ。

それは以前統利がゴブリンに用いたものと、どれ程威力に差異があったのだろうか。雷の圧倒的なエナジーを前に身を晒し、焼ける前に粉微塵と散った魔物。魔物を砕いた勢いのまま、諸共に穿たれた大地がそれを見るものに知らしめる。

統利の猛攻は、然しそれでは終わらない。身体を強化し、疾風の如き速度で魔物を両断していく。

元より、戦いのセンスはあったのだ。自身を害そうとする『敵』を排除するために、何時実るとも知れぬ不断の修練を積んできた統利が、魔術と言う新たな力を使いこなせば、この程度造作も無いことであろう。

統利がその力を存分に振るい、魔物を屠っていると、後方、戦場の左翼より、先の雷にも匹敵する轟音が空気を揺らした。

振り返れば、遠目にも分かるほどに打ち上げられた複数の魔物。位置からして、それを為したのはゲアハルトだろう。

果たして何を如何のようにすれば、あれ程のことが出来るのか。

如何に比類なき力を手にした統利とはいえど、所詮はこの地に到るまで実践の一つも経験したことのない日本人だ。実戦にて技を磨いたであろうゲアハルトと比べれば、数段劣る。

流石はガラドヘイム傭兵ギルドのギルドマスター。鉄鎚リッツハンマーの名は伊達ではないと言うことが。

「流石……！ 此方も負けては                      ！？」

渾身の魔力を集め、いざ魔術を放たんとした統利だが、その攻撃は突如響いた関の声に中断を余儀なくされた。

「何？ 増援が来たのか！？」  
『そのようだ』

関の声と共に、戦場になだれ込んで来たその集団は、瞬く間に魔物の群を蹂躪して行く。

見れば、それが国旗なのであろう、その集団は一角獣と白鷺の描かれた旗を掲げている。

彼らが身に付けた鎧や、魔物を両断してゆくその剣は、仄かな光に包まれ、それが魔術にて鍛たれた業物であると誇示していた。

その武装だけでなく、それを扱う戦士もまた一流。彼らの武勇と援軍が来たことによつて再び士気を奮起させた傭兵たちにより、戦線は徐々に押し戻され、ガラドヘイムの防衛戦は魔物の殲滅戦へと移ろいでいく。

統利もまた、遅れじと魔物を一掃する。

戦場の流れは完全に人間側へと移り、既に魔物側に挽回の機会は無くなっていた。死を逃れようと、戦場から逃走する魔物すら逃さず、傭兵と国軍はその一体までも狩りつくしていった。

§

「終わったか」

死屍累々と横たわる戦場跡に、統利は剣に付着した血脂を拭いながら、誰とも無く呟いた。

その呟きに答えるでもなく、ゲアハルトが話しかけてくる。

「よくやってくれた、トーリ。君が来てくれねば、援軍到着まで持ちこたえられなかったやも知れん。ガラドヘーム一同を代して、礼を言わせてもらう」

「あんたこそ、面白いくらいに魔物が宙に舞っていたじゃないか。一体何やったんだ？」

「ふ……。何、君が来てくれたおかげで、力を温存しておく必要もなくなっただけ。存分に鎚を振るわせてもらったよ」

そう言つて、ゲアハルトは豪快に笑った。

それを呆れた様に眺めながら、統利はため息を吐いた。

「で、これから如何するんだ？ 一応こっちの勝ちだが、黒幕の正体は分からず、加えて、受けた被害も尋常じゃあないだろう」

「王政府も、十分な支援を約束してくれている。幸いにして、街そのものの被害は極軽微だから、如何とでもなるだろう。取り敢えずは」

「取り敢えずは？」

言葉を反復する統利に、ゲアハルトは周囲に散乱する魔物や傭兵の死体を指し、苦笑しながら答えた。

「戦場の後片付けと行こうか」

「……了解した」

鉄鎚を肩に掲げ、先ず街の周辺の死体を片付けようとしている国



軍と傭兵に近づくゲアハルトに、統利は剣を収め、その後を追って  
ガラドヘイムへと歩いていった。

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 第一章：第八節 決戦（後）（後書き）

主人公ターンの筈が、何故かゲアハルト無双になってしまいました。然し本当に何者だゲアハルト。最初はモブキャラのつもりだったのに、真坂此处まで強くなるとは……。

さて、散々引つ張った拳句、あっさりと終わってしまいました。これ以上書けそうに無いので、ご勘弁を願います。

一応この後、ガラドヘイム編のエピローグを挟んで、予定通り冒険の旅にでも出すつもりです。もしかすると、その前にもう一話挟むかもしれません。

取り敢えず、次話がどうなるか不明なので予告は無しで。

其れでは皆さん、又次話お会い出来ますことを祈って。

## 第一章：第九節 祝祭（前書き）

お久し振りで。鬼柳堂で御座います。

本作の大幅な改訂版を書いていたり、私が若干スランプに陥っていたりしたこともあり、拙作を楽しみにしていただいた皆様には、大変お待たせすることになり、まことに申し訳ございません。

短いですが、最新話です。急遽書き上げましたので、あまりクオリティは高くありませんが、楽しんでいただければ幸いです。

## 第一章：第九節 祝祭

開け放たれた窓より、街の喧騒を風が運んでくる。  
統利は、飲んでいたエールのジョッキを机に置き、祝祭の始まった街へと視線を向けた。

『アレほどの戦の後と云うのに、遅しいことよ』

「逆だ。あれほどの戦の後だから、だよ」

一口エールをあおる。

「幸い、傭兵を除いた人的被害は少なかったが、あの恐怖は人々の心に深く根付いた筈。それから目を逸らさせるのが、此れの目的だろ」

時間の経過が、人々の恐怖を薄れさせていくだろう。人は、忘れることが出来る生き物なのだから。

それに、魔物の中には爪牙や皮が高値で取引されているものもいたらしく、資金的には戦の傷が癒えるまで祝勝祭を行っていても、問題はないだろう。

「とは言え、事実上ガラドヘイムの人的被害が警備隊だけというのも、悲壮感を減らす一因となっではいるんだろうがな」

『その警備隊も、大半が戦争屋出身の独り身か。成る程、家族よりも隣人の方が死ぬ悲しみも少ないと言うことか』

戦場に嫌気がさしたり、一線で剣を奮うには歳を経た戦争専門の傭兵。彼等の多くがガラドヘイム等の町で警備の仕事についている

らしいが、戦場で幾年も過ごしてきた身からすれば、一般の民草とは馴染みにくいと言うことか。

民間人上がりの警備隊員は、殆どが事務屋だったりの裏方らしく、死傷者も数人だけだったとの事。

「因果だな……。まあ良い、この話は此处までだ。其れよりもメフイスト、お前に一つ聞きたいことがある」

統利の雰囲気ガラリと変わる。その眼に揺らめくのは、紛れもない憤怒。

魔物すら怯ませんほどの怒りを、姿無き悪魔に向けている統利の姿が、其処にはあった。

『落ち着かぬか、主よ。其ほどまでに』

「あの時、俺は目覚めて間も開けずに戦場に足を向けた」

『……………』

「何故だ？　ゲアハルトに語ったように、迫る驚異を排除するためか？　ハッ、馬鹿馬鹿しい！　幾ら俺でも……否、俺だからこそそんな思考はあり得ない。何故危機に飛び込む必要がある？　無いだろう。オーガと戦り合った時のように、逃げる事が出来なかった訳じゃない。地理が分からなくても、街道に沿っていけば、何れは他の街に辿り着いた筈だ。それこそ、魔術で身体能力を強化して走っていけば良い。其れで尚幾日も掛かるほど離れてはいないだろう。此れほどの街だ。加えて幻魔の森に隣接するほどの要所とあっては、近隣に有事の際に支援が可能な拠点としての街があったって、何らおかしくはない。国軍の救援だって、一日で来れたんだ。良く整備された道が、近隣の駐屯所と繋がっているんだろう。」

まあ、つまりだ。お前、俺に何をした？」

統利の詰問に、メフィストの沈黙が返ってくる。

統利の持つグラスにヒビが入る。今にも爆発しそうな憤怒を抑え込み、統利は再びメフィストを問い詰める。

「答えるよ【悪魔】。お前の事だ、どうせ」

『クツクツクツクツ、ハッハハハハハ！』

「貴様　！」

『流石だ契約者、こうも早々に気付くとはな。否、当然か。そ

の執着、如何な違和感も赦さぬ程。然らば、気付くは必定か。

ああ、正しくその通りだ。我の力により、主の感情を弄らせて貰った。我が楽しむために、な』

「　！　この　」

ガタンツと音を鳴らし、椅子が床に倒れる。

今にも破裂せんほどの怒りに震える統利を、突如響き渡ったノツクの音が引き戻した。

「　誰だ」

「わ、わたしです。フィエナです。えっと、何か叫び声がありましたけど、大丈夫ですか？」

不機嫌な統利の誰何に、吃りながらも気弱そうな声が返ってくる。それを聞き、統利は大きく深呼吸して心を落ち着かせる。

何とか怒りを抑え、統利は返事を返した。

「いや……、何でもない。今日は疲れたからな、少し横になってたら悪い夢を見てしまって　、みつともなく叫び声を上げてしまっただけ。気にするな」

「そ、そうですか？　ならいいですけど……」

「ああ　、そんなことより、用件はそれだけか？」

「あ……いえ、その……えっと……。わたしたち、これから祭りを回ろうと思ってるんですけど、トリーさんも一緒にどうですか？」

成る程、それも悪くはない。これ程の祭りだ、さぞ楽しめることだろう。だが、今は間が悪い。

抑えてはいるものの、今にも溢れ出しそうな怒りが、統利の内で燃え盛っている。祭りを楽しむ事など、到底出来そうにない。

「悪い……今はそんな気分になれない。済まないが、しばらく一人にしておいて貰えないか」

統利のその返答に何を感じたか、フィエナは僅かの沈黙の後に「分かりました」とだけ答えて、部屋の前から去っていった。

完全に気配が消えたのを確かめた統利が、メフィストに向かって言葉を発するよりも早く、メフィストの念話がそれを遮った。

『クク……。危うかったな、主よ。少し落ち着いてはどうだ？』

嘲るようなその声色に、統利は怒りの表情で齒軋りする。

だが、ここでまた我を忘れ怒りに身を任せれば、面倒なことになりかねない。

統利はそう自分に言い聞かせ、猛る憤怒を抑えていく。

「良いだろう。結果的に問題はなかったんだ、今回だけは不問にしてやる。だが、次はないぞ？もし又同じようなことがあれば、どんな手を使おうとも、必ずお前を消滅させてやる」

『ふん……案ずるな。我とて、これ以上余計な真似はせぬ、万が一にも主に死なれては、私の楽しみも無くなるのでな』

「その言葉、真であることを願うぞ」

その言が必ずしも真実ではないだろう。元より悪魔を自称する輩など、如何なる信も置くべきではないということか。

ただ、今の統利ではメフィスト相手に何が出来るわけでもない。故に、統利も表面上は引き下がったが、然し、統利とメフィストの間に出来た塞がり得ぬ亀裂は、統利のメフィストに対する信を完全に打ち壊した。

この先、彼等の間に信頼関係が築かれることは、恐らく二度と無いだろう。

『む……？ 主よ、何処に行くのだ？』

「気晴らしだ、フィエナ達と合流する。」

俺が許可するまで話

しかけるな、不愉快だ」

『……了解した、主よ』

だが、或いはそれすらもこの悪魔の思惑の内なのか。他者の人生をゲームにする、そんな輩にとっては統利のこの感情すらも、肴になり得るのだろう。

不愉快な。

メフィストに気取られぬように、心の奥の奥で『敵』を排除する術を思考しながら、統利はその感情を隠すことなく露にした。

S i d e   u n k n o w n



「がはっ……！」

鮮血が、暗闇の大地に撒き散らされる。

男は、地に片膝をつきながらも、自らを下した眼前の『影』睨み付けた。

「くっ……。君は」

男の言葉を遮るかのように、『影』から衝撃波が放たれる。防ぐ事も叶わず、男の体は宙に舞った。

「がっ………！」

真上からの追撃で、男は地面に叩きつけられる。

「ま……まさか、此处が見付かるとは思わなかったよ……。ぐっ………」

痛みに顔を歪めながらも、男は尚も『影』に向かって言い募る。

「迂闊だったよ……。幻魔の森での実験にかまけすぎて、君ほどの存在に狙われているのに気が付かなかったなんて、ね」

『……………』

「ふふ……。でも、この事を知れば、彼はどう思うだろうね？ 何せ、君は」  
「死ね」

『影』の翳した手に大気中の魔力<sup>マナ</sup>が集まっていく。それを見た男も、防御の魔術を行使するために魔力を集めるが、間に合わない。

無詠唱でありながら、瞬く間に高威力の攻撃魔術の術式を展開した『影』は、男に防御魔術を展開する間を持たせずに、光を撃ち放った。

暗闇に煌めく其れは、地上に生まれた旭光のように男を飲み込み、その背後にあつた屋敷ごと周囲一帯を覆った。

光が収まった後には、ただ荒野と穿たれたクレーターが在った。其処に男の姿は見受けられない。当然か、あれほどの魔術をまともに喰らつて尚、存在してられる人間など先ず居ないだろう。跡形もなく蒸発した筈だ。

余波を避けるために、上空に飛び上がっていた『影』は、その惨状を一瞥すると、その身を暗闇に溶かすように、その場から転移した。

その姿を眺める、一対の瞳には気付かずに。

「この力……やはりそうか。 さて、君はどうするのかな、熾条統利君……？」

T o b e c o n t i n u e d

## 第一章：第九節 祝祭（後書き）

これでガラドヘイム編は終わりです。

次回からは、フィエナ達と共に傭兵として主人公が各地を回ります。漸く話を先に進めることができると思うと、何やら達成感が……。正直、ガラドヘイム編に時間を掛けすぎた感がありましたからね。

さて、次回の更新は来週の土日になると思います。拙い愚作ではありますが、此れからも読んでやって下さいますと幸いです。其れでは、またお会いできますことを願って。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0791m/>

---

Satan's contactor ~ 悪魔の契約者 ~

2011年6月16日19時34分発行